☆君の笑顔が生きてる僕の証☆

哀ｌｏｖｅコナン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
☆君の笑顔が生きてる僕の証☆

【Ｎコード】
Ｎ４１６８Ｘ

【作者名】
哀ｌｏｖｅコナン

【あらすじ】
いつもの様に何気ない生活を送っていたコナンがある日突然病気に侵されてしまう。
病気に侵されながらも、頑張るコナンを見て生きるという事を痛感する。
そのコナンも、自分を支える人達にも感謝しつつ、病気に立ち向かって行く。
二つの選択で限りなく死に近いものでも、コナンは生き抜く事を選

択する。皆が見守る中、コナンは生きて帰って来れるのか??

他にも、レギュラーの心情をちょこちょこと描いています。覗いてもらえたら嬉しいです。

☆平和なひととき☆

“行ってきまーす”

月曜日の朝、大きな声で挨拶をし、学校へ出かけるコナン。

それを微笑みながら…。

“行ってらっしゃい”

と、送り出す蘭。

小五郎も、せかせかと依頼者の元へ出かける支度をする。

そんな、たわいもない日常が、ある時を境に一気に崩れはじめた。

“おはようございま～す”

ここは…帝丹小学校の1年B組。

担任の小林先生の声に元気に答える生徒達。

また、月曜日の朝がやってきた…。

“はぁー”

とため息をつく、コナンに灰原は呆れながら、言い放つ。

“算数なんてやってらんないって感じね…”

“あっりめーだろ”

と、だるそうに答えるコナンは、頬杖をつきながら、めんどくさそうに授業を受けている。

☆前触れ☆

ー体育の授業ー

“今日はみんなでドッチボールをやりましょう”

小林先生の提案で、ドッチボールをやることになったB組のみんなは大はしゃぎ。

白線をひいたり、ボールを用意したりする生徒の中、コナンは一人、佇んでいた。

そこに哀がやってきて…。コナンのおデコを触って見ると…。

“ちょっと、あなた…熱いわよ”

その様子に気づいた小林先生が、駆け寄ってきた。

“江戸川くん、どうしたの?”

“あっ、なんでもないです”

小林先生の問いかけに、なんでもないと答えたコナンにイラっとした哀は…。

“なんでもないわけないでしょ。こんなに熱いのに…”

“とりあえず、保健室行きましょ。”

と、少々強引に連れられた。

ー保健室ー

“３８．４…。ちょっと高いわね…。
今日はこのまま早退した方がいいわ”
“大丈夫だょ”

コナンの我が儘をダメっと一喝する。

その後、教室にランドセルを取りに行き、なくなく、コナンは帰宅した…。

コナンが帰った後、哀は小林先生にコナンの様子だと、素直に帰りそうもないから、家に電話した方がいいと、頼んだ。

そして、帰宅中。

“はぁ～まだ、こんな時間かよー”

コナンは腕時計を覗き込むと、時刻はまだ１２時前。こんな時間に帰ったら、余計な心配させてしまう。

とりあえず、夕方まで博士の家にいることにした。

事情を話し、博士の家でくつろいでいると、一本の電話が鳴った。

“おぉ、哀君か～。えっ、新一？”

その言葉を聞いたコナンは慌てて、“しー”と伝えると…。

☆哀の説教☆

“いや、新一は来とらんぞー”

と、話してはくれたものの、哀にはバレバレで、“いいから、代わってちょうだい”と凄まれてしまい、仕方なく、コナンに受話器を渡した。

コナンはバツを手で作って合図はするものの…

“無理じゃ、ばれとる”

と言われ、仕方なく受話器を受け取り、はぁ～とため息を一つしてから、電話に出た。

“どした?”

“どしたじゃないわよっ。あなたそこで何やってるのよ?まっすぐ家に帰りなさいって言われたでしょ?”

哀の説教の始まりだ。

“いいじゃねーか、少し位”

“いいから、今すぐ家に帰りなさい!これ以上風邪が悪化しても知らないわよっ。最も、これ以上遅くなったら、蘭さんの長いお説教聞くことになっていいなら、そこにいれば?”

蘭という言葉聞いたコナンは、ドキッとして、哀に尋ねた。

“蘭に行ったのか?”

“えぇ～、あなたの様子からして、素直に帰りそうもないから言っ

といたわよー。今頃心配して探してる頃だろうから、そのうち、迎えに来るんじゃない？
わかったら、今すぐ帰りなさい。いいわねっ？”
そこできられてしまった。

コナンは博士に受話器を返すと、ため息をして、帰ることにした。

“じゃあ、帰るよ博士”
“おぉ、気をつけるんじゃぞ”

風邪に寄る体調不良もたたって、探偵事務所までの道が遠く感じていた。

もう少しで探偵事務所だと言うところで、蘭にバッタリ会った。

“コナンくん！”
？あっ、蘭ねぇーちゃん…”

と、呼ぶと蘭はコナンに詰め寄り…

“あっ、蘭ねぇーちゃんじゃないわよまったく…。”

と、呆れていた…。心配で心配でたまらない顔をしている彼女を見ると、罪悪感が芽生えてくる。

“よかった”と、ホッとして、コナンの背からランドセルを降ろすと、コナンの手を繋ぎ…

“帰ろう”

と言って、歩き出した。思ったよりも、怒られなかったので、半ば安心しきっていたが、今は体調を気遣っているんだと思うと、嬉しさが、こみあげてきた。
探偵事務所に着くと、小五郎が心配な顔して立っていた…。

コナンと蘭のすがたを発見すると、ホッとしながら、詰め寄り…

“こらー、コナン！どこほっつきやがってたんだ？”

と、頭をくしゃくしゃ掻き乱した。

“お父さん、今日は怒らないで、もぅ反省してるよね？コナンくん？”
“うん”

そう言って、笑ってる見せると、安心したのか小五郎が、“早くねろっ”と、言い放った。

☆その夜…闇の扉が開いた☆

階段を一段、一段、登って行く途中、コナンはつまずくはずもない階段でよろけた。

それを見ていた蘭が、慌ててコナンを支えて心配している。

“大丈夫だょ”

と、笑顔を作って見せるが、余計に蘭を心配させてしまう。

布団に入って、蘭の作ったお粥を食べ終わるぐらいに、蘭が入ってきた。

“コナンくん、食べ終わった?”

“ぅん。”

蘭に渡された薬を飲むと、睡魔が襲って来たのか、そのままねてしまった。

その夜…8時ごろ、それは突然起こった。

急な喉の痛みをかんじ、咳き込むコナン。普段は治まるはずの咳が何分も続いている。

次第に、頭痛もしてきた。その咳に気づいたのか、蘭と小五郎が心配しながら、入ってきた。

“コナンくん!どうしたの?”

そういいながら、コナンの背中をさすっている。

“おい、大丈夫か?”

小五郎も、尋常ではない咳の仕方に、不信感を抱き、救急車を呼びに行った。

その間、蘭はコナンくんの背中をさすり続けていたが、咳ではなく、呼吸を乱すようになっていた。

“コナンくん…もうすぐ救急車来るから、もう少し頑張ってね”

次第に、胸が苦しくなり、胸を抑えながら、弱くなっていく、コナンの荒い呼吸が静かになり、その場でうつ伏せになって、倒れてしまった。

“…!!!
コナンくん!!
”

救急車が到着し、意識がないコナンを担架に載せて救急車へと運ぶ隊員の後ろを蘭はコナンの姿を覗き込みながら、ついてゆく。

救急車に乗ったコナンは、すぐさま、酸素マスクをつけられ、隊員達による、身体検査が行われた。

蘭と小五郎も付き添って、救急車は米花総合病院へと向って行った。

☆病室での蘭の想い☆

病院へつき、すぐさま、救急治療室へ運ばれたコナン。
外では蘭と小五郎が心配そうに治療室のドアを眺めていた。
“大丈夫だょね？コナンくん…”
“大丈夫に来まってらー”

小五郎に慰められながらも、祈り続ける蘭。

３０分後、コナンは酸素マスクをつけられたまま、ストレッチャーに乗せられ、出てきた。

すぐに、病室に運ばれたコナンは、看護婦さんによって、点滴を付けられ、そのまま、スヤスヤと眠っていた。

その間、小五郎と、蘭は先生と話しをしていた。

“まだ、はっきりしていないんですが、今回のコナン君の様子からみて、ただの風邪だとは思いにくいです”
“どういうことですか？”

驚いた。いつもの風邪だと、油断していたコナンの病状が、風邪じゃないなんて…。だったら、一体なんだっていうの？蘭は先生の言葉を待ち続けた。

“とりあえず、明日から検査入院をしてもらって、調べてみましょ

う。なので、しばらくは、学校をお休みさせてください。”

まだ、わからない…。もし、大変な病気だったらと、蘭の心を掻き毟る…。

いつからだった？

コナンはいつから、体調悪かった？

考えても、思い当たらない。いつも、元気にしていたもの。いつだって、明るかった。元気がない時なんてなかったもの…。

どうしてこんなことになったの？

どうして…？

蘭は気付いてあげられなかったコナンの身体がなんともありませんように。と、願うばかりだった。

病室で寝ている、コナンの元へ行くと、先ほどの辛さなんてなかったかの様に、スヤスヤと、寝息を立てて、寝ていた。

“わたし、今日はコナン君のそばに居てあげるわ”

小五郎にそういうと、コナンの手を握り、頬に当て、コナンの顔をしっかりみた。

コナンの前髪をさすりながら…。

“ゴメンね…気付いてあげられなくて…ゴメンね”

とつぶやいた。

☆小さな反抗☆

チュンチュンと、スズメのなく声が響く中、コナンはまだ、目を覚まさないでいた。

蘭が見守る中…。

“んっ……んー……あ。”

点滴が視界に入る中、蘭がコナンの顔を覗いた…。

“蘭ねぇーちゃん…”

その声にホッとした蘭は笑顔を見せた。

“よかった…コナンくん…。大丈夫?”

昨日の記憶が途中からなくなっていたコナンは、どうしてここにいるかがわからなかった。

辺りをキョロキョロしていると…。

“ここ、病院よ…”

“えっ?病院?”

“そうよ。コナンくん、昨日運ばれたのよ…覚えないの?……あっ、そっか。コナンくん、途中で気を失っちゃったんだっけ…。”

そのあと、蘭が一部始終を教えてくれて、ようやく理解できた。

“だから、検査入院するから、しばらく学校お休みよ?検査の結果が出るまで、我慢しててね”

そう言われた蘭の言葉に、内心がっかりしていた。

“じゃ、先生呼んで来るからね”

そういい、蘭は病室から出て行った。

そのすきに、コナンは酸素マスクと、点滴を外し、ベッドから降りた。息苦しさがあったが、構わず、立ち上がろうとした時、目眩までしてきた。

それほど、弱ってしまった自分の身体にも関わらず、大丈夫と言い聞かせ、病室の窓から抜け出した。

思う様に動けない自分の身体を支える様に、壁づたいに、歩き、どうにか、博士の家までたどり着いた。

博士に心配されたが、蘭が大袈裟なんだと誤魔化し、服を着替えて、いつも通り、学校へ登校した。

すこし、歩いたせいか、いつも通りに歩ける様になった。

なんとか間に合った、教室では、昨日のことを、皆に心配されたが、平気だとごまかした。

そして、小林先生が教室に入ってくるなり、言った言葉は…。

☆蘭のお迎え☆

“あっ、コナンくん、やっぱりいた。だめじゃない、黙って病室を抜け出したりしたらー”

バレバレだった。

“毛利さんが心配して電話してきたのよー”

その瞬間、どよめきが起こった。

“コナンくん、入院してたんですか～?”

“何やってんだょオメー”

“お医者さんのいうこと、ちゃんと聞かなきゃダメなんだょ～”

少年探偵団のお説教である。

“で?何で入院してたの?あのあと、連れていかれたの?”

“えっ?いやー、、、それがその～”

言いずらそうにしていたコナンを遮って、小林先生が教えた。

“昨夜、咳こんで布団の中で倒れて、朝まで病院にいたのよねー?コナンくん?”

“えっ、う、うん…。”

“ぇぇぇえぇ～”

“ダメじゃないですかぁー?”

“そぅそぅ、だめよね？今すぐ戻らないと、蘭さんの空手で、どうなっても知らないわよ？”

そんな冗談言ってると、廊下から、駆け足が聞こえてきた。

“コナンくん！ダメじゃない、病院抜け出しちゃあ…今すぐ戻ろう？”

蘭が、コナンの手をひいて、行こうとした時…。

“大丈夫だょ、蘭ねぇーちゃん…咳だって治まったし、風邪も治ったから…。”

“そんな事いって、ひどくなったら、どうするの？それに、検査入院するだけだから、少しの間我慢して…ね？”

蘭の言葉に、しぶしぶ了承した。

“ということなので、１週間、お休みしますので、お願いします”

そう、挨拶すると、コナンの手を引き、病院へ戻って行った。

当然ながら…病院へ戻ると、小五郎や主治医は大激怒。コナンはコテンパンに怒られたのだった。

もう、絶対しないと約束させられ、病室に戻された。とりあえず、途中で倒れたり、発作が起きることがなかったので一安心した…。

☆哀の再来☆

“検査入院だけだから…終わるまで、しばらくの辛抱だから、それまで、いい子で寝てようね？”

“はーい”

とはいいつつも、コナンは退屈で仕方なかった…。

とりあえず、明日から検査が始まることになった。

鎮痛剤を打たれ、眠っていると、夜、喉の痛みによって目が覚めた。

“ケホ、ケホ、ケホ、ケホ…”

軽い咳だったが、また、しばらく続いた…。無茶して病院を抜け出したから、こうなったのかな。と反省しつつ、咳が止むのを待っていた。

蘭は書置きを残して帰ってしまったようだ…。

こういう時、いないと心細いものだ。

その時、病室の扉があいた…。

苦しそうに咳をしながら胸を押さえてるコナンを見て、その人物は悲鳴のような声をあげた。

“くっ、工藤君!!…ちょっと、大丈夫？”

“はっ、灰原…”

片目を懸命に開いて哀を見るコナンはとても辛そうで、今にも倒れそうだった…。額には大量の、汗が流れていた。

哀は、急いでナースコールを押し、医者を呼んだ。

“何で、ナースコールを押さなかったの?その咳いつから?”

“すぐ…ケホ、ケホ……治まると思ケホ、ケホ……ったから……ケホ、ケホ……。多分、２０分ケホ、ケホ……”

“２０分も…?何やってるのよ…。”

驚いた哀だったが、それ以上は責められなかった。辛そうになりながらも、懸命に答えるコナンは、いつも自信たっぷりのコナンとはえらい違いだった。

しばらくして、医者が到着した。コナンの様子を見てすぐ、慌てた様子で、処置を始めた。

“コナンくん~大丈夫だからね~”

と言いながら、背中をさすると、仰向けに寝かせた。

酸素マスクをつけ、空気を送り込む。その時も、ずっと胸を押さえ続けてる。

苦しさが、収まらないらしく、どんどん息が荒くなって来る。

コナンは横に向きたがっている様子で医者も、それを汲み取り、横に向かせ、懸命に背中をさすっている。

そのうち、楽になってきたのか、呼吸も落ち着いてきた。医者も、コナンの様子をみて、深呼吸を促した。

“ふう、もう大丈夫だょ。コナンくん。痛いとこはないかい？”

と聞く医者に対して、首を横に振る。ニッコリして哀に、”もう大丈夫ですょ！一応、家族の方にこの事は、伝えておいてください。”と言い残し、医者達は、病室を後にした。

“はぁー，はぁー…”

落ち着いた様子のコナンを見て、呆れ半分で見ていた哀は…

“電話して来るわ…”

と言い残して，病室をでた。

哀からの電話をもらって、驚いた蘭だったが、“落ち着いた”との言葉を聞いて、安心していた。

今日は面会時間すぎてしまうから、また明日来た方がいいという、哀の言葉に納得した。病室に戻った哀は、コナンのそばに行き、口を開いた…。

“自業自得ね～。無理して病院抜け出したりするから…。ま、これに懲りて、おとなしくしてるのね…”

検査をしてない今の状況では、治療方法が限られて、発作が起きた時の処置方法がすくない…。

まぁ、歩く事も出来ないだろうから、抜け出す心配はないだろうと、安心していたー。

“灰原…俺、何かの病気なのか？”

“分からないわ…私は医者じゃないもの。とりあえず、検査してからって言ってたから、それまでは、大人しくしているのね…。”

哀は少しの沈黙の後、眠そうになっているコナンを気遣って、“帰るわ…”と言い残し、病室を後にした…。

大丈夫、工藤君だもの…何とか乗り切るに決まってるわ。哀は自分自身に言い聞かせる様に、つぶやいた。

☆目覚めた朝は☆

ー翌朝ー

まだ、眠っているコナンのそばに寄り、心配そうに見ている蘭。それを見守る小五郎がいた。

“んーーー……”

静かに目を開けたコナンはどこか、辛そうだった。そんなコナンを見て、ニッコリ笑い…

“おはよう、コナンくん…”

“蘭ねぇーちゃん…おはよう……”

コナンもニッコリ笑っていた。

“大丈夫かぁ、コナン?”

“大丈夫だょっ”

小五郎の心配をよそに、何もなかった様に答えるコナンは、辛そうだ。

“今日から、検査だからねっ、頑張ろうね。”

“うん。”

静かに答えるコナンは、病状が進んでるかの様な、青白い顔に変化

していた。

大丈夫、大丈夫…。

自分に言い聞かせる様に、祈る蘭は、コナンの前では、どんな時があっても、笑顔でいなきゃと思っていた。

“思ったより、元気そうでよかったわ…何かあったら、押すのよ?”

と、ナースコールをコナンの手に握らせ、“行って来ます”といい、後は小五郎に任せて学校へ向った。

☆蘭の笑顔が消えてゆく☆

それから、３日間、コナンは検査ばかりの日々に明け暮れていた。その間、一度発作は起きたものの、大きな変化はみられなく、安心していた…。

ーそして検査結果ー

検査の結果がでたというので、蘭と小五郎は呼ばれた。

レントゲンを見ながら、主治医はコナンの病状についてかたり始めた。

その結果には、思いもよらぬ最悪な事実を聞かされてしまった。

“いろんな検査をした結果…急性喉頭蓋炎という病気の可能性が高いと、判断がでました。急性喉頭蓋炎とは、今のコナン君の症状と同じ、喉の痛みで咳が長く続いたり、胸が苦しくなったりする病気で、通常、抗がん剤の投与で治す事ができるのですが、コナン君はまだ子供で、まして、病気になってしまった事で体力も落ちています。今のコナン君の体力だと…治す事が、非常に困難な病気なのです。”

“じゃあ、コナンは…？”

“もって、２ヶ月がいいところでしょう。”

沈黙が流れた…。思ってもいない事を言われ、強い衝撃で頭を叩か

れた気がした。

コナンの病室に戻る途中、蘭は…涙が出て来た。こんな気持ちで、コナンくんに会えない。どんな顔していえばいいの？

主治医に言われた、コナンくんと過ごす残りの日々を精一杯の笑顔で過ごしてあげてください。

“私は…コナンくんにあって…笑顔でいられるのかな。？”

“蘭、お前は今日は帰れ。後は俺が付いてる”

蘭も分かっていた。こんな顔した蘭の顔をみたら、悲しむってわかっていた。

でも、主治医の言ってた残りの２０％にかけてみたい蘭は…。

“そうね、こんな顔じゃ、コナンくんの前で笑えないもの。”

そう、言い残して病室を後しにした。

☆検査結果直後の発作☆

小五郎が、コナンの病室に行くと、探偵団が来ていて、コナンは咳き込みながらも、話しをしていた。

“おい、お前らー、コナンはまだ喉治ってないんだからーあんまり喋らすなー”

“あれっ？おじさんっゲホ……蘭ねぇーちゃんゲホ…は？”

小五郎が入ってきた事がわかったコナンは蘭の存在がない事に気づき、聞いた。

“ぁ～、なんか用事があるからって先に帰ったぞ。明日また来るそうだ”

“ふーん”

残念な顔しているコナンの顔を見る小五郎は病気の事を言えないでいる。

“ところでおじさん、ゲホ…検査結果は～？ゲホゲホ…”

と聞くコナンの咳が、酷くなってる事に気づき、背中をさすりながら、話す。

“オイオイ、咳がひどくなってるんじゃないのか？まぁ、検査結果は心配する事ない。ただの扁桃腺が腫れが長引いてるだけみたいだからなぁ。”

“本当っ？ゲホゲホ…じゃ、じゃあ…ゲホ…退院していい…ゲホゲホゲホゲホ…”

の？

と聞こうとしたのに、上手く声が出ず、そのまま、咳がひどくなり、肩で呼吸をするしかない状態になっていた。咳も酷く、呼吸も荒い。子供達がみてもとても大丈夫な風には思えなかった。

“おい、コナンっ！”

小五郎は慌てて、ナースコールを押し、“すぐ来てくれっ”と一言いうと、後はコナンの背中をさすっていた。

数分後、ガラガラと音と共に、医師達が病室に入ってきた。

酸素マスクをつけたコナンの呼吸を助けるのは、呼吸ボンベを使うしか、他はなかった。

仰向けに寝かせたコナンのシャツを脱がせ、胸の辺りに、薬を塗りこむ。少し、楽になってきたのか、呼吸が落ち着いて来たのがわかる。呼吸ボンベの強さをあげて、やっと落ち着くコナンの呼吸は、悪化を物語っていた。

鎮痛剤をうち、眠りにつくコナンだが、その顔は、あまりにも苦しそうな顔をしていた。

落ち着いたコナンの様子を確認すると、皆で部屋を出る…光彦が小五郎に尋ねた……。

“あの、おじさん…コナンくんの検査結果…本当に大丈夫だったんですか？”

少しの沈黙のあと、小五郎は３人に諭す様に話す。

“お前達、今からいう事、受け止める事ができるか？”

３人は顔を見合わせ、頷いた。

“実はなー、コナンはもぅ長くは生きられないんだ。”

さすがに驚いているだろう。みんな、泣きそうになっているのがわかる。

“だが、コナンにはまだ、言わないでおきたい。治る確率が０％ではないからな。主治医は治らない方が高いと言っていたが、、、。俺は、ほんの２０％にかけたいと思ってる…
ぃぃか、君達が、コナンにしてあげる事は、いつも通りの笑顔で例え、助からなかったとしても、最後まで仲良くしてあげて欲しい。一番嬉しいのは、お前達の笑顔だ。わかってくれ。友達になってくれて、ありがとな…最後まで、よろしく頼む”

“はぃ…。”

小さく頷くと、しばらくしょんぼりしていたが、顔を見合わせ、頷くと、病室にまた入って行った。

あいつら、強い子達だな…。話して良かったと，小五郎は微笑む。

病室に入った探偵団達は、眉間にシワを寄せ、辛そうに眠っているコナンの顔を眺めていたー。

“コナンくん…”

ポツリ、あゆみがつぶやくと……。

“んっ……”

コナンが目を覚ました。しばらく、ぼーっとしていたコナンだったが、あゆみたちの気配に気づき、顔を向ける…。

“お前ら…わりぃ、俺っ”

そういいながら、起き上がろうとするコナンを“ダメ”と止めるあゆみに…

“平気だって、検査結果も問題なかったみてーだし、近々退院できそうだしな…だから、心配すんな…”

コナンの言葉に負けたのか、黙ってしまった。

片手で体重を支え、右手で胸を押さえていた。起き上がるのに、時間がかかる様になってしまっている事に、コナンはまだ、病気だと、気づいていない。

酸素マスクまで外そうとするコナンに必死で止める探偵団…。

“これがあると、しゃべりずれーんだ…”

“それだけはダメ。お願いコナンくん…”

と、無理やり外そうとするコナンを必死に止める探偵団に負け、コナンはわかったと、外すのはやめた。

コナンは自分達のために無理してると思った3人は、そろそろ帰ると、いい残し、帰って行った。

元気よく、またなというコナンを3人も、元気よく、手を振る…。

☆哀の悲鳴☆

元太達が帰ったあと、病室で一人考えていた。蘭はどうして来なかったんだろうと。いつもの蘭なら、真っ先に、明るい顔を見せてくれるはずなのに…。

検査結果…何かあったのかな…。

と、頭の下で腕を組み立て、ぼんやり、考えていた…。

すると、扉が開き、現れた者は…。

“博士っ、灰原…ゲホゲホ…ゲホゲホ…”

”オイオイ、大丈夫かぁ~？いや~もっと早く来たかったんじゃが~哀くんに止められてのー”

咳が酷くなっているコナンに、灰原は驚きを隠せない。

“まぁ、当たり前ね~あなた、何かと博士を頼っていたし、病院を抜け出す手立てでも、考えそうな勢いだったから。”

“で、具合はどうなんじゃ？検査結果でたんじゃろ？”

“ぁぁ、たいしたこゲホ…となかったってよっゲホ…ゲホ。咳も、扁桃腺の腫れが長引いてるだけ…ゲホ…ゲホゲホ…だってさ”

二人はすぐに、嘘だと気づいた…。そんなはずない。だったら、何で悪化してるんだろう。

その事に、工藤君は気づいてないんだろうか？哀の心配をよそに…

コナンは尚も、追い討ちをかける。

“なぁ、灰原っゲホ…退院、いつか、聞いて来てくれねーか…ゲホゲホ…。”

“やめて！…もう、喋るのやめて！大人しくしてなさいっ！！”

哀の、叫びに一瞬びっくりしたが、すぐに哀への疑問をぶつけた。

“何かあったのか？やっぱり…ゲホ…ゴホッ…検査結果…はぁ，はぁ…何か、言われたんじゃないのか…ゴホッ…？”

やっぱり、コナンはきづいてた。それを確かめるために…。私を試したんだ。

教えてくれと、言わんばかり…工藤君は、私の顔を覗き込んでる。

私も、実際検査結果は聞いてはいないから、はっきりした事は言えないけど、ただ、咳が尋常ではない事だけは言える。

随分、長く話していたせいか、コナンはまた発作を起こした。先生が来るまで、博士が背中を賢明にさすってあげていた…。

本当は、検査結果を聞きに行きたい。でも、その勇気がでない。だって、そうでしょ。工藤君、こんなに苦しんでいるのよ。今更、聞いたって、結果は見えてるわ…。

どうすれば、いいのよ。

私は、こんな時に何もできない。

ただ、毒薬を作っていたただのバカよ…。

何が科学者よ…。

☆泣かないで☆

少年探偵団は帰り道、とてつもない絶望感でいっぱいだった。まさか、コナンが…。死んでしまうなんて…。

コナンの発作を目の辺りにした、探偵団達。本当にやばいのだと、確信した。

“コナンくん…本当に死んじゃうのかな。。”
“さっきの話だと、そんな感じですね…。”
”んーー、探偵団の仲間が困ってるんだ、元気付けてやろうぜ”

元太の言葉にシュンとなっていた2人は一瞬にして、笑顔になった。

“あらー、みんなーー”
“蘭おねーさん”

ばったりとあった探偵団達。コナン君の病院へ行って来たんだと知ると…。

“コナン君、大丈夫だった?”

と、聞いてはみたものの、探偵団達の口からは、発作の一言…。

瞬時に暗くなる。そして、小五郎から聞いた話を伝えた。

“私達、さっき聞いたの。コナンくん、死んじゃうかもしれないって”

そう、話す探偵団達を見ながら、蘭は両手で口を仰い、泣き出してしまった。

それを見た探偵団からの、口から思いもよらぬ事を聞かされた。

“”私達、もし…コナンくんが死んじゃっても、笑ってることにしたの。だって、一番辛いのはコナンくんだもん。”

“そうですょ。僕たちまで、悲しい顔していたら、コナンくんに逆に心配されてしまうかもしれませんし…。”

“だょな。俺たちが明るくいれば、コナンだって元気になってくれるかもしれねーしな”

探偵団の言葉に、
驚きを隠せない蘭。
その時、忘れていていた事を探偵団達に教えてもらった。

そうだ。一番辛いのは、私達じゃない。コナンくんなんだ。私が泣いていたら、コナンくんも、悲しんじゃう。明るくいなきゃダメなんだ。

“それに、コナンくん、蘭おねーさんのこと、大好きだから、蘭おねーさんの笑顔見せに行ってあげて”

“きっと喜ぶぜ、あいつ…”

“ですよね…”

そう、話す3人に笑顔で答える。

“うん。わかった。明日会いにいってくるね。ありがとう、みんな…。”

蘭は、自分が情けなくて，情けなくて…コナンに会うのを逃げていたことに、悔しさで溢れていた…。

コナンくんが待っている…明日、会いに行ってあげょう。

子供達から教わった、大事なことに忘れていた自分に…。また、涙が溢れてきた…。

そして…。そばで哀が聞いていたのを知らずに…。

☆真実☆

蘭と、探偵団の話を聞いてしまった哀は、本当の検査結果を聞きに行こうとした探偵事務所から、向きを変え、阿笠邸に戻る事にした。

まさか、そんなに深刻な事なんて…。

コナンは薄々、扁桃腺の腫れではない事に気づいてる様子だったが、コナンの発作が起こってしまい、それ以上は聞けなかった。

阿笠邸の門を開けると、博士に先ほどの事を、言おうかどうか、迷っていた。でも、哀の小さな心では留める事ができなかった。

“博士……。”

“おお、哀くん。”

哀の姿に気づいた博士は、哀の帰りを歓迎してくれた。そんな博士を見ると、哀は一瞬、微笑んだ。

そして……。

“博士…工藤君の様子は?”

“ああ、新一くんなら大丈夫じゃ。あの発作の後落ち着いた様じゃったから、後は毛利くんに任せて、帰ってきたんじゃ…。”

“そう…”

哀の様子から何かあったのだと、確信した博士は、心配した様子で尋ねた。

“どうかしたのか?”

哀は博士の目を見ると…話し始めた。

“博士…実はね。さっき、蘭さんとあの子達の話を聞いてしまったのだけど…工藤君、大変な病気らしいの。多分…助からないかもしれない…”

“何じゃと?”

はかせの驚きの声と共に、あゆみの言葉が蘇る。

(コナン君が死んじゃっても…)

工藤君…。あなたはそんな簡単に死んだりしない。さっきまで、そぅ、思っていたのに。

残酷な真実を聞いてしまった。

あの子を待たせたまま、江戸川コナンのままで死んでしまうの?

まだ、工藤君には明かされてないこの真実は…あまりにも残酷すぎる。

そんな想いとともに、哀と博士の間に、長い沈黙が流れた。

☆コナンの異変☆

“明日こそ、本当の事、聞いて来るわ”

長い沈黙の後、哀は博士にそう、告げたあと、地下室へ消えてしまった。

その頃、病院ではーーー。

“ケホケホッ…ケホケホッ…ケホッ…はぁ、はぁ。”

さほど、苦しい様子ではないものの、話してもいないのに、咳が止まらないコナンを心配して、先生を呼んだ小五郎。

“さっきから、ずっとこんな感じでー”

“ぅーん。コナンくん、ちょっと口開けられるかなー?”

先生はコナンの酸素マスクを外し、コナンの喉を診察して見る。

見ると、喉の奥に何か引っかかってるのがみえ、うがいして取る事にした。

数分後、先生はボールとうがい薬を持って戻ってきた。

”コナンくん、起きられるかな〜?”

そう、言うと、コナンの身体を支えながら、起こし、うがいをさせた。

“ゲホッ、ガハッッ…”

ちょっと、うがい薬を口に含んだだけなのに、コナンは耐えられず、勢いよく、ボールに戻した。

数回繰り返したあと、主治医はコナンの喉を見ると、取れた様子だったので、コナンを寝かせ、再度酸素マスクをつけた。

その後、コナンの咳が落ち着いた様子を見て、医師は、また咳が酷くなった時のために、薬を小五郎に渡し、病室を後にした。

しばらく、コナンの様子を見ていた小五郎は、咳が落ち着いた事を確認すると、コナンにナースコールを持たせた。

“コナン、何かあったら…これ押すんだぞ、いいな?”

返事はなかったけど、コナンの咳が落ち着いたのを見て，大丈夫だと思い、帰る事にした。

☆蘭の決意☆

小五郎が帰宅すると、事務所で蘭が泣いていた…。

“蘭…？”

“お父さん！”

小五郎の帰宅に慌てて涙を拭うと、明るい笑顔を見せた。

娘が誰よりもコナンの事を心配しているのは、よくわかっているつもりだったが、コナンの前で明るくいる自信のない蘭を見てると、とてもじゃないが、コナンに会いにいけと言うことはできなかった。

“お父さん…コナンくん、また発作起こしたんだって？子供達から聞いたの…そういう時に、あの子のそばについてあげられないなんてね…”

“蘭…あまり自分を責めるな。それよりも、早くお前の明るい顔をコナンに見せに行ってやれよ…”

“ぅん…そうだね……”

その時、蘭は子供達の言葉を思い出した。

いつまでも、ないてなんか、いられない…。コナンを1人にしちゃいけない。

“お父さん…明日学校行く前に会って来る。コナンくん、きっと待ってる。行ってあげなきゃ、可哀想だもんね。”

“大丈夫か？”

“ぅん…大丈夫”

父まで心配させている…。そんな自分が情けなくて…蘭は会いにいく事を決めた。それに、会いに行かなかったら、コナンに病気の事を知られてしまう。

“明日、早めに出るから、朝ごはん冷蔵庫に作っていれておくから、チンして食べてね。それじゃ～おやすみなさい”

“おう。”

そう、挨拶して、自室に戻った。

（コナンくんだって、発作を起こしても頑張ってるだもん。元気な私がこんなに落ち込んでどうするのよ。しっかりするのよ、蘭。）

そう、言い聞かせながら、眠りについた。

ー翌朝ー

“行ってきます”

といい、探偵事務所をでるとそこには、蘭を待っていた人物がいた。

☆哀の疑惑の行方☆

“哀ちゃん…おはよう。どうしたの？こんなに朝早くから？”

哀は蘭の明るい顔を確認すると…。

“聞いてもいいかしら？江戸川くんの、検査結果…。”

“……。”

黙ってしまった蘭を見て，やっぱり、夕べの話は本当なのかもしれない…と、嫌な予感がよぎる。

“哀ちゃん…実はコナンくんはね、、、”

“もしかして、あまり、長くはないの？”

衝撃が走った…哀からそう言われ、何も言えず、無言で頷くしかない蘭…。

“これから、病院に行くの。哀ちゃんも一緒に行く？”

“ええ。”

とりあえず、コナンくんの様子を見てみない事には、何も言えない。そう、思った蘭は哀と一緒にコナンが入院している病院に向かった。

病院に着くと、コナンの病室がなにやら、騒がしい事に気づき、２人は急いで病室に駆け寄った。

“コナンくん～、わかるかい？コナンく～ん！！”

医者が、大きな声を出して、コナンに呼びかける声が聞こえたと思うと、コナンがストレッチャーに乗せられ、病室から出て来るとこだった。

“コナンくん…！”

そう、叫ぶと蘭に気付いた医者から、緊急手術をする事を告げられ、そのまま2人は、手術室まで追いかけて行った。

☆九死に一生☆

コナンが手術室に入ってから、３０分後…。

赤いランプが消えたと同時に、人工呼吸器を付けられたコナンがストレッチャーに乗せられ、出てきた。

“いや～、危なかったけど何とか無事に、命はとりとめました～”

そう、いいながら安心している先生の話を聞く、蘭と哀。

実は、ナースコールを取ろうとして、ベッドから落ちたらしい。その弾みで酸素マスクが外れ、呼吸困難が起きた。発見が早かったため、大事に至らなかったが、もう少しで危ないところだった様だ。

”心配しなくても大丈夫ですよ。、ですが、酸素レベルが低下してますので、集中治療室で様子をみましょう”

先生の話を聞いて、やっと安心できた。

コナンが目を覚ますまで、側に着いてあげたいと、お願いをする蘭を見て、先生は快く了承した。

蘭は白衣を着て、コナンの眠る集中治療室へ入って行った。

哀は、ガラス越しに、暫く眺めていたが、なかなか目を覚まさないコナンをみて、また夕方来ようと、帰って行った。

一方、集中治療室へ入って行った蘭は、コナンの手をギュッと握りしめ、心配な眼差しでコナンを見つめていた。

暫く見ていた蘭だったが、夕べ考え事をしていて眠不足だった蘭は、何時の間にか、コナンの手を握ったまま、眠ってしまっていた。

コナンの手が一瞬動いたと同時に、蘭は目を覚まし、コナンの顔を覗いた。

“コナンくん…よかった。気がついて……。”

“あっ…あ……。”

人工呼吸器を付けられたコナンはうまく喋れない。

それに気付いた医者が、コナンに声をかけながら、人工呼吸器を外し酸素マスクに変えてくれた。

“もう、大丈夫だからね、コナンくん。今度は気をつけるんだょ”

と声をかけると、夕方には病室に戻れますよと、蘭に教えてくれた。

蘭はそれを聞くと、一安心したのか、笑顔でコナンの顔を覗き込む。

“蘭ね～ちゃん、ケホッ…ごめんなさい。”

謝るコナンに、蘭の胸が痛む。

“いぃのよ。謝らなくて…悪いのは私。コナンくんが大変な時に、付いていてあげられなかったんだもん。ごめんね、もう大丈夫だか

らね…”

蘭の言葉に、コナンは笑顔を返す。

“これからは、気をつけようね”

“はーい。”

と、念を押すと…コナンは素直に返事をした。

☆二つの学校で☆

もう、安心だと言う医師の言葉を信じ、蘭は学校へ行く事にした。

“行ってら…ケホケホッ…”

咳き込むコナンに、頭をさすりながら行ってきます。といい、学校へ向かった。

一方、帝丹小学校では…。

哀が遅刻してきたのは、コナンが関係してると思った三人は哀に何があったのか?尋ねた。

“違うわよ。ただの用事よ…。”

“でも、哀ちゃん…”

余計に心配が募る、探偵団。哀はそれをみて、はぁー。とため息つき…。

“江戸川君なら平気よ。心配する事ないわ。だから…安心しなさい。”

そういう、哀にまだ納得の行かない三人だったが、頷くしかなかった。

その頃、帝丹高校でもコナンの事を心配している者がいた。

“ねぇ、蘭…ガキンチョの具合い、そんなに悪いの？”
“ぅん…床に落ちた物、拾えないくらい体力落ちてて…今日もそれで、緊急手術したのよ。”
“もしかして…もう、やばいの？”

そう、話す親友に…恐る恐る聞く園子の耳にはとんでもない現実が突きつけられた。

”あと、2ヶ月生きられるかどうか…なんだって。本当なら…抗がん剤の治療で治す事も出来るけど、コナンくん…まだ子供でしょ。それに、体力も落ちててそれはできないって…”
“にっ、二ヶ月ぅぅ？”

大声を上げた園子に、クラスの視線が集まる…。

“蘭…。”
園子は、それ以上は何も聞けなかった。

☆もっと、食べて☆

夕方、小五郎が病室に行くと、コナンの姿がなくもぬけの殻だった…。

“なっ…ど、どこ行ったんだ?”

その時、ガラガラと言う音と共に、集中治療室からコナンがストレッチャーに乗せられ、病室に戻ってきた。

“コナンっ!”

朝の出来事を医師から聞いて驚いたが、心配ない様子だったので、一安心した。

“お嬢さんから、聞いてなかったんですか?”

“えぇ、まぁ…”

まぁ、昨日の蘭の様子じゃ、伝える事まで気が回らなかったのだろう。

術後による、発熱だそうで、風邪薬を渡された…。

“夕食の後に、飲ませてあげてください”

そういうと、医師達はお大事にと、言い残し、病室を出て行った。

“お父さん…”

入れ違いに、蘭が園子を連れてやってきた。
今朝の手術の事を言い忘れた蘭はハッとし、小五郎に、今朝の様子を詳しく説明した。

“だから…私達が帰った後、集中治療室に移動して様子を見るそうよ。また、今朝みたいな事があったら…危ないから”
“そうか…まあ、無事でよかったなぁ”
“本当〜”

コナンの顔を覗き込むと、眉間にシワを寄せて眠っている。風邪で辛そうだ。園子は、改めて事の重大さを確信する。

いつも、生意気ばっかり言ってるがんきんちょが、弱々しくそこに眠っている…。それも、もう…長くないなんて。

また、生意気な口を聞いてくれる日は、あるのだろうか?……と。

そうこうしているうちに、哀と一緒に探偵団も、やってきた。
園子を見るなり、元太は声を上げる。

”あっ、茶髪のね〜ちゃんだ〜”
“こら、だーれが、茶髪のね〜ちゃんだ〜?”
“ほら、あんまりうるさくするなー”

と、小五郎に言われて、2人は、すいませんと謝る。

そして、夕飯が運ばれてきた。風邪薬を飲ませないといけないため、無理やりコナンを起こし、まだ、ぼーっとしているコナンに、蘭はスプーンを向ける。

“え、いいよー”
“いいから、食べて～”
“何、いっちょまえに、恥ずかしがってるんだ?さっさと食えっ!”
と、恥ずかしがってるコナンを小五郎が一喝する。仕方なく、食べ始めた。

ほんの、５粒程度しか食べさせてないのに咽せるコナン。多いいよと、言うコナンにもう少し少なめにすくい、食べさせていた。

やっと、１／３食べさせた所で、もういらないと言うコナン。小五郎や蘭がもう少しと、促し、ちょっとずつ食べるが、結局半分も食べられなかった。

“あんまり、お腹すいてないんだょー”
と言うコナン。どうにか薬を飲ませ、再度寝かせた。

その後、看護師がやってきて、ご飯の食べ具合をみて心配していたが、薬を飲んだ事で、安堵していた。

そして、コナンの中指にはパルスオキシメーターがはめられた。これは、酸素を図るもので、９５以上ないとマスクが必要になるのである。

最初、痛くて気にしていた様子だったが、蘭にとっちゃダメよと言われ、諦めそのうち、薬が効いてきたのか、寝てしまった。

☆疑問が募る☆

目が覚めると、そこは集中治療室だった。コナンが寝てる間に、それぞれ帰り、いつの間にか移動されていた。

看護婦が、コナンに気づき、おデコに手を当てながら、言う。

“うーん。熱下がってるみたいね。よかったね、コナンくん”

そういうと、ガラスの方を指差した。

“お友達が心配しているわよ。”

と言われ、ガラスの方を見ると、そこには哀がいた。

“灰原っ”

そういい、起き上がろうとするコナンを看護婦が制止する。

”何かあったら、呼んでね”

といい、哀を中にいれ2人だけにして、看護婦は部屋を出て行った。

“全く、バカなんだから…ナースコールを取ろうとして、ベットから落ちるなんて～……それで、どう？調子は…？”

“熱も下がったし、平気だょ”

散々バカにした挙句、心配する哀をみて、文句の一つでも言ってやろうとして、起き上がろうとするコナン。もう、自分の力では起き

上がれないのは知ってか知らずか、哀はそれを黙って見てた。

“無理しないで、寝てなさい。今朝みたいなドジ、されても困るから。”

“ドジって…”

“ドジじゃなくて、何だって言うの？それに…”

いいながら、哀はある事に気付いた。

“工藤君、咳は？”

“あっ、そういえば…出てねぇー”

“よかったんじゃない？治ってるって事みたいだし…まぁ、油断しない事ね…これ以上悪くならない為にもね！”

そういい、帰ろうとする哀を止め、疑問に思っている事を聞いた。

“なぁ、教えてくれ…俺、何の病気なんだ？おかしいじゃねーか、検査結果は何でもね～って言われたのに、こんなに苦しんだぜ？本当は、何か…？”

“私も知らないわ…まだ、何も聞かされてないのよ…まぁ、もし何かあるなら、そのうち言われると思うから待ってる事ね…”

そう言い残すと、看護婦に伝え、帰ってしまった。

灰原は、何か知ってるじゃないか？

何で教えてくれないのか？

もしかしたら、本当に何かの病気なのか？

灰原が口を硬くした事で、本当にやばいのかもしれないと、確信するコナンは灰原はもしかしたら、誰かに何かを聞いてるのかもしれ

ない。そう、思っていた。

そう、哀は皆が帰る前に、蘭にコナンの本当の病気の事を確かめていたのだった。

☆突きつけられた現実☆

“蘭さん”

哀は…今日こそ、聞かなくてはと思い、皆が帰ったあと、蘭を呼び止めた。

“哀ちゃん…どうしたの?”

“江戸川君のことだけど…。”

一瞬、ドキッとする。こんなに、思い詰めてる蘭に聞くのもどうかと思ったが、どうしても…哀は知っておかなきゃならないと思った。

“江戸川君の検査結果の事、くわしく教えてもらえないかしら?”

“哀ちゃん……。大丈夫?心の準備出来てる?”

“ええ…。”

その言葉で哀と蘭の間に、少しの沈黙が流れた。そして、蘭は大きな深呼吸を一つすると、哀の目をまっすぐみた。

“結論からいうわね…コナンくん、急性喉頭蓋炎っていって凄く難しい病気なの。助かる確率は２０%だって…。本当は、手術で治せるらしんだけど…ここの所、咳や発作が続いてるでしょ?それに、体力だって落ちてて…今の状態じゃ、手術は難しいんだって”

“じゃ、江戸川君は…助からないってこと?”

“今の状態だと、多分…”

哀の不安が、確信に変わったこの瞬間…あの子達の言葉が、胸に突き刺さる。

“死んじゃっても…”

（やっぱり、間違いないんだ…。
どうして、こんな事になってしまったのかしら…。どうして、皆、いなくなってしまうの？このまま、一人でどうすればいいの？）

そんな事を考えてると、蘭が再度、口を開いた。

“哀ちゃん…コナンくんが助からないってわかってしまった今、私達にできる事あると思うの。最後まで、コナンくんの側にいてあげよ？皆で笑っていよう？悲しい顔見せたら、コナンくん、辛いから。”

蘭にそう、お願いされて…頷いた。

（蘭さん、強いのね…）

コナンの看病をずっとして来たせいか、強くなってるのかもしれない…。

“で、蘭さん……。江戸川君、あとどの位生きられるの？”

“もって…2ヶ月くらいだろうって・・・・・・”

“……！！！！！”

半年って言葉を予想していた。そんな哀に告げられた予期せぬ事態。2カ月なんて……酷すぎる！どうして、そんなに早く…。

哀はいてもたってもいられず、蘭に帰ると告げて病室をでて、トイレに駆け込んだ。

“わぁぁ〜あ〜〜〜ぁぁ〜”

思ってもいない現実に哀はただ、泣くしかなった。

集中治療室に移動された、ガラス越しに見えるコナンの顔を見ながら、哀はどうする事もできない自分の不甲斐無さを攻め続けた。

☆一年B組からのメッセージ☆

緊急手術をした次の日から、発作も酷い咳も少なくなったコナン。
自分の疑惑は勘違いだったのかと、思い始めた。

診察する先生はにっこりして、コナンに話した…。

“うん。大分、調子も良くなってますね…腫れも、目立ちませんし…少しの散歩なら出て来てもいいですよ”
“本当ですかー?よかったね～コナンくん”
“うん”

コナンより、蘭が一番喜んでしまう。今日は日曜日…小五郎や蘭、園子…それに、探偵団もお見舞いに来ていた。
ただ…哀はあの日以来一度も、来ていないのだ。

折角だからと、散歩に行く事になったコナン達。無理はしない様にと、マスクを装着させた。

コナンの車椅子を押す蘭を筆頭に、園子と探偵団が着いて行く…。
小五郎は?俺はタバコ吸ってくる?と喫煙所に向かった。

中庭に出ると、日曜日だからか、沢山の患者達が散歩に来ていた。

コナンにとっては、久しぶりの外の空気。自然と笑顔が零れる。大きな木の木陰を見つけ、休む事にした。

そして、元太、光彦、あゆみがクラス皆からコナンへの励ましのメッセージ預かってきた。

“皆で書いたのよ～”

と言いながら、あゆみがコナンに渡した。次々に読んでいくと、？コナンくん頑張って？？早く元気になってね？など書かれ、正直、嬉しかった。

初めは小学校なんて～って思っていたが、こういうのも、たまにはいいか。なんて思ってしまう。

読み進めて、最後の一枚にはとてもお見舞いとは取りにくい、メッセージが書かれてあった。

”ちんたらやってたら、あなたのスケボー捨てるわよ？？

灰原なりの言葉が書いてあった。早く帰ってきなさいと言いたいのだろう。灰原のメッセージをみて、思い出したかの様にあゆみ達に聞いた。

“そういえば灰原は？”

“本当は、灰原さんも誘ったんですよ～”

“でも、やる事があるからって言われてよー”

“断られちゃったの～”

ふーんと、寂しそうにするコナンを見て、園子がちょっかい出す。

“何？ガキンチョ、寂しいの？？”

“ち、違うよっ最近あいつ来ないから、どうしたのかなぁーって思っただけだょ”

と、笑うコナンに蘭が言う。

“あら?哀ちゃんなら、たまに来てるわよ?最も、病院内で見かけるだけだけど…”
“えっ??”
“その様子だと、病室には来てない見たいね”
“えつ、うーん”

灰原は、病院には来ているのに、コナンのいる病室に来ないで何やってるんだろう?
コナンは灰原の様子がおかしい事にまた、つまんねーこと気にしてるんだろ?くらいに思っていた。

“くしゅんっ”

コナンのくしゃみをきっかけに、風が出てきて、寒くなったので病室に戻る事にした。

☆自分との戦いー哀ー☆

（工藤君…。）

誰も通らない夜の集中治療室の廊下で…。
哀はガラス越しにコナンを見ている…。
誰にも気付かれないように…もちろん、コナンにも…。

あの日以来、コナンと顔合わせる事のできなくなってしまった哀。
こうして、眠っているコナンをただ、見つめる事しかできない。

会っても、何を言えばいいのか分からない。
いつもの様な憎まれ口すら出てこない気がして…。

“ん……。”
“あっ…”

コナンが目を冷めたと同時に、哀は集中治療室をあとにした。

この一週間、病室には来ては見るものの、入る勇気がなく、何度も何度も、病室の前まで来て帰ってしまう哀。

コナンの散歩が許された、あの日だって、中庭で談笑している様子を遠くの木に隠れて見ているしかできなかった。

哀は自分の心と戦っていた。蘭の様に強くなれない自分には、何もできない。見守る事しか出来ないのだと…。

ここんとこ、元気のない哀を博士は心配しているが、返ってくる返

事はいつも一緒。

“なんでもないわ…。博士の気のせいよ”

こんな時、新一がいればなんとかしてくれたかもしれないのに…、当の新一は病院で残された命を懸命に生きている…。いつか、退院できると信じて。

博士に、コナンの検査結果を話した後から、急に一人で出かける事が多くなった哀…。

（これは、自分で解決するしかないのよ。誰にも頼ってはいけない。でも…どうしたらいいのよっどうしたら！）

解決策も見当たらない、自分の気持ちを責め続けながら、哀は病院から帰る途中、さっきまで病院にいたはずの蘭に会った。

“哀ちゃんっ！”

無性に明るい蘭の声は自分の不甲斐無さを腹が立たせる。彼女はなぜ、こんなに明るくいられるんだろう。自分はなぜ、こんなにも辛い気持ちになっているんだろう。そんな気持ちを押し殺し、平静を装って蘭を見た。

“蘭さん、こんにちは。”

“こんにちは。どうしたの？最近コナンくんの病室に来てないみたいだけど…？”

“えっ？えぇ、まぁー。私もいろいろと忙しいから”

哀の表情がいつもと違うように思った蘭は、

コナンも哀が来ない事に心配事している旨を伝えた…。それでも、表情は変わらずだったから、哀の気持ちを聞き出す事にした。

☆初めて見せる涙☆

“哀ちゃん、何かあった？もし、哀ちゃんの中で…何か起こっているなら、話して欲しいな。ほらっ、人に話すと気持ちが楽になるって言うでしょ？”

“……。”

2人は近くにあったベンチに座り、話し始めた。どんな事でもいい、話して欲しい。この子の悲しそうな表情がいつもに増して、辛そうだから…。私にできる事があるなら、助けてあげたい。

蘭は、コナンのお姉さん役として、面倒を見て来た事もあって…必要以上に心配になってしまう。

“哀ちゃん、あの日依頼来てないよね？検査結果を伝えてから、コナンくんと会えないんじゃない？”

“！！！！！”

図星を言われて、思い切り蘭の顔を見る。

蘭はやっぱりと言った表情を浮かべて、哀に諭すかの様に話始めた。

“コナンくんに会うの、辛い？？検査結果聞いて会えなくなっちゃったんだよね？私もね、最初会えなかったんだ。コナンくんの顔見たらなんだか、泣いちゃうんじゃないかって思ったりして…でもね、あの子達に言われたのよ。”コナンくんの前で、笑顔でいる！一番辛いのはコナンくんだから”って…”

“あの子達が？”

哀は驚いた…あの子達がそんな事を言っていたなんて。あの日、途切れ途切れに聞こえた言葉は…蘭をも励ましていた事。そして…蘭の心にも突き刺さっていた。

“私ね、コナンくんの命が2カ月だって言われた時、辛かった…すごく辛かったんだ。でもね、本当に辛いのは、コナンくんなんだよね…今も病気で苦しんでる…治せない病に…だから、哀ちゃん！コナンくんと過ごせる時間はなるべく、会いに行ってあげて欲しいの。コナンくん、きっと喜ぶと思うよ?”

蘭の気持ちのこもった言葉に、打たれ涙が出てくる。蘭は驚いていたが、哀の言葉を待った。

“うっ…私、辛いのよ。江戸川くんのあんな姿…もう、見たくないのよっ…ううっ…私の周りにいる人、皆いなくなってしまう…彼だってそう…そんなの嫌なの。だったらいっそ、私の事は忘れればいいって……”

“哀ちゃん…ダメよっ。哀ちゃんが忘れてって望んだとしても、コナンくんは忘れること出来ないと思うよ?だって、折角出来た友達なのよ?そんな事言ったら、コナンくんはかわいそうじゃない…”

正直、今まで…こんなにも思いつめた哀を見たのは初めてだった。そこまで哀を苦しめている二か月という現実に、蘭は押し殺されそうだったが、今はこの子を守らなくてはという思いで、いっぱいだった。

☆哀の暗闇からの脱出☆

“哀ちゃん、これから病院へ行こう?”

蘭の突然の提案に、哀は戸惑っていた。こんな気持ちで会うなんて出来っこないじゃない…。でも、行かなきゃ自分の気持ちに決着がつけられない。

“私……。”

“大丈夫。普通にしてればいいのよ。もし、泣いちゃったとしても、コナンくんは笑って許してくれるはずよ?それよりも、来てくれたって事が一番大事なんだから、ねっ?”

蘭は哀の両手をとって、どうしても連れて行きたくて仕方ない様子だったので、泣く泣く、コナンの所に行く事にした。

(こんな顔じゃ、彼に、バカにされるわね…。)

二人して手をつなぎ、病院までの道を歩っている途中…ついこの前までは、コナンとこうして手をつなぎ、歩いていた事を思い出した。また、こうして手をつないで歩くこと、出来るんだろうか?

コナンの病室の側までくると、立ち止まってしまった哀。どうしても、ここから先へ進む事ができない…。

”どうしたの?哀ちゃん…さぁ、行こう?”

“私…やっぱり……”

“ここまで来て、何言ってるのよ?大丈夫よ?”

その時だった。探偵団の三人が病室から飛び出して来た。哀に気づくと、次々と、明るい声をあげた。

“灰原さん！やっぱり来たんですね～？”

“哀ちゃん！今日コナン君ね、車椅子で中庭まで散歩出来たんだょ～”

“お前も行こうぜ…ほらほらっ”

ほぼ強引な探偵団達に引っ張られ、病室へと入って行く。入ると、元気そうに大きなベッドにちょこんと座っているコナンがいた。

“久しぶりだな…全然来ねーから、何かあったのかと思ったぜ”

“人の事心配してる暇があったら、自分の事心配しなさい”

相変わらずの憎まれ口だったが、哀の元気そうな言葉を耳にして、コナンは安心していた。

“お前に暗い顔なんで似合わないぜ…そういうセリフ聞かせに来いよ”

コナンは何で今まで哀が来なかったのかは引っかかっていたが、今はただ…哀が来てくれた事で、安心していた。

そんな二人の様子を見ていた、皆もホッとして笑顔になっていた。そして、哀も……コナンを見つめながら、不敵な笑みを浮かべていた。最近は…眠っているコナンしか見ていなかった哀…こうして元気なコナンを見るのは久しぶりだった。

☆拒絶反応☆

“よかったじゃない！コナンくん、回復してるみたいで…”
“ぅん…だといんだけど…”

近頃のコナンの様子をみて、園子は安心した様子で蘭に話す。

“大丈夫だーって。蘭の話だと、もっとやばいのかと思ったけどさ～あの様子なら退院近いんじゃない？”
“そうだょね…最近、発作もないし…大丈夫だよね…”
“そうだょっ”

集中治療室の移動も解け、体力も戻しつつあるコナンを思い出し、園子の励ましに大丈夫と思い、園子にお礼をいい玄関口まで送り届けた。そして蘭は、コナンのいる病室へ戻っていった。

“うっ…ケホケホ……”
“どうしたの？？”
“夕飯食べ終わった後、急に咽せ出したんだ…”

病室へ戻った蘭はコナンがボールを抱え、嘔吐してる姿をみて、驚いていた。

それを離れて見ていた哀に”外出てよ”っと声かけ、連れ出した…。

“哀ちゃん、見るの辛いなら出てていいのよ？”
“えぇー、でも…”

蘭はこの間の哀の言葉を思い出し、声をかけるが、哀は自分で言っ

た弱音から逃げたくないと思ってしまう。

（工藤君は、病気に侵されながらも賢明に戦っている…私が逃げてどうするのよ）

それに、嘔吐してる時に、病室から出て行けば、自分が原因だと思われてしまう…そんなの、嫌だった…。

病室に戻った哀は、コナンの姿をしっかりとみて、”頑張るのよ”と思っていた。

医者の話では…この間まで食欲が薄かったコナンの身体が、急な食欲増加によって身体が驚き、嘔吐してしまっただけで心配はないといわれた。

“ただ、これがきっかけに…コナンくんが食べる事を嫌がるのが心配ですね…”

食べると嘔吐の繰り返しに、また…点滴の栄養だけになる事もあるかもしれない。そしたら、また…自分で起き上がる事も出来なくなってしまう…。

そんな心配をよそに、毎日の様に繰り返される、嘔吐に…日に日にコナンはやつれて来ていた。

“大丈夫よ。コナンくん…いっぱい食べて、元気になろうね”

体力をつければ、嘔吐も無くなる…背中をさする度、震えるコナンの身体が悲鳴をあげてる事に、見舞いに来ている人達の心配も増して行った。

☆退院したくて☆

嘔吐を繰り返すあまり、食事の時間になるのが怖くなって行くコナン…。

“夕飯だよ、コナンくん”

看護婦さんが、夕食を持って入ってきた。それを受け取る蘭だったが、コナンの表情が曇っている事に感じていた。

“はい、コナンくん……”

“今日はいいよ…”

嘔吐を繰り返すあまり、弱音が零れる…。そんなコナンを励ますかの様に、食事を促す。

“ダメよ、食べなきゃ…元気になれないわよ”

“おなか空いてないんだ…”

わかっていた…嘔吐があまりにも苦しくて、食べる事を拒み始めた事を…。それでも、どうにか食べてもらわなければと、蘭は拒み続けたコナンの口元にスプーンを持っていく。

どうにか食べてくれたものの、数分で嘔吐が始まった。

“うっ…ゲホゲホッ…ううっ”

どうしてあげる事も出来ず、ただ、ふるえるコナンの背中をさすりながら、蘭は泣き出しそうになる自分を必死に止めていた。

“コナンくん、食事はちゃんと取ろうね！次期に体力も回復すれば、一次退院できるからね”

様子を見に来た励ましとも取れる先生の言葉が、コナンを少しだけ勇気付けた。

静まり返った、誰もいない深夜の病室でコナンは…歩く練習をしていた。起き上がる事はできるが、まだ自分のチカラで歩く事は出来ないでいた。

”ハァハァ、ハァハァ…。”

やっとの思いで、ベッドを降りたコナン…。
膝を曲げ、ベッドに両腕を置いて立とうとするが…思う様に立てない。そのうち、バランスを崩して転んでしまった。

こんなにも、体力も息も上がってしまう自分の身体に腹が立ち、悔しさが募る…。

丁度通りかかったのか、その音に気づいて巡回していた看護婦が入って来た。

“コナンくん…何してるの？”
“トイレに行こうと思って…”
“トイレはいいの、これがあるでしょ？”

ベッドの脇に下がっている管を指差す。コナンは足に力が入らず、一人で歩けない為、トイレにいってする事が出来ない。

”でも、ぼく退院したいんだ…”

“コナンくん、焦っても退院出来ないよ?しっかり食べて、体力つけなきゃね”

その言葉に頷き、再びベッドに寝かせられた。

“お休み、コナンくん”と言うと、看護婦さんは出て行った。

☆待ちに待った退院の日☆

その後も、嘔吐しながらも頑張って食べたせいか、体力がどんどん回復して行った。

次第に少しずつではあるが、歩ける様になって行った。

そして、ついに先生から一次退院が許された。

丁度皆集まっていた時の報告で、嬉しさのあまり、自然と笑顔が零れる…。

退院は金曜日から3日間。その際に、喉の薬と発作が起きた時の薬2錠が渡された。何かあった時の為に、小型酸素ボンベを渡された。

そして退院当日…。無理はしない様にと念を押され、蘭に連れられ、小五郎の運転するレンタカーに乗り込み、久しぶりの探偵事務所に向かった…。

まだ、しっかり歩けないコナンは蘭におんぶされて3階の自宅に連れられた。

“よかったね、コナンくん。でも、油断はしちゃダメよ?”

“うん、分かった”

“じゃ、ちょっと待っててね、ご飯作ってくるから…。”

そう言うと、コナンを背もたれ椅子に座らせて、夕飯を作りに行った。

☆大阪からあいつらが…☆

“よう、元気かぁ??”

登場したその2人は、蘭がいる台所に顔を出した。

“服部君に、和葉ちゃん~”

“久しぶり~蘭ちゃん~”

”どうしたの?急に~?”と言う蘭の言葉に、ここんとこ、何度電話しても出ない電話を心配して、やってきたのだと言う。

“ところで、坊主は?”

“えっ?コナンくんならそこに…”

“おらへんで?”

コナンがいない事に驚き、慌てる蘭に事情の知らない2人は不思議そうに見ている。

“そんな心配せぇへんでも、大丈夫なんとちゃんか?”

“トイレでもいったんちゃう?”

と言う2人にそんなはずないのと否定して、事情は後で話すから、探すのを手伝ってもらう事にした。

家中どこ探しても見当たらない…まさか、外に出たんじゃ?と不安になる蘭は、外を探す事にした。

“もしかして、博士の…?”

すぐさま、博士の家に向う蘭…その時、丁度倒れこむ、コナンの姿を発見した。

“コナンくん!!”

壁伝いに立っていたコナンは力尽きて、地面に手を置いて、荒い息を吐いていた。

“何やってるのよ?また、こんな危ない事をして…”

蘭と一緒に探してた平次と和葉は蘭の姿を発見して、側に近寄る。

“よかったなー見つかって~”

和葉の言葉に安堵した蘭は、”行こう?”とコナンを連れて帰ろうとする。その時、コナンは思いがけない言葉を口にする。

“もう、いいよ蘭ねーちゃん……ぼく、もう生きられないんでしょ?”

知っていた?そんな事はない。だってだれも言うはずないんだから…じゃあ、どうして?

そんなコナンを見つめ、蘭が否定を込めて、コナンに話し始める。

“何言ってるのよ…そんなはずないじゃない!だんだん良くなってるって、お医者さんにも言われたでしょ?だから、コナンくんは何も心配する事ないのよ?”

そんな会話を聞いていた2人は、風邪かなんかで弱気になってるん

だろう?ぐらいにしか思わなかった。

“でも…ハァハァ…おかしいよ!それなら何でこんなに…ハァ…苦しいの?本当の事教えてよ、蘭ねーちゃん…ハァハァ…”

コナンの”苦しい”の言葉に蘭は涙を零すと、コナンの身体を抱きしめた。

“大丈夫…大丈夫だから。”

コナンを諭す様に抱きしめる蘭だが、コナンの口から出た言葉は、あまりにも酷だった。

“ぼく、病院戻ったら…ハァハァ…死ぬしかないんでしょ?ハァハァ…だったらも〜一度、新一兄ちゃんのお家、行きたかったんだ…”

そう話すコナンに蘭の涙が零れてく…。

“死なない、死なないよ。コナンくんは死なないから、だから…そんな事、言わないで…”

“蘭ね〜……”

そこで、コナンは意識を失った…。急いで蘭は探偵事務所に戻り、布団に寝かせた。

意識を失ったのは、無理をして歩いたせいだったから、栄養剤を飲ませ寝かせる事にした。

☆躊躇するコナン☆

“ん……？”

目を覚ますと、そこは布団の中だった。やっぱり倒れてしまったんだと、絶望感でいっぱいだった。

“よう、やっと目ぇ覚ましたか？”

“服部？”

蘭と小五郎から事情を聞いた、平次と和葉。信じられない様な現実に2人はショックを受けたが、蘭や小五郎に”コナンには黙ってて欲しい”、”いつも通りに接してもらいたい”という、2人の気持ちを理解し目が覚めたコナンを心配してやってきた。

“大丈夫かぁ～？”

“どうして、ここに？？”

“ちっとも電話に出んへんし、何かあったと思って心配してきたったんや”

事情は聞いたという、平次の言葉に一瞬曇ったが”夕飯にしよか？”と平次の言葉に促され食卓に向かった。

テーブルには既に、人数分の食事が用意されていた。

コナンを座椅子に座らせると、皆一斉に食べ始めた。蘭に渡された、お粥の入ったお茶碗とスプーンを持つ手が止まる…。

また、これを食べたら嘔吐が始まる事にコナンには恐怖が待ってい

た。”食べなきゃダメ？”と言うコナンに蘭は心を痛めつつも、”頑張ろう”と促したそれでも食べようとしないコナン。

“じゃあ、ぼく後で食べるよ。皆の食事の邪魔しちゃ悪いしさ…”

といい、側にある嘔吐用のボールに目をやるコナン。自分の病気のせいで…皆に迷惑かけてる事にいた堪れない様子のコナンに対して、和葉と服部は一斉に口を開く。

“嘔吐の事なら、聞いてるで～！”

“えっ？”

“そんなん気にせんで、はよ、食べ！せやないと、元気になられへんやないか？”

2人の言葉に安堵した様子だったが、やっぱり躊躇してしまうコナン。それをみて、小五郎が”しょうがねーな”といい、コナンの手からお粥を奪うと無理やり口を開かせ、押し込んだ。

“！！！……おじさぁんっ……”

涙ながらに訴えるコナンをみて、蘭達から非難の声が上がる。

“おっちゃん、何やってんの？”

“やめときて…”

“お父さん！コナンくん、かわいそうじゃない”

“うるせーな！！こうでもしないと食わねーんだょっ”

口を抑えるコナンは、苦しそうに嘔吐し始める…。

“ううっ…ゲホゲホゲホッ……。”

“大丈夫？コナンくん…もう、お父さん！”

震えながら、嘔吐するコナンの背中をさする蘭は、小五郎の無理な行動を責めた。

嘔吐しながらもどうにか、食べ終えたコナンはあまりにも疲れ果てていた…。

“そうだ、明日どこかドライブしに行かない？”

“ドライブ～？”

“ほら、コナンくん…折角退院したんだし、家にいても、つまんないよどこか行った方がいいと思って…ね、コナンくん、どこ行きたい？”

蘭の提案に一同は驚いていたが、コナンが元気になればと思うと、賛成せざるを得なかった。

“うーん、じゃ…海とかかな？”

“海？いいじゃない！行こう、海。お父さん、レンタカーよろしくね”

半ば強引に蘭に促された感じだったが、明日早速行く事になった。

☆思い出の海☆

お風呂に入って、小五郎の部屋でくつろいでいると、蘭が入ってきた。

“ごめん、服部君…今回は和葉ちゃんと私の部屋で寝てくれる??”
“なんでや?”
“ほら、コナンくん、夜中に何かあったら困るでしょ??”
“大丈夫やって…俺らが付いてるさかい”

突然の提案に戸惑う服部は拒否をしていたが、蘭の押しに負け結局、和葉と蘭の部屋に寝る事になった。

“たくっ、なんでお前と寝なあかんねん?”
“ええやん、修学旅行みたいでおもろいやん”
“おい、和葉~襲うなや~”
“そら、こっちのセリフや”

口喧嘩をしながらも、仕方なく寝るふたり…夜中に小五郎の部屋から聞こえてくる咳に心配にもなりつつ、朝を迎えた。

“ごめんね~服部君…良く眠れた??”
“こいつのイビキがうるそーて、寝れんかったわ~”
“私はイビキなんてかかへん”

冗談を言う、服部に和葉の反感を買ってしまう。けど服部はコナンの事が気になって、眠れなかったのは、事実だった。

“おーい、レンタカー借りてきたぞー”

朝食を済ませ、忘れ物はないか確認をしていると、ププーという音と同時に小五郎がレンタカーで現れた。

コナンにマスクを付けて、あったかい格好をさせるが“暑いよ〜”という、コナンの口から出るわがままに、なんだか愛らしさを感じていた。

車椅子を積み、コナンを抱えて乗り込む蘭。運転する小五郎を筆頭に、海へ向けて出発した。

窓を開けると、涼しい風が入ってくる。コナンは目を瞑り風を感じていた。

“コナンくん、寒くない??”

と、心配する蘭をよそにコナンは風が気持ち良くてたまらなかった。そんなコナンを見てると、病気なんて起きてない様な感覚を覚えてしまうのはなぜだろう。

“けど、大丈夫かぁ??病院から、かなり遠くなってるぞ?”

“一番近い海、そこしかないのよ〜でも、大丈夫よ。ちゃんと薬持ってきたから”

塩の匂いと共に、だんだんと海が近づいてきた…ようやく海に到着し、コナンを車椅子に乗せ、海際まで行って見る。

“コナンくん、着いたよ海……”

“うん…”

砂浜に目をやると…元太達の顔が脳裏に浮かぶ……。

あいつらと、潮干狩りや海にキャンプ…良く行ってたのに…もう、行けないのかな??

いつも、前向きに考えていた気持ちが一変して卑屈になってゆく…。

でも、この海の潮の匂いを肌で感じられるこの瞬間だけは、生きてると思えるのだった。

☆コナンの想い☆

その後、小五郎と服部達と別れ、蘭はコナンの車椅子を押しながら、海辺に沿って歩いていた…。

優しい風が吹きつける中で、蘭の髪がゆっくり揺れる。

“気持ちいいね、コナンくん…。”

“うん…そうだね……蘭ねーちゃん…ありがとう”

“えっ?どうしたの??”

“ぅぅん、何でもない”

自分の事を今までずっと看病してくれた蘭に、どうしても言っておきたかった言葉…いつ死んでしまうかわからないこの身体をずっと、抱きしめ守ってくれた。

きっと、コナンが死んでしまう直前まで側から離れず、守ってくれるだろう。

病気になるまでもずっと、弟の様に面倒を見てくれた蘭。それまでも、幾度となく見守ってくれた。

病気になってからは、辛いのを押し殺して…コナンから目を離す事なく側にいてくれた蘭に…。

きっと、これからも迷惑を掛けてしまうだろう。本当は…命がけで守り抜いてあげたかった蘭に、俺は何をしてあげれるんだろう?

限りなく限界に近いこの身体…残された命で蘭にしてあげれること

…。きっと、それは…一日でも長く蘭の側にいて、生きることなんだ…。

コナンはわかっていた。蘭が来なかったあの日から…皆の様子が変わって行ったこと…。

見舞いに来る人のコナンを見る目がいつもと違って寂しそうになっていった事。

灰原が病室にこれなくなった事も…病気に蝕まれ始めた時から、”大丈夫”と励まし続けてくれた蘭の事も…ずっと、わかっていた。

発作や嘔吐をした時だって、苦しそうな俺を見る度、泣きそうになる蘭や心配する眼差しで見る皆の様子で、ただの扁桃腺ではない事に気づいていたが、どうしても…聞く勇気がなかった。

俺は、あとどの位生きられるんだろう。咳ひとつしただけで、心配する蘭。発作なんて起きたりしたら、また蘭に心配させてしまう。

いつかのレストランで言えなかったあの気持ちをせめて、本当の自分の声で伝えてあげたかった…。

遺される者への、申し訳なさと不甲斐なさ、そして…一番大事な蘭への思いが気持ちを掻き乱し、コナンは遺された命を精一杯生きる事を決意した。

☆コナンの告白☆

“コナンくん…大丈夫？寒くない？？”
“ぅん、大丈夫だょ。蘭ねーちゃん……。”

冷たい風が2人の身体を吹き付ける。暖かい服を着ていても、容赦なく寒さはコナンの身体を冷やしていく。

震えるコナンの背中を蘭は自分のコートを掛けて温める。

“大丈夫だょ…蘭ねーちゃんが寒いよ”
“いいのよ、コナンくん…私の事は心配しないで…”

蘭が掛けてくれたコートを握りしめ、温もりを感じつつ蘭の優しさが肌を温めていた…。

暫く歩いていると、突然コナンが車椅子を止めた。蘭は不思議な顔をして、コナンの背中を見る。

“どうしたの？コナンくん…”

“蘭ねーちゃん…ぼく、蘭ねーちゃんにいいたい事があるんだ…。”

そのか細い声は、海の波音に消されない様に、一生懸命に小さな口で話し始めた…。

“今まで…ぼくの看病をしてくれて、嬉しかったょ…。ずっとぼくの側にいてくれて、ありがとう…”

なぜか、突然お別れの様に言い出したコナン…胸が締め付けられる想いがした蘭。車椅子のストッパーを止め、コナンと向き合う。

“どうしたのよ、突然…？”

“お礼が言いたかったんだ…もう、言えないかもしれないから…”

その、ちいさな胸にはとても大きな覚悟をしている事に、蘭は感じ取っていた。

もう、何を言ってもごまかせないのかも知れない…病気の事、コナンくんは知ってしまっている。という、確信が胸を貫いた。

それでも、蘭はコナンに悟られない様に励まし続けた……。

“コナンくん…何弱気になってるのよ…コナンくん、今生きてるじゃない…”

そう言った蘭の瞳から大粒の涙がこぼれ始めた…。

“蘭ねーちゃん、ぼく…大丈夫だょ。最後まで頑張るからっ。だから…お願い蘭ねーちゃん、泣かないで…ずっと、笑っててよ…ぼく、蘭ねーちゃんの笑顔が一番好きだからさ”

コナンが発した言葉にこの子はこんなに苦しい病気と戦っていても、ずっと頑張り続けている事に気づかされる蘭。

“コナンくんっ…ごめんね、守ってあげられなくて……ごめんね～”

そういいながら、蘭はコナンに抱きついた。

まだ生きてるちいさな身体を…鼓動を感じ取り、この温もりをまだ、奪わないでと言う気持ちでコナンの身体を力強く抱き締めた。

“ぼく、蘭ねーちゃん達のお陰で、ここまで生きてこれたもん。だから、平気だょ…”

“コナンくん…。”

向かい合い、お互いに見つめ合う蘭とコナンは…暫く微笑みあっていた…。

この一瞬、一瞬を忘れない様に…まだ、思い出にはしたくない、このひとときを噛み締めて…。

☆想いでの写真☆

そんな2人の様子を遠くの浜辺からみていた小五郎、平次、和葉…。

苦しみながらも、残りの少ない命を精一杯生きようとしているコナンを前にすると、自分らがこうして生きている事に感謝せざるを得なかった。

“けど、よかったわ～発作起こらんで～それにコナンくん思ったより、元気そうやしな～”

蘭と向かい合って話すコナンを見つめながら、和葉が安堵した様に話す。

“あの坊主、自分の病気の事感づいてるかも知れへんな～”
“え～？なんでー？？”
“なんとなくや”

そんな会話をしていると、蘭がコナンの車椅子を押しながら、ゆっくりと帰ってきた。

そして、帰る前に写真を撮ろうという事になった。

コナンを中心に囲む４人。セルフタイマーが自動的に押され、フラッシュする。

皆が自然と笑顔になるこの時、こうして笑ってるのが当たり前で、でも当たり前じゃなく、これが生きてるという事だという事にコナンの笑顔を見る度に気づかされるのだった…。

ー帰り道ー

疲れてしまったのか、コナンは車の中でスヤスヤと寝入ってしまった。

少し距離のあった海に行くのは、心配もあったが…発作もなく、無事に帰る事が出来てよかったと、安心感さえ芽生えて来た。

コナンの気持ちよさそうに眠った顔を見て、安心したのか…そのまま蘭も一緒に眠っていた…。

その夜、皆が見守る中、嘔吐しながらも頑張って食べようとするコナン。それを手伝うかの様に、背中をさする蘭。

そんな光景を見ていた平次と和葉にも、コナンの身体を蝕む病の大きさを身にしみて、感じるのだった…。

☆命をかけた発作☆

皆が寝静まった一次退院2日目の夜…。それは起こった…。

“ゲホッ、ゲホゲホゲホッ…”

なかなか咳が止まらないコナンを心配して、蘭がコナンの背中をさする…。

“らぁん、ねー…ちゃ…ん……ゲホゲホゲホッ…”

苦しそうに胸を抑えながら、蘭の名前を呼ぶ…。

“苦しいの??薬飲む?”

そう言うと、蘭は台所から薬と水を持って来て、コナンに飲ませた。少しは楽になったものの、なかなか咳が止まらない。そればかりか、呼吸も乱し始めた…。

“コナンくん…”

心配しながら、背中をさすり続ける蘭…コナンの容体に驚いた小五郎は、救急車を呼ぼうとしていた…。

“おじさぁん…大丈夫…ゲホッ…救急車呼ばないで…”

弱々しい、小さな声で訴えるコナンを見て、病院に行きたくないそう言ってる様に聞こえた。

“大丈夫だ、コナン…また戻ってこれるから”

そう言うと、小五郎は救急車を呼びにいった。

荒かったコナンの呼吸が一変して小さくなって…布団を握りしめていた手に力がなくなっていった。

“コナンくん?コナンくん、コナンくん!!”

コナンを力強く抱き締めながら、泣き叫ぶ蘭。その声を聞き、慌てて小五郎の部屋へやって来た、平次と和葉。

“どないしてん?”

“コナンくんが、コナンくんが!!”

コナンが息をしてないと思っていた蘭は、平次に助けを求めると、平次はコナンの脈を確かめた。

“大丈夫や、まだ生きてるで”

“よかった…”

救急車を呼び戻ってきた小五郎は、小型酸素ボンベを取りだしコナンの口に当てた。

“蘭、救急車が来るまでこれで空気を送っとけ…”

指示された通り説明する小五郎に頷き、意識がないコナンの口から、酸素ボンベで空気を送り込む。

“コナンくん、死なないで…”

そう、祈り続けながら救急車が来るまでの数分間、ひたすら空気を送り続けた。

☆あれから一ヶ月☆

病院に着き、急いで救急治療室に運ばれたコナン…。

皆が心配して待っている中、救急治療室の扉が開いた……。

ガラガラガラ……という音と共に、ストレッチャーに乗ったコナンが出てきた。

病室に運ばれたコナン…鼻には酸素チューブを挿入され、腕には点滴、指にはパルスオキシメーターがはめられていた。

一通りの処置を終わらせた後、先生は、コナンを一人残して、皆を病室の外に促した。

“そろそろ、覚悟を決められた方がよろしいかと思います…”

ついに、この時が来たと思った。覚悟はしていたつもりだったのに…その言葉を聞いて想像以上に早かったコナンの病は、死を待つしかないのかと諦めるしかなかった…。

悲しそうな蘭を見るなり、先生は言った。

“蘭さん…死を宣告してから今日で丁度1ヶ月ですね…コナンくん、ちゃんと頑張っていますよ。まだ、生きたいという気持ちがある限りは大丈夫ですので、それまで蘭さんの笑顔を見せてあげてください。”

“はい…”

2ヶ月と言われてから、もう一ヶ月もたったんだ。たった一ヶ月でこんなに病気が悪化してしまうなんて…でも、この一ヶ月…コナンくんはずっと、病気と戦って頑張っていたよね…。

私たちは何もできないし、してあげられない。ただ、見守るだけしかない。それがどうしようも無い事くらい、わかっていたのに…まだ、コナンくんは苦しめられる病気から、逃れる事ができないんだ…。

そんな事を考えてると、先生は言った。

“蘭さん…コナンくんに、病気の事、話しませんか?”

“えっ??”

“多分、コナンくん自身、気づいてる様な気がしますが、ちゃんと話してあげましょう?”

海での出来事を話しつつ、

蘭はコナンが病気の事を薄々気づいている事を先生に伝えた…。そして、病気のこと、話す決意をした。

“じゃあ、コナンくんが目を覚ましたら、呼んでください”

先生はそう言って病室を後にした。

蘭は眠っているコナンの顔を覗き込みながら、点滴や注射の跡でいっぱいのコナンの腕をさすっていた。

コナンは覚悟を決めていたんだ…。薄々気づいていた病に侵され続け、必死に生きようと頑張っていた事を思うと、とてもいたたまれない気持ちになった。

体力が限界に近づいてるコナン。蘭はコナンに伝えられた言葉が頭をよぎる。

～蘭ねーちゃんの笑顔が一番好きだからさ～

“コナンくん…”

（まだ、コナンくんを奪わないで）

蘭はそう思い、ギュッとコナンの手を握っていた。

☆本当の病気☆

“ぅ…んん…ん……”

蘭に手を握られながら、その青白い顔の瞼がゆっくり開かれる…。

“コナンくん…”

“よう、大丈夫かぁ?”

蘭や小五郎、平次や和葉が見守る中、キョロキョロするコナンは、ここが病院である事を察した。

戻って来てしまった……。と寂しそうな顔するコナンに、お医者さんから話がある事を伝えた…。

“大丈夫かな?コナンくん…”

“ぅん、大丈夫…ケホケホッ…”

咳をしながらも、答えるコナンはとても大丈夫だとは思えない。

そして、コナンに本当の病気の事を話し始めた……。

“コナンくんも、薄々気づいてると思うんだけど…コナンくんの病気は扁桃腺ではないんだ…とても難しい病気でね、今のコナンくんの体力では治す事がとても難しいんだ”

黙って、先生の話しを聞き続けるコナン。やっぱり、思っていた通りだと、確信する。

“これまで、苦しい思いをして頑張って来たね…コナンくん、君の命は残り少ないかも知れない…でも、諦めちゃダメだょ…一日でも長く生きよう。それが、今のコナンくんにとって一番大事な事だからね…”

“ぅん、わかった。”

先生の話しを聞いていたコナン告げられた本当の事…それはあまりにも酷なはずなのに…なぜか、コナンの顔はすっきりしていた。

本当の病気を知る事ができたことに、ホッとしたのかも知れない…。

病院に戻ったコナンの身体はそれから間もなくして、異変を感じていた…。

体力を少しづつつけて行ったコナンだったが、嘔吐がなくなると同時に、再度発作が始まっていった。

嘔吐の苦しさがなくなる代わり、喉や心臓の痛みが激しくなった。

☆あの子の事☆

コナンに本当の病気を告げた事を皆に知らせた次の日、哀は博士を連れ、大事な話をしにやって来た。

病室に入ると、コナンの鼻に挿入された酸素チューブが目に入る。

コナンの病気が、そこまで深刻化している事…そして…もう時間がない事を確信すると、話さずにはいられなかった。

“博士、服部平次くんがそろそろ来るはずだから連れてきてくれる？”

“ああ、わかった…。”

そういい、博士はいったん病室を出て行った。

残された哀は、眠っているコナンを黙って見ていた。

（工藤君……）

“ん……あぁ……”

“工藤君？”

“あっ？はぃ…ばら……”

目が覚めたコナンは、灰原の存在を確認する。

“工藤君…少し、話せるかしら？？”

“えっ？ああ。ケホケホッ…”

咳をしながら返事をするコナンは起き上がろうとするが”辛いならそのままでいいわ”という灰原の言葉に、大丈夫だと言って起き上がった。それを見て、哀はベッドを起こしてあげた。

そうこうしてるうちに、平次を連れて博士がやってきた。この４人の共通点…たった一つ…工藤新一。

“工藤君…医者から宣告されたようね…聞いたんでしょ？本当の病気…”

“ああ、聞いたよ……”

“貴方が話せるうちに聞いておくわ…彼女の事、どうするつもり？”

“彼女って…蘭の事か？？”

“ええ。貴方が…江戸川コナンが死んだあと、帰るはずもない工藤新一をひたすら待つ事になるのよ？かと言って、貴方の正体を今バラせば、彼らの標的にされるわ…”

考えてないわけではない。どんな状況になっても、コナンから目を離さなかった蘭に…。正体を話そうかとも思っていたが、今はどうすればいいのか、分からずにいた。

“私に提案があるのだけど…のめるかしら？”

“提案…？”

博士や平次も何を言い出すのか不思議に思い、哀の言葉を待った…。

“貴方が死んだ後、工藤新一の声で話すわ…”俺は、事情があって…外国へ行く事になった。戻る事はないと思う”って…その事情はまだ、考えてないけど…貴方が死んだと聞かされるより、彼女の負担は少ないと思うの…。”

それを聞いていた平次は哀に尋ねた…。

“けど、ねーちゃん…死んだ事ちゃんと言った方がええんちゃうか？”

“いいけど…彼女、ちゃんと受け止められるかしら？江戸川コナンと工藤新一は別として伝える訳だから、彼女は二人同時に失う事になるのよ？今だって、あれだけ思いつめてるのに…”

それを理解して、博士と平次は哀の言う事を従う事にした。

“大丈夫じゃ、新一くん…哀君に任せておけば、心配ない”

“ああ、ケホケホッ…けど…蘭はそれで納得するのか？”

博士がなだめるが、コナンは疑問をぶつける…。

“納得…しないでしょうね？でも、納得してもらうしかないのよ…もう工藤新一とは会えないんだから。大丈夫…たっぷり時間をかけて納得してもらうから…”

ニヤリと笑う哀を見て、コナンは不思議に思ったが、今の自分の力では何も出来ないと思うと、任せるしかなかった。

“悪いな…灰原…ケホッ…いろいろ迷惑かけちまって……ケホケホッ……”

言いながら、咳き込むコナンだったが、そのうち胸を抑え前のめりになっていった”

“はぁ…はぁ…”

“おい、工藤…発作か??”

心配する平次はすぐさま先生を呼んだ…。ベッドを下げてとの哀の要求にすぐにベッドを元の位置に戻した。

そのあと、先生が来るまで博士はコナンの背中をさすり続けた。

☆だんだん深刻化してゆく病☆

ナースコールを押すと、すぐに先生が来てくれた。

“コナンくん、大丈夫だからね～深呼吸するよ～吸って～はいて～……”

“はぁ～～はぁ～～～”

そういいながら、コナンに深呼吸を促した。コナンは目を閉じ、辛そうにシーツを掴み、深呼吸を懸命に行っていた…。

暫くすると、落ち着いたのか呼吸も楽になって来たようで、コナンを仰向けにすると…酸素ボンベを口に当て、空気を送り続けた。

点滴を変え、布団をかけると…心配そうに見ていた平次たちに声をかけた。

“大丈夫ですよ…ですが、この調子だと発作が多くなるかもしれませんね…呼吸も弱くなっていますし…また、何かあったら呼んでください”

先生は病室を出て行った。胸を抑え、やっと呼吸をしているコナンに近寄る三人…。それに気付き、コナンは小さな声でポツリと言った。

“悪いな…はぁ…はぁ……”

“そう思うんだったら、一日も長く生きる事ね…あの子の為にも…”

“ああ…”

そんな話をしていると、蘭が和葉を連れて入って来た。

“あら～みんな来てたの？服部くんここにいたのね…急に居なくなるから、どこに行ったかと思ったょ～”

“平次、出かけるんやったら、一言言ってからにしーや”

“しゃーないやろー”

三人の様子が違う事に気づいた蘭が不思議そうに聞いた。

“何かあったの？”

“発作を起こしたんじゃー”

“これからは、発作の回数が多くなるでしょうって…”

“そう…”

博士や哀の言葉を聞いて…胸を抑え、懸命に呼吸をしているコナンを覗き込み、蘭が心配そうに尋ねた…。

“大丈夫？？”

“大丈夫…だょ…”

その小さな声は蘭の問いかけにも無理して答えたような感じはしていた…。これ以上、心配かけないようにと。そんなコナンの頭を撫でながら”無理しないで”と思うのだった。

☆笑ってよ…☆

それから程なくして、発作の回数も日に日に増して行った。初めは一日に2回程度だった発作が4～5回にまで増えた。

その様子を見ていた蘭は、ずっと心を傷めていた。どうしてこんなにコナンくんを苦しめるんだろう。こんなに苦しい思いをさせるくらいなら、いっそ…早く楽にしてあげてと残酷な事まで…考えるようになってしまった。

そんな様子を感じたのか、コナンは蘭を見て、小さな声で言った。

“蘭ねーちゃん…はぁ…ごめんね、心配かけて…はぁ…はぁ…ぼく、まだ頑張れるから…生きれるから…はぁ…だから、心配しないで…はぁ…”

“コナンくん……”

発作の後、いつもこうしてコナンの手を握っている蘭…。コナンを握る蘭の手が震える…肩を震わせ、コナンの手を額に当てると静かに泣き始めた。

“ごめん、コナンくん…泣かないって決めたのに…こんな思いさせちゃって…頑張ってるのにね、コナンくん、ずっと頑張ってるのに…でも、もぅ…”

“蘭ねーちゃん…笑ってよ……”

蘭の言おうとしている事を分かったのか、その言葉を遮り、コナンはにっこり笑って言った。コナンの手に額を当て泣いていた蘭の顔が姿を現す。

“ごめん、コナンくん…そうだょね…笑わなきゃね……”

コナンの言葉でなんて事を言おうとしたんだろうと反省しつつ、コナンに精一杯の笑顔を見せてあげた。

また、コナンも辛い顔を押し殺し、蘭に笑顔をみせた。

二人の視線がぶつかる中…諦めちゃいけない事を蘭は思い知らされたのだった。

☆握れない手☆

いつものように、コナンの食事に付き合っていた蘭。

“はぃ、コナンくん”

といい、コナンにスプーンを差し出した。蘭からスプーンを受け取ったはずのコナンだったが…。

?ガシャーン?

コナンは手を滑らせ、床に落としてしまった。スプーンを洗いに行こうとした蘭と入れ違いに、哀と少年探偵団は入って来た。

“あら、みんな~。コナンくんなら中にいるわよー”

といい、いったん病室を出ていった。

“どうしたの?なんか慌てて出て行ったけど…蘭さん……”

“あっ、いや~”

慌てながら病室を出ていった蘭の様子が気になり、コナンに声をかけた。

“何?何かあったの??”

“さっき、俺、スプーン落としちゃってさ、ゴホゴホッ…それで蘭ねーちゃんが洗いに行ったんだゴホゴホッ…”

“たくっ、気をつけなさいよ”

半ば呆れながら言う哀。コナンの咳がひどくなってる事に気が付いたあゆみはコナンに近寄り、心配そうに尋ねた。

“コナンくん…大丈夫??咳ひどいょ”

“大丈夫だょ…心配ねーって…夕方になると…ゴホゴホッ…いつもこうなんだ…”

口を抑えながら話すコナンの声がかすれてる様に感じていた。

“お待たせ、コナンくん…はい、スプーン…”

“ありがとう、蘭ねーちゃん…”

スプーンを洗い、病室に戻って来た蘭からスプーンを受けとるが、またしても落としてしまう…。そんな様子を見ていた探偵団と哀もまた、心配が募る。

それを心配した蘭はコナンの手を取って、まじまじとみた。

“手…どうしたの?”

“何でもないよー…ゴホゴホッ…ただ、手が滑っただけだから…”

“そんなはずないでしょ?私の手、握ってごらんなさい”

平気な顔して言うコナンに皆の心配が襲う…。

“大丈夫だょー”

蘭の手を握ろうとしないコナンに蘭は?お願い?とすごむと、泣く泣くコナンは手を握り返した。

“コナンくん…”

手を握り返したコナンの握力が凄く弱くなってる事に、蘭の心配は大きくなる。

“今日は私が食べさせてあげる”

そう言うと、再度洗って来たスプーンをコナンの口まで運び、食べさせた。

食事が終わると…先生が来て、コナンの手をチェックしていた。

“握力が低下してますね…コナンくん、もしかして手が痺れてるんじゃないかい？”

“えっ？ぅ、ぅん…”

自分自身の手が動きにくくなっている事…隠しているつもりだったが、身体がだんだん異変を感じてしまい、これ以上は隠せない…そう思っていた…。

その様子を見ていた蘭達は、コナンが懸命に手を動かそうとしている事に胸を締め付けられる思いがした。

先生が病室を出ていった後、蘭はコナンと話していた。

“大丈夫？手…”

“大丈夫だょ…”

握力の低下で手が動きにくくなっている筈なのに、それでも弱音を言わないコナン…。そんな蘭は、コナンにお願いをすることにした。

“ねぇ、コナンくん…約束してくれる？”
“えっ？”
“これからは、ちょっとでも何か身体に異変を感じたら、言って欲しいの…だって、コナンくんには一日でも長く、生きて欲しいから…”
“蘭ねーちゃん…”

あの日の海の決意から、心配をかけまいと、どんな事でも頑張って生きていたコナン…弱音をはかず、いつでも笑顔でいた…でも、それは逆に蘭達を心配させていた事に申し訳なさでいっぱいだった。

“そうょ、貴方が無理をすれば、その分長く生きられないかもしれないのよ！何かあったら、なんでもいいなさい…それにこれは、貴方の為だけに言ってるんじゃないのよ…貴方を心配する人の事も考えなさいって言ってるのよ。”

哀の心配する言葉を思い、探偵団の皆もコナンに詰め寄り、”お願い”と頼み込んだ。

次の日から食事の時は…コナンの手にスプーンを包帯で固定して食べる事になった。

☆身体の限界☆

次の日の夜、手に包帯でスプーンを巻きつけて食べることになった。この日も蘭は、コナンの食事に付き合っていた。

”大丈夫だよ、コナンくん・・・ゆっくりでいいから、落ち着いて食べてね・・”

”うん・・・。”

蘭の言葉に、不器用ながらも…ゆっくりと、食事を口に持ってくコナン…。スプーンをすくおうとする手が震える・・・。腕の力が、弱くなってるからと言って、周りの人がやってあげてしまうのはよくないといわれ、蘭は、少しずつでもいいからコナンにやらせようと見守っていた・・・。

私たちわ、見守ることしかできないんだね・・・・。でも、ううん、そうじゃない…見守ってあげることができるんだよね…。いつかの日、コナンに言われた”ありがとう”は、弱り切っていた、蘭の心に光を差す・・・・。

小五郎に事情を聞いた英理が、コナンの様子を心配してやってきた…。

”大丈夫…??コナン君・・・”

とても、大丈夫だとは言えないコナンの様子を見ながら声をかける英理…でも、少しでも生きてる証が欲しくて・・・声をかけずには、いられなかった・・。小五郎もまた、そんなコナンの”大丈夫”の声を聞いて心配な思いで見守っていた・・・。

”ゴホゴホ…ゴホゴホ…”

そのあとも、やっとの思いで食べてるコナンだったが突然むせだしてしまった・・・。なかなか止まない咳に、急いで先生を呼ぶとペンライトを片手に、コナンの喉を診察し始めた・・・。消毒を挿してもらい、しばらくすると咳は止んだので・・・再び食事を始めた…。

ゆっくり食べていたコナンだったが、慌てて口を塞ぐコナン・・・。目をパチパチさせながら、身体を固めてしまった。蘭も、その様子になぜ口を塞いでいるのかすぐわっかた…。嗚咽と一緒に漏れる何かが零れる音…。

”コナンくん、見せて…。”

蘭の言葉に、ただただ首を振るだけのコナン…。次第に、コナンの目が潤んでいく…その瞳から零れる涙は…激しい痛みに耐えられなくなっていた事を、物語っていた・・。

”蘭、どいてみろ・・・。”

”あなた・・・。”

英理の止めるすべもなく、小五郎は懸命に口を覆っていたコナンの手を無理矢理解き、コナンの口から解放した…。その瞬間、その場にいた人達の顔が青ざめる・・・。コナンの口と手には、少量ではあったが、口から血が付いていた・・・・。吐血…それは、コナンの身体が限界に近いことを訴えていた…。

”血じゃねーか・・・。”

急いでナースコールを押す小五郎。すぐにきた先生からは”心配なさらないように”との、言葉をかけられた。すぐにコナンはタンカに乗せられ、緊急治療室に運ばれた。

☆最期の可能性☆

“あなた…コナンくん相当悪いのね…様子を見て分かったわ…”
“もう、身体が限界来てるらしい…まだ、自分で食べる事が出来るだけで、マシだそうだ…”
“そう…”

ガラガラと音と共に、戻って来たコナン…これまで何度ストレッチャーで運ばれた事か…。幾度となく、身体の異変を感じ…発作を起こし、何かある度に運ばれて行った。

血を吐いたが、洗浄したので大丈夫だという医者の言葉にホッとし、ストレッチャーに乗ったコナンを覗き込むと…大きな目をパチパチさせて笑っていた…。そんなコナンを見ると自然と口元が緩む…。

それからも～いつもの様に哀は相変わらず探偵団と一緒にやって来ては、コナンの身体の具合を聞いては帰った…まるで医者の様な態度で…。そんな、哀の様子を不思議そうに見るコナン…。

“きっと哀ちゃんも辛いのよ”
“照れてるだけだって”
“きっと、そのうちまた、来ますよ”

という、探偵団の声かけに頷くコナン。コナンをだんだんと蝕んでゆく病によって、声がかすれて、出にくくなっていたコナンは、医者から“あまり声を出しちゃだめだょ”と言われていた。

それでも、出そうとするコナンは蘭や小五郎に怒られてしまう…。

そんな日々を送っていたある日…。

“毛利さん…”

医者から呼ばれた蘭と小五郎…。今までもいい話なんて聞かされた事がなかった為か、そう呼ばれる度に、心臓が一つなる。きっと、また嫌な話であろうとさみしそうな顔をして先生の後へついて行く。

会議室に通された、小五郎と蘭は…そこで思いもよらぬ事を聞かされた…。

“実は…ある方からの提供でコナンくんの治療法が見つかりました…ですが、今のコナンくんの体力が弱り切っていて、手術を行う上で体力がついて行けるかが不安ですね…。

“本当ですか～??でも、手術で助かるかもしれないんですょね?”

“……はっきりいいましょう。手術をして助かる見込みは五分五分です”

喜ぶ半面、助からない可能性もあると言われたが、蘭の気持ちはすでに手術の言葉で埋め尽くされた。ゼロじゃないその状況が、生き残る可能性に近づいた事で、コナンくんを助けてあげられるかもしれないと思うとなんだか、嬉しくなっていた。

“このまま、手術をしないで死を待っている時間より、手術をして助からなかった場合では…後者の方が、コナンくんの命は残り僅かになります。体力の問題もありますから。昨日のコナンくんの検査では、ギリギリ手術出来る体力の数値に達していましたが、早目の決断がいいでしょう。幸い…ご家族の方がすぐに決断されたので安

心ではありますが、コナンくんの意志も必要です。話しますか？”

“はい、私がコナンくんに話します…”

明るく答えた蘭の言葉に医師はホッとし、手術の日取りやコナンの体力を見た上で決行しましょうといい、話はそれで終わった。

諦めていたコナンの命が救われるかもしれない。手術をすれば、例え５０％の確率だったとしても助かる可能性はある…そんな蘭の様子を見ていた小五郎は蘭の肩を抱き、良かったなと声をかけた。

☆手術前のピンチ☆

手術の話を聞いた蘭はもしかしたら、コナンくんは助かるかも知れないと…期待を胸に膨らませ、コナンにこの事を話そうと病室に戻った。

“蘭さんっ、コナンくんが、コナンくんがっっ…”

蘭の姿を見つけると、慌てた様子で駆け寄る光彦に促され、蘭と小五郎はコナンの病室に急いだ。

コナンの容体が急変したらしく、コナンの心臓は心停止していた。心拍数の機械音と共に医者や看護師がコナンのそばに近寄り心臓マッサージを試みていた。

“1．2．3．4．5．．．コナンくん、コナンくん…”

コナンを呼びながら、懸命に心臓マッサージをするが、心臓は停止したまま反応がない。

（コナンくん、戻ってきて）

蘭やそこにいた人達はコナンの異常な光景に目をやりつつ、祈っていた。このまま、手術受けられずに死んでしまうの??

（お願いコナンくん…戻ってきてコナンくん…!!）

“離れて…”

そう言うと先生は、心配蘇生を行った。ドクンと音がすると同時に、コナンの身体が大きく揺れる…もう一度心配蘇生を試みるが、心停止したままだった…ダメかと諦めかけていたその時、ピッピッと音がし…コナンの心臓は再び動き出した…。

何とか命は繋がれたものの、手術できる体力はあるのだろうか??と不安になる蘭…。目を覚ましたコナンにどう話そうかと、蘭は一人、考えていた。

その夜、何とかピンチを脱出したコナンの心臓に手を当てて、小さいけど確かに心臓が動いている事に、蘭は安心できるのであった。

☆少年探偵団の思い☆

友達の命が危ない…もう、救うことはできない…。そう、思い知らされた少年探偵団達。

幾度となくコナンの発作を目にし、一つの命の重さを子供ながらに感じていた。

せっかく出来た友達なのに、もうすぐお別れが来てしまう。誰にも救えないその病気に一人で戦っていたコナンを見ていると辛くて、泣いてしまうことさえあったが、ずっと我慢をしていた。そんな自分たちをコナンがみれば、逆に励まされてしまうことは分かっていたから。

コナンが元気な時、皆を必死に守ってくれた。どんなに危険な時でさえ励まし、絶対大丈夫だといい、ピンチを乗り越えた。

そんなコナンが今はこうして病と戦っている…。残り少ない命を一日でも長く生きようと…本当は辛いのに、コナンの見せる顔はいつも笑顔だった。

最期まで笑って送り出すことに決めたとはいえ、刻々と近づいている命のカウントダウンはあまりにも、子供の心では恐怖が押しかかる思いがしてならなかった。

“そんな顔したら、江戸川君が悲しむわよ”

哀の言葉に励まされて来た筈なのに、死の恐怖が押しかかるに連れ、少年探偵団の心はそんな言葉もだんだん励まされる事ができなくな

っていた。

刻々と近づいているコナンとの別れは、今確実に子供達の気持ちの灯火が消え失せる事にも近づいている…。

最期まで笑ってあげよう探偵団…祈りが大きければ、きっと奇跡だって起きるはずだから…。

☆迷い☆

その夜…蘭は一人鎮静剤を打たれ眠っているコナンの病室へ入っていった。コナンの心臓にそっと手を当て…。

“大丈夫…生きてる……”

何度も何度も自分に言い聞かせ、眠っているコナンの手を取り…自分の手でコナンの小さな手を覆い被せた。

“蘭…”

小五郎の呼ぶ声がし一度病室の外へ出ると、英理も一緒にいて、心配そうに娘の事を見つめていた。

“らーん、どうするの？コナン君にいうんでしょ？”

“お母さん…コナンくん、まだいきてる…手術したら…もし助からなかったら…コナンくんはもう生きられないんだょね…”

“貴女、何を？”

蘭らしくない弱気な言葉を聞き、英理は娘が何を言わんとしているのか汲み取っていた。ずっとコナンを支え、看病していた蘭にとっては、コナンとの別れが迫っている事に恐怖さえ芽生えて来たんだろう。

蘭の心は心停止したコナンの事を思い、手術の話をする事に怖くなっていた。

（もし、今度コナン君が心停止を起こした場合、覚悟を決めてくだ

さい）

先生から告げられた、恐ろしい言葉。普通の発作でも怖いというのに…尚もまた、告げられた恐怖に…蘭は手術の話をする事を拒んでしまう。普段、何も考えずに呼吸をし、生きている…でも、コナンにとっては呼吸をする事がどんなに大変か。上手く呼吸が出来なければ、発作が起きてしまう。

それこそ、誰かがそばにいて呼吸の手助けをしないと呼吸が出来ずに死んでしまう。そんなコナンを思うと、蘭はこれ以上の辛い思いをコナンにさせたくない一心で、小五郎と英理に気持ちを話した。

“蘭、お前の気持ちは分かる。だが、このまま何もしなければ、コナンは死ぬのを待つしかないんだぞ？またいつ、心停止するかわからねーし…やるだけの事はやってやろうじゃねーか？”

“お父さん…”

“そうよ、蘭…それに成功する可能性だってあるのよ？貴女が弱気になってどうするのよ？それに、生きるのも死ぬのも可能性半分じゃない。諦めちゃだめょ？”

“お母さん…ぅん、そだね…”

涙いっぱいの蘭は小五郎と英理の言葉に頷き、諦めかけていた自分の心を立ち直らせようとしていた。

“そやでーねーちゃん、あの坊主だってまだ諦めとる訳ちゃうで？生きとるんやから”

“蘭ちゃん、やるだけやってみいひん？”

”服部くん、和葉ちゃん…”

三人の会話を聞いていたのか、帰った筈の2人が戻ってきた。する

とそこへ、またしてもその話を聞いていたのか、姿を現した者がいた。

“蘭おねーさん、あゆみたちからもお願い…コナン君に手術受けさせてあげて”

“おねがいします”

“助かるかもしれねーしな”

“そうね、このまま指を咥えて待ってるなんてマネするより、少しでも可能性のある手術受けさせてあげたほうがいいんじゃない？”

子供達の言葉に蘭は心を打たれ、先程まで迷っていた自分に笑みがこみあげてきた。

“みんな…ごめんね～そうだょね、助かるかもしれないんだもん。コナンくんに話すわ”

蘭の言葉にそこにいた全員の顔には、笑顔が戻った。小五郎や英理もそんな娘の姿にホッとしている。

そうよ、皆も心配してる…私だけじゃない…コナンくんに生きてほしいと思っているのは皆同じじゃない。だめょ…コナンくん奪っちゃ…。

蘭の心の迷いが消え、コナンに手術の事を話す時がきた。コナンはどう思い、どう返事するだろう？なんにしても、コナンの命を助けたい気持ちが整い、あとは病室の扉を開けるだけだった。

☆二つの選択☆

“コナンくん、大きく吸って〜はいて〜”
“はぁ〜〜あ〜〜”

その後すぐ、発作を起こしたコナンは先生の言葉によって懸命に呼吸を整えていた。

発作を起こす度に苦しさが増すのか、シーツを掴むコナンの手が震えていた。

先生達の処置が終わり、コナンの呼吸が安定したのを見て、蘭達がコナンの病室へ入ってきた。こんなに多勢で入ってきたのはあまりなく、何か起きたのだとコナンは不思議に思っていた。

蘭は胸を抑え、荒い呼吸をしているコナンに近より、手を握ると話始めた。

“コナンくん、少し私の話を聞いて欲しいの…”
“ど、どうし…ゲホゲホ”
“いいから、喋らないでいいから聞いて…”

そう言うと、コナンは蘭の顔を覗き不思議な顔して見ていた。蘭はどう切り出すか、少し考えてコナンの顔を見ると口を開いた。

“ねぇ、コナンくん…実はコナンくんが生きる為の治療法がみつかったの…”
“えっ??”

コナンは驚いていた。諦めかけていた自分の命が、もう生きれないと思っていた命が繋がる事に…。それと同時に蘭はなぜ思いつめた顔をしているだろうとも思っていた。

“それにはね、手術しなきゃいけないんだって…でもそれは、とても難しい手術で…成功する確率は五分五分で、助からない事もあるんだって…コナンくん、どうする?手術…受けて見る?”

蘭のひとつひとつの言葉が胸に突き刺さる…手術をして助からなければ、予定より短い命で終わる。その事を思いつめ、蘭はこんな顔をしているんだろう。でも…コナンは弱り切っている身体に対して気持ちは元気な頃と同じに強かった。

”ぼく…がんばるょ…助かるかもしれないんでしょ?受けるよ手術…”

電子音にかき消されてしまう様なちいさな声でコナンは確かに受けると言っていた。

“本当、コナンくん?もしかしたら、助からないかもしれないのよ?”

蘭の言葉にコナンは”受けると”もう一度頷いた。そこにいた皆はその言葉にホッとしていたが、その瞬間手術への不安も大きくなっていた。

“失礼します”

丁度いいタイミングで先生は病室に入り、コナンの手術の日取りを知らせにきた。

“予定では3日後に手術を行います。ですが、その前にコナンくんの体力数値が良ければ、その時点で手術になります。3日後になっても数値が達していなければ、手術を先延ばしになる可能性もあるのでご理解をお願いします。”

そう言うと、先生はコナンに近より声をかけた。

“コナンくん、呼吸大丈夫かな?”

“ぅん、大丈夫…”

発作の後は声が出ないコナンはやっとの思いで先生に口パクする。

“手術の日まで頑張るんだょ…当日は一緒に頑張ろう”

そう言うと、先生はコナンの頭を撫でた。そして、先生は蘭と小五郎を呼び病室の外へと促した。

“実は先程の発作でコナンくん、震えていまして…発作が益々苦しくなっているんじゃないかと思いますので、今度発作が起きた時は、コナンくんの手を握ってあげてください”

“はぃ、あの…発作が苦しくなってるって…”

“えぇ、3日もつかどうか…それまでに手術できればいんですがね…我々もできる限りの事はいたしますので…”

先生はそういい、頭を下げて病室を後にした。

病室に戻り、コナンの顔を覗くと先程の発作が落ち着いたのか、スヤスヤと眠っていた。その顔をみてあと3日…それまでどうか、生き延びて欲しい。そう、願いをかけた…。

☆震える身体☆

翌日、カーテンの隙間から漏れる日の明かりに照らされて目を覚ましたコナン。

気がつくと、自分の手を握りしめベッドに身体を預けながら眠っている蘭の存在に目を丸くした。

“蘭……。”

ずっとそばについてくれたんだと、内心嬉しくなる。ドアの開ける音がしたと同時に看護婦さんが入ってきた。

“おはよう、コナンくん”

と言うと、コナンのおデコに手を当てると“ぅん、大丈夫ね”といい、体温計を手渡した。蘭の姿に目をやると、微笑みながらコナンに話しかける。

“おねぇさん、まだ寝てるね”

“ぅん…”

“食事はもう少したってからでいかな?”

と言うと、体温計を持って静かに病室を出て行った。しばらくして目を覚ました蘭はすでに起きていたコナンに気付いた。

“あっ、コナンくん…おはよう”

と笑い、何時の間に寝てしまった自分にちょっぴり恥ずかしさが芽

生えた。

食事をすませ、いつもの通りにコナンの呼吸を手伝っていると、子供達がやってきた。学校行く前に心配して来てくれたらしい。

呼吸が終わると、疲れたのかぐったりしていた。コナンの手を握っていた蘭は震えが止まらないコナンを心配していた。

“大丈夫？コナンくん…もう少し、もう少しだけ頑張ろうね”

そういい、震え続けるコナンの身体を摩りながらコナンを見ると、その目は恐怖に怯えていた。

“蘭ねーちゃん、ごめんね。ぼく恐くなって…”

“コナンくん…”

蘭や子供達が心配の眼差しで見つめる中で…哀はコナンに近づき口を開いた。

“まぁ、無理もないわ…度重なる発作で、しかも助かるかわからない手術を前にしているんだもの…さすがの江戸川君だって怯える事だってあるわよね…でも、しっかりしなさい…成功する確率だってあるんだから…”

“あぁ…”

哀なりの精一杯の励ましを受けるが、怯えは治まらず…コナンは蘭の手を力一杯握りしめていた。

強い事を言っていても、ヤッパリ怖いのはあたり前で…この恐怖をコナンは小さな胸で受け止めようとしている。そんな小さな手や身

体は手術への恐怖に怯えていた…。

蘭はコナンの手をしっかり握りしめて”大丈夫、大丈夫”とコナンの頭を撫で続けた。

その様子をみていた子供達は”頑張って”と、一生懸命に声をかけていた。

☆震える身体☆（後書き）

☆いつも読んでくれてる皆様☆

こんな私めの小説に目を通していただき、ありがとうございます。
ここまで長く続くとは、書くとは思っていなかったので自分でもびっくりしております。

次回は手術をと考えていますので。読んでいただけたら、幸いです。

それでは、寒くなりましたので、風邪にはきをつけてくださいね☆

☆手術前夜の恐怖☆

その日もいつもの様に、蘭に手伝ってもらい夕食を食べ終えた頃、突然先生が病室に入って来た。そして、コナンの体調や数値をみるなり、ホッとした様子で蘭に話しかけた。

“この数値なら、明日にでも手術出来ますよ”

“本当ですか？”

“ええ、いっぱい食べてくれるから数値があがってるとおもいますょ。ねぇ、コナンくん…”

そう言うと、先生はコナンの頭をポンと叩いた。先生の言葉にニコッとするコナンは昨日の恐怖なんてなかった様な顔をしていた。

“コナン君、そう言うわけだから…今日は何も考えずにぐっすり寝るんだ。そして明日は先生と一緒に頑張ろう、ね？”

“うん”

“ぅん、そうそう…明日１１時にスタートしましょうって言ってたょ…うん、だから服部君と和葉ちゃんや皆に言っておいてね～えっ？私は大丈夫。じゃ、よろしくねお父さん…”

その話のあとすぐ小五郎に電話でコナンの手術の事を伝えた。丁度明日は土曜日だから、皆でコナンを手術に臨ませる事ができる。そして、皆で…コナン君の帰りを待っている事が……。

蘭はそう思い、途中で足が止まる。コナン君が死んでしまったらど

うしよう。そう考える度に蘭の心臓は息が詰まるくらい大きく高鳴ってしまう。

その夜、薬を飲み眠るコナンの横でベッドに身体を預け眠っていた蘭はコナンのうなされてる声に突然目が覚めた。

“ぅぅ…ぅぅ…ん”

“コナンくん?どうしたの??”

何かあったらと、すぐにナースコールを押し魘されてるコナンを起こそうと…身体を起こし、揺らした。

“蘭ねーちゃんっ、蘭ねーちゃんっ?”

コナンは蘭の名前を慌てた様子で呼んでいた。その声を聞いた蘭はコナンを抱き締めた。

“私ならここにいるわよ…コナンくん…”

そうこうしてるうちにコナンは目を覚まし…不思議な顔して蘭をみた。荒い息をしながらホッとして言う。

“夢……”

“大丈夫?凄いうなされていたけど…?”

“ぅん、大丈夫”

明日の手術が、怖いんだ…それを言えないで一人で抱えているコナンの手を握ると、やはり震えていた。

“そんな訳ないよね、こんなに震えてるじゃない”

“大丈夫だょ…。”
“話して、コナン君…”

コナンを見つめる蘭だったが、次第にコナンの視線は下に下がってく…。そこへ看護婦さんがやってきて、コナンをなだめると…視線は蘭の目を見つめ、悲しげな表情と共に口を開いた。

“蘭ねーちゃん…やっぱり、怖いよ。”
“怖いって、手術??”
“ううん、死ぬ事が……”

その瞬間、蘭の瞳から大粒の涙がこぼれ落ちた…。

“バカね、死ぬって決まってないじゃない…大丈夫ょ、コナンくん…”
“でも、助からないかもしれないんでしょ?皆ともう逢えないかもしれない”

コナンの恐怖に怯えていた震えは、手術に対してではなく”死の恐怖”だったんだ…皆に逢えないかもしれない。そんな恐怖に怯えて震えていた。どうして気付いてあげられなかったんだろう。

蘭はそのまま、コナンを抱き締めた。

“コナンくん、怖がらないで。大丈夫…私がちゃんと着いていてあげるから…ちゃんと戻って来るまで待っていてあげるから、だから…コナンくんは…なんも心配する事ないのよ…”
“蘭ねーちゃん…ごめんね。”

謝るコナンをマジマジと見つめ、両手でコナンのほっぺに手のひら

を当てる。

“バカね～どうして謝るの？”

“だって、ぼく…”

そんな会話をしていると、先生がやってきてコナンの両手を持ち、話し始めた。

“コナンくん、そんなに怖いかい？”

先生の問いかけに無言で頷くコナン。

“ごめんな、先生がプレッシャーになる事言っちゃったんだな…怖がらなくていいんだょ、コナンくんはただ…信じていてくれれば…”

“……”

“先生の事、信じられないかな？”

先生の優しい問いかけに、首を降るコナン。

“だったら、先生を信じて任せてくれ。いいかい？”

“うん…”

“よし。それなら、もうぐっすり眠れるな…”

そういいながら、コナンの頭を撫でるとコナンを寝かせ、布団をかけた。

“じゃ、あとはなにも考えずにゆっくり眠るんだょ…おやすみ”

“おやすみなさい”

そう言うと、先生は看護婦さんに精神安定剤を打つ様に言うとコナ

ンに手を降り病室をあとにした。

精神安定剤を打たれたコナンはしばらくは震えが止まらなかったが、蘭が見守る中震えが落ちつき、そのうちスヤスヤと眠ってしまった。

心配して様子を見にきた哀…その様子を病室の外で聞いていたが”まったく、ガキなんだから”そうつぶやいて帰っていった。

明日の手術無事に始るのだろうか。コナンのこんな様子を目にした蘭はなかなか寝付けないでいた。

☆手術前夜の恐怖☆（後書き）

☆夜中の2時に布団の中からこんばんは☆

すいません、やはり手術にはまだ行けませんでした。でも次回は大丈夫☆いざ、手術へです☆

中身は高校生でも、やはり怖いものはあります。どんなに喧嘩の強い人だって、注射するのが怖いって言う人もいるくらいですから。

今回は蘭に抱きしめられるコナンを書きたかったので。手術は先延ばしにしました☆

次回もまたよろしくお願いします。と言っても、更新早いので読むのを頑張ってください。熱中すると、とことんなタイプなので。

今日も寒くなりますが、風邪には気をつけてくださいね☆

☆いざ、手術室へ☆

“おい蘭、蘭…”
“う、うーん…お父さん??”

小五郎の声で目を覚ました蘭。すでに起きていたコナンを見るなり、蘭はコナンの手をとって顔を覗くと心配した様子で尋ねた。

“大丈夫?コナンくん??”
“ぅん、大丈夫だょ…ごめんね、蘭ねーちゃん”

元気に答えるコナンを見るとホッとする。気がつくと、そこには皆集まっていた。蘭が寝てる間にコナンは食事を済ませ薬を飲んで、手術へ臨める体制が整えられていた。

そして10時になり、コンコンとドアを叩く音と同時に先生が入ってきた。

“コナンくん、そろそろ手術になるけど、大丈夫かい?先生、頑張るから今日は宜しくね”
“ぅん…ゴホゴホッ…”

コナンの手を取り震えてないのを確かめると、コナンにプレッシャーにならない様に声をかけた。コナンの返事にニコッと笑い、コナンの頭に手をポンと当てた後小五郎達に挨拶をした。

“では、そろそろ手術の準備に入りますので、今日はよろしくお願いします”

そういい、お辞儀し一度病室を出て行った。

緊張感の為か、胸を押さえて呼吸をしているコナンに蘭が声をかける。

“どうしたの？大丈夫ょ～緊張しなくても…”

“ぅん…”

そうこうしてるうちに、ストレッチャーを押し看護婦さんを引き連れ先生がやってきた。

“じゃ、行こうか？コナンくん…”

コナンの様子がおかしい事に気づいた先生は“緊張してるみたいです”という、蘭の言葉を理解し、コナンに深呼吸を促した。

“コナンくん、大丈夫だょ。緊張しなくていいからね…吸って～はいて～”

“スーーハーーーー”

コナンは先生の言葉に従って深呼吸をする。

“コナンくん、まだ息苦しいかな？”

頷くコナンを寝かせると、酸素ボンベを使って空気を送り込んだ。

その時も蘭はコナンの手をしっかり握っている。次第にその手を握るコナンの手に力が入る。もう、コナンの呼吸が力尽きる…そんな事を言われてる気がしてならなかった。

しばらくすると、呼吸も落ち着いてきた。胸を押さえて顔を強張ら

せていたコナンの顔もだんだん落ち着き、手術室へ行く準備をし始めた。

看護婦さんがコナンの頭に手術用帽子をかぶせると”せーの”という掛け声と一緒にコナンの身体はストレッチャーに移された。

口には酸素マスクを装着し、コナンの身体にはシーツをかけられた。

“コナンくん、頑張ってね…あゆみ、ぜぇーたいまってるから!”

“ぼくもです…また会えるって信じてます”

“コナン、また会おうぜ”

探偵団達の声に笑顔になるコナン。その言葉を聞くと、本当にまた会えるかもしれないそんな気がした。それを聞いていた哀も近くに寄ると、コナンに一言。

“言っとくけど、生きて帰って来なかったら私…貴方の事、許さないから…”

“……あぁ。”

“こういう時でもきっついぁ…”

哀も心配してくれてるんだとコナンは汲み取っていたが、服部は知らずに突っ込んでしまい、哀の笑顔の餌食にされてしまった。

“あら、何か言ったかしら?服部くん??”

“こわっ…まぁ、坊主!しっかりな…”

慌ててコナンに声をかける平次だったが、哀に凄まれてるのを気づかないふりをしていた。

“コナン、大丈夫だ。心配しねーで行ってこい”

その後も、小五郎や英理、園子や和葉の”頑張って”の言葉を浴びる中、蘭はコナンをじーと見つめながら思い切りの笑顔を作り、コナンに声をかけた。

“コナンくん、私…待ってるから。コナンくんが出て来るまでずっと…待ってるからね”

そういう蘭を見て、先生の”そろそろ…”の言葉で、コナンの乗ったストレッチャーが動き出した。

“それでは、行ってきます”
“行ってきまーす”

そう挨拶をする先生や看護婦さんと一緒に病室を出発し…コナンは手術室へ向かった。その後を蘭は声をかけながら、ついて行く。

“大丈夫だょ、コナンくん…絶対にまた会えるから…ちゃんと会えるから…だから、ちゃんと帰ってきてね…”
“では、ここでお待ちください”

その言葉で手術室の扉が開き…コナンは先生に連れられて、命を繋ぐ大手術の門をくぐって行った。

コナンを手術室まで見送った後、手術の扉を見つめていた蘭は自分の両腕を絡ませて祈っていた。

（どうか、無事に帰ってきますように…
また会えますように…。）

これが最後にならないようにと。蘭は閉じた自分の瞳から零れ出す涙を拭い、絶対帰ってくるとコナンを…先生を信じて待つ事を誓った。

“蘭…”

英理に肩を抱かれても、微動打に動こうとしない娘を見て、英理は少し心配になる…

そして、手術中の赤いランプが点滅をし、コナンの命をかけた大手術は始まったのだった。

☆私…待っていなきゃ☆

手術室の前の椅子に座ってコナンの帰りを待っている蘭。

そんな蘭を心配して小五郎が無言でコーヒーを渡した。

“あっ、ありがと…”

“お前、大丈夫か?あんま寝てねーだろ?”

“ぅん、大丈夫…”

手術が始まって2時間がたっていた。手術室の扉はあれっきり閉まったまんまで、誰もで入りする形跡がない。

“少し、休んだら?長時間の手術になるみたいだし、すぐには出て来ないわ…”

“先生が言ってた。コナンくんの体力持つかどうかわからないって…”

英理に肩を組まれ、長椅子に座りながら先生の言葉を思い出す蘭。その瞳には、コナンの前では泣かない様に我慢していたものが、一気に溢れ出した。

“ばかね、大丈夫ょ…信じなさい。貴女が泣いててコナンくんは頑張れるのかしら?それにほら、子供達が心配するわ”

気がつくと、蘭を心配してこっちを見ている探偵団の姿があった。慌てて蘭は涙を拭うと、顔を洗いにトイレに行こうとした時…。

“蘭!ちょっと蘭??”

“蘭おねーさん!!”

（私…どうしたんだろう……ダメ…身体が動かない…）

（蘭ねーちゃん、らんねーちゃん……）

“蘭…”

“うーんコナンくん?……おっ、お母さん!”

“よかったわ…過労だそうよ。まだ少し寝てなさい”

一瞬、コナンの声が聞こえた気がした蘭が目を覚ますと、蘭を心配して覗いている英理の姿があった。英理は蘭に声をかけると、寝てる様に促した。

“あっ、コナンくんは??”

“まだ、手術中ょ…それに心配ないわ。博士や子供達、それにあの人がついていてくれてるから、貴女は少し眠っていなさい。”

起き上がろうとする蘭を英理は制止し、布団をかけた。自分の腕に繋がれた点滴を見つめ…蘭は話し始めた。

“でも私…コナンくんと約束したの…待ってるって…コナンくんが出て来るまで待ってるからって…だから…”

“まったく…貴女が倒れていたら、出て来たコナンくんを誰が迎えてあげるのかしら?それに、コナンくん言ってたそうじゃない?貴女の笑顔が一番好きだって…そんな疲れた顔してたら、笑顔なんて見せられないんじゃなくて?”

英理の顔を見つめながら聞く蘭はその言葉に”そうだね”といい、点滴が終わるまで眠る事にした。

点滴が終り、皆のところへ戻る前にコナンの病室を覗いた。そこは、いつもの病室の面影がなく、ガラーンとしていた…。

ベッドの上で笑いながら食べてるコナンの笑顔が脳裏に浮かぶ…。

（コナンくん…きっとまた、見れるよね…。コナンくんの笑った顔…）

そう、思いながら…ベッドの横に飾ってある写真を見つめながら微笑んでいた。

“そう言えば…この日以来、病院を出られなくなっちゃってたね…コナンくん…うぅっ…”

いつの日か、平次達と一緒に行った海での写真。中心に写っているコナンの笑顔をみると、泣かずにはいられなかった。

（だめよ、蘭…ないちゃダメ…コナンくんは今頑張ってるのよ…しっかりしなきゃ…）

病室の窓の隙間から吹く風がカーテンを揺らし、蘭の鳴き声を静かに響かせる。

“蘭おねーさん…”

“あっ、ごめんね。大丈夫ょ…今いくから…”

心配して覗いている子供達に気づき、写真を戻し蘭が病室を出て行

ったあと…また、戻って来てほしいと思いながら…その写真だけが病室の中で静かに佇んでいた。

いつか、戻れる事を祈りながら…。

☆私…待っていなきゃ☆（後書き）

とうとう、手術が始まりました。
長かったですね☆ここまで来るまでが（笑）

今回は蘭がコナンを思う…切ない表情を思い浮かべて書きました…。
海で撮った写真の事を書くのを忘れたので、ここでかいてみました。

今日も寒いですね☆
あったかいおでんに
ときめく時期になりましたね☆
風邪ひかないように気をつけてくださいね（＾－＾）

☆心のこもった千羽鶴☆

皆のところへ戻ると、心配した様子で小五郎が近寄って来た。

“大丈夫か?蘭…”

“ぅん、もう大丈夫ょ…ごめんね、心配させちゃって…”

よかったと、内心ホッとする。コナンの様子が心配で、ここんとこ病院に泊りがけだった蘭。疲れも出たせいか、精神的にも限界がきていた。

“蘭ちゃーん”

“和葉ちゃん…それに、服部くん…”

その声に後ろを振り向いてみると、買い物袋をぶら下げた和葉が平次を連れて戻ってきた。

“どこか行ってたの?”

“これ、買うてきたんや…”

蘭の質問に買い物袋を広げて見せる和葉。その中を覗いて蘭は驚いた。

“折り紙?こんなにいっぱい…”

“せや、手術に時間かかるみたいやし…子供達も不安やろ?…それに皆で折り紙折ってコナンくんの帰りまったらええかなって…”

“ありがとう、コナンくんも喜ぶわ…きっと”

“せやけど、買い過ぎとちゃうか?”

呆れる平次をよそに、蘭と和葉は子供達に声をかけて千羽鶴を折る事にした。一羽一羽、丁寧に…そこにいた皆でコナンの帰りを待ちながら…。

しばらく皆で折っていると…突然一人の看護婦さんが手術室から飛び出し、輸血をもって再度中へ入って行った。その様子を見ていた歩美がポツリと言った。

“コナンくん、大丈夫かな?”

“だょな…手術難しいっていうしよ…”

“歩美ちゃん…もう、元太くんまでそんな事…言わないでください。”

“もし、コナンくんが死んじゃったら、あゆみ…”

泣き出しそうな三人を見て、灰原が呆れた声で言った。

“まったく…あなた達は…なんの為に千羽鶴なんで折ってるのかしら?江戸川くんに見せる為じゃないの?それとも、信じてないのかしら?江戸川くんが戻って来るって…”

“そんな事ない、あゆみ、信じてるもん…”

“僕もです”

“俺だって…”

“だったら…そんな顔してないで、信じて待っていなさい…江戸川くんの為にもね…”

哀に言われ、三人はそれ以上は何も言えなくなってしまった。しかし、三人はしょんぼりしながらも、コナンに渡す為に折り鶴をおり続けた。コナンが帰ってきたら、絶対に、笑って千羽鶴を渡すんだと誓って…。

☆意識の奥の幻想☆

手術開始からもう、６時間が経過していた。途中、看護婦さんや先生が出たり入ったりしていたが、赤いランプが消える事もなく、手術は続けられていた。

さすがに子供達は疲れてしまったのであろう。手術前の椅子で寝入ってしまった。

すると、突然慌てた様子で扉を開けた先生をきっかけに、次々と手術室から出たり入ったりしはじめた。

微かに聴こえるコナンにつけられた心電図の音が危険を表している事にその場にいた全員の心を不安に掻き立てる。

手術室の扉が開く度、コナンに呼びかける先生の大きな声を聞きながら、出来上がった千羽鶴を見つめる。

“コナンくん…どうか、生きて帰ってきて…コナンくん、コナンくんっ！！”

自分の両手を絡ませながら、そう呟く蘭の肩を抱きながら、英理もまた…心配な様子で手術室の扉を見つめていた…。

手術室の中では、コナンの名前を呼び続ける先生によって心臓マッサージが施されていた。

“コナンくん、コナンくん…戻ってこい、生きるんだろっ?生きて、お姉さんの笑顔…見続けるんだろっ?…コナンくんっ……”

先生の懸命な処置にもかかわらず、コナンの心拍数は”ピピピ…ピピピ…”の音が虚しく響いていた。

“コナンくんっ、コナンくんっ”

(誰かが、呼んでる…俺、今まだ生きてるのか?)

“コナンくんっ、コナンくんっ”

(まただ…今度は誰?……蘭?分からない…意識はあるみたいだけど、目が開かない…どうなっちまうんだ?俺…やっぱ、死んじまうのかな…?)

気がつくと、畔にいた。綺麗な水が流れ、一面緑に囲まれた…みた事もない場所だった。

すると、突然コナンの正面に一人の女の人が現れた。どことなく、蘭に似てるその女の人は色白く、無表情でそこに立ちすくんでいた。その女の人は、コナンの後ろをゆっくり指をさすと”帰りなさい”そう言い、その光は渦を巻きコナンの身体を吸い込んでいった。

☆意識の奥の幻想☆（後書き）

幻想の世界は昔テレビでみたみたのをアレンジしながら、真似てみました。
誰かとかぶってしまったら、ごめんなさい。

次回もマイペースによろしくです☆

☆赤いランプが消えたその時…☆

“わぁ～～～～”

渦巻く光の中に吸い込まれ、コナンの意識は手術室へ戻っていた。

（あっ、ここは…俺…手術室？さっきのは一体……）

“コナンくん、コナンくん！！”

（また誰かの声が……今、どうなってるんだ？俺、俺…）

コナンの意識は再び眠りへ落ちてゆく…その時“ピッピッ”の音がして、コナンの心電図は再び正常な音が戻ってきた。

“戻りました！！”

“よし、コナンくん、あと少しだぞ…頑張ろうな。”

先生は戻ったコナンの心電図を確認すると、安心して届いてるか分からない言葉を投げかけて、手術室を再開した。

手術室の前には、さっきの騒ぎで不安に怯えてる蘭や子供達がまだかまだかと、手術室の扉を見つめていた。

赤いランプはまだ消える気配がなく、相変わらず、看護婦さんが出たり入ったりしていた。

手術開始から9時間経過していたコナンの手術…蘭達が祈る中、赤いランプが消え…コナンの命をかけた大手術は終わりを告げた。

扉を開き、最初に出てきた先生に近寄る蘭。それを遠くから見守る子供達。その様子を見る平次と和葉…。皆の見守る中、先生は複雑な表情を浮かべ、話始めた。

“手術は無事に終りました。悪いところも全て、切除出来ました…後は、コナンくんの体力次第です…3日たって目を覚まさなかったら、検査してみましょう”

“じゃ、手術は…?”

先生が手術の説明をし終ると、蘭は恐る恐ると先生に尋ねると、不安でいっぱいの蘭の顔を覗きこみながら、先生は言い放った。

“えぇ、成功です…コナンくんの手術は無事に大成功しました…”

その瞬間、皆それぞれ顔を合わせると…

“やったぁ〜”

そう叫ぶと、手を叩き合ったり、抱き合ったり、肩を組み喜んだりするもの…それぞれが喜び合っていた。

ストレッチャーに乗せられて運ばれて来たコナンは、人工呼吸器をつけられていたが、さほど苦しい表情も浮かべておらず、コナンの顔を見る人達の表情にも笑顔が溢れた。

“コナンくん、よかったね…”

そういいながら、見つめる蘭はさっきの思いつめた顔とは打って変わって笑顔が溢れ出していた。

そんな蘭の顔を見る先生は笑顔で蘭に話しかけた。

“そうそう、お姉ぇーさんのその笑顔が一番みたいと思いますよ…コナンくんが目を覚ましたら、たくさん見せてあげてください”

“先生…はい。ありがとうございました。”

“本当によかったですね”

そう言うと、一礼をして手術室へ戻って行った。

ストレッチャーに乗せられて、運ばれたコナンの後をついて行く一同。目を覚ますまで、集中治療室で様子を見る事になった。ガラス越しでコナンを見つめる蘭や哀は以前の思いつめた表情は無くなっていた。

眠ってるコナンの顔は紛れもなく、病気で苦しんでいたあの辛そうな顔ではなく、すやすや眠っている子供の顔だった。

“よかったわね、蘭…”

“もう、大丈夫だ。心配はいらねーぞ”

“ぅん…”

涙を拭い、コナンを見つめる蘭に英理と小五郎は励ますかの様に話しかける。そんな言葉を聞いて、蘭は本当にもう大丈夫なんだと改め思うのだった。

コナンくん、早く目を覚まして…そしたら、私の笑顔を見せてあげ

るね…だから、またあの声で蘭ねーちゃんって言ってね…。待ってるからね、コナンくん…ここでずっと待ってるからね…。

☆赤いランプが消えたその時…☆（後書き）

倉木麻衣のｙｏｕｒ　ｂｅｓｔ　ｆｒｉｅｎｄを聞いていたせいか、書きながら嬉しくなりました。

自分で考えたから、結果はしってるはずなのに…なぜか”あーよかった”って…本当アホになってます。

とりあえず、手術は成功。
ここからまだ、長いです。
終わりには近づきません。

だって～手術まで、５０超えちゃった私が書いたんですから。

☆皆のことば☆

それから、皆が毎日の様にガラス越しで眠り続けてるコナンを見つめ…コナンの目覚めを待っていた。

そして三日もたったある日の事…

“先生、コナンくんのそばに付いていてもいいでしょうか?”

“いや、しかし…”

蘭は先生を呼び止めて、尋ねた。

どうしても、そばにいてあげたかった。コナンのそばにいて、目を覚ました時声をかけてあげたい。それに、ガラス越しで見るだけでは蘭の気持ちも落ち着かなかった。

“お願いします。コナンくんが目を覚ました時、誰もそばにいなかったら…きっと…心細いとおもうんです…だから…それに…早く笑った顔、見せてあげたくて…”

“……わかりました。ただし、コナンくんにはまだ、触らないでください…心電図が影響してしまうと思いますので…”

集中治療室の入室が許可され、蘭は早速、白衣を着込むと…集中治療室の中へ入っていった。

“コナンくん…”

人工呼吸器を付けられ、眠り続けてるコナンの横に座ると、コナンの顔を見つめながら名前を呼ぶ蘭。

その声に反応したのか、コナンの指が少し動いた気がした…。

“コナンくん?”

蘭は驚いて、コナンの名前を呼ぶと顔を見つめる……。

すると、心電図の音が少し早まり、コナンの顔を歪ませた。

“先生、コナンくんが!”

近くにいた先生は蘭の声に反応し、コナンのそばに寄ると…名前を呼びながら、ペンライトでコナンの目を照らす。

“コナンくん、わかるかい?”

先生がコナンの名前を懸命に呼ぶと…その瞼がゆっくり開かれた。

“大丈夫かい?コナンくん…先生の事、わかるかい?”

もう一度名前を呼ぶと…コナンはゆっくり頷いた。すぐに人工呼吸器が外されて、コナンは点滴と酸素マスクが付けられた。

“よかったね、コナンくん…手術は無事成功したよ…よく、頑張ったね…”

そう先生に言われ、コナンは目を見開き、笑顔になる。蘭に会釈をし、二人のそばから離れた。

“コナンくん…?”

“あなたは…？”

蘭がコナンの顔を覗き込み、コナンの名前を呼ぶと…目をまん丸くしてまだかすれ声で呟くコナンに蘭は驚いていた。

しばらくぼんやりしていたコナンの瞳は…蘭を映し出した。

“蘭ねーちゃ…ん？…？？…似てる…？”

“コナンくん、そうよ…私よ…わかる？”

意味不明なコナンの発言にコナンの目をしっかり見て話す蘭。

ーコンコンー

すると、ガラスを叩く音がして外を見ると、先生から電話をもらって駆けつけてくれた面々がいた。

蘭はコナンの手をしっかり握り、声をかけるとガラス越しの皆をみた。

“コナンくん…皆心配して来てくれたわよ”

コナンはゆっくり皆の方を見ると…目を見開いた。

”しゅじゅつ大せいこう”

”おめでとう”

の文字が千羽鶴と一緒にあゆみ、光彦、元太の手によって掲げられていた。

”よかったわね…とりあえずは”

その隣には、コナンの方に向かず紙で顔を隠しながら片手で持ち上げてる哀の姿もあった。

それをみたコナンの顔から自然と零れる笑みが蘭や皆を安心させる。

蘭の方を向き直り、確かめるかのように聞くコナン。

“ぼく、生きてる?”

“えぇ、生きてるわよ。コナンくん、ちゃんと生きてるのよ”

“よかった…”

コナンの安心した笑顔をみると、蘭もガラス越しの皆も嬉しくなる。

助かった…これでもう大丈夫…先生の心配していたコナンの意識も戻った。

“コナンくん、傷口が塞がればまた病室に戻れるよ…それまであんまりしゃべらないようにね”

戻って来た先生の言葉に頷くと、安心したのか、また眠ってしまった。

☆皆のことば☆（後書き）

昨日は更新出来なかったので、今日頑張りました。

よかったら、また読んでください。

マイペースでやっていますが、ペースが早まったり、遅くなったり多々ありますので、ご理解ください。

次回は??
どう持って行こうと悩んでいます。

ヒント→指タッチ

☆お願い、喋らないで…〟

傷が治るまでは集中治療室で様子を見る事になったコナン。

見舞いに来る人達は決まって白衣とマスクを着用しコナンに会いに来る。

でも、コナンにとってはそれは嫌だった。マスクに顔が隠れて表情が見れない…そんな淋しさもあったから。

少しづつ、体力を戻しつつあるコナンはベッドに寝ながら手を握ったり開いたりしていた。でも、完全じゃないコナンの体力はそれをするだけでも疲れてしまう。

〝はぁっ…〟

といい、ストンと手をベッドに戻すコナンを見て看護婦さんは…

〝無理しちゃダメよ…〟

と頭を撫でるが…コナンは何度も何度もやっていた。

ー夕方ー

＞コンコン＜

ガラスを叩く音がしてみると、歩美、光彦、元太がきていた。そのうち、三人は白衣に着替えてコナンの元へやってきた。

“大丈夫？コナンくん…”

“大丈…ケホケホ…”

それを感じて慌てて看護婦さんが飛んでくる。

“まだ、声出さないでね…はい、これ”

そういって、コナンの布団の上に乗せたそれは、傷口が塞がるまでの間、コナンは喋れないため、これで会話するようにと先生が作ってくれたものだった。

“そっか～これで会話するんですね～”

そういって光彦が感心したように見るそれには、「うん」「いいえ」「？」の三つの文字が書かれたボードだった。

でも、なかなかこれを使ってくれず、すぐに喋ろうとするコナンは周りの人はため息が漏れる。

その度に慌ててボードを差し出し、指で触られるのだが、１、２回使うとまたすぐに喋ろうとしてしまうのだった。

そのせいか、薬を打つ時まだヒリヒリしてしまう。自業自得だとはわかっているのだが、病気が治ったと思うと、嬉しくてどうしても喋らずにはいられないのだ。

もし哀がいたら、説教されるとこだ。

看護婦さんが時計を見ながら、コナンの酸素マスクを外すと、スポイトを持ってやってきた。

“コナンくん、クスリの時間よ…”

それをみると、コナンは両手で口を塞いでしまった。

“お願い、コナンくん…口開けて…”

看護婦さんが困惑したようにお願いしても、首を左右に振って開けてはくれず、頑なに口を塞いでしまう。

コナンの反応を不思議そうに見る探偵団。

その様子をみた先生が不思議に思い、近づいて尋ねた。

“どうかしましたか?”

“コナンくんが口を開けてくれなくて…”

その言葉を聞いて、コナンの顔を覗き込むと、両手でしっかり口を塞いでこっちを見て訴えているコナンの顔があった。

“コナンくん…少し我慢できるかな?”

尋ねると尚首を振るコナン。”これ以上時間開けるとクスリ挿す時

にもっと痛くなるよ”となだめても嫌がり続けるコナンを見て、先生は”ゴメンね”と言うと、コナンの両手を振りほどき、その間看護婦さんが素早くコナンの口に薬を挿した。

“あぁっ”

その瞬間、喉から伝わる激しい痛みで目を瞑り、呼吸を整えながら喉を抑えた。再びコナンには酸素マスクが付けられた。

“ゴメンね～コナンくん”

と頭を撫で、先生と看護婦さんはその場を離れた。

落ち着いた頃、歩美がコナンの手を握ると…その手は震えていた。まるで、手術前に起こった発作の時みたいに。

“コナンくん……歩美達、待ってるから…学校でコナンくんの帰り待ってるから!!だから、お願い…お医者さんがいいって言うまでぜぇーたい、喋らないで!!”

“僕たち、病気になった事ないのでわからないですが……喋るのは、まだ我慢してください。じゃないと、治るものも治らないかもしれませんから…”

“コナン、約束だぞ…まだ、しゃべるなよなっ”

さっきの様子を見ていた三人はあえてコナンにキツく言い放った。絶対安静の喉に影響を及ぼす喋る事。それを破り、喋ろうとしていたコナン。その影響で喉に激痛が走った。喋らなければ早く治るのに…と三人はコナンに約束をさせた。

“じゃあね、また来るね”

そう言うと、コナンを残して帰って行った。

☆お願い、喋らないで…”（後書き）

いつも、読んでいただき、ありがとうございます。病院関係はちょっと分からなく、矛盾な点がありますが、お許しください。

次は蘭を出そうと思います。ほぼ、蘭は主役的な感じになってますけど…。

前回、ヒントになってるか微妙なとこですが、今回のヒントは…“痛くない”かな。

次回も読んでくれたらうれしいです。

☆回復に向けて☆

“毛利さん…ちょっとよろしいですか？”

翌日、蘭と小五郎がコナンのいる集中治療室に行こうとした時、先生に呼び止められた。

先生は昨日の出来事を話しつつ、二人に頼んだ。

“…ですから、毛利さん達からもコナンくんにいってもらえませんか？我々が言っても、なかなか納得してもらえないので…”

“わかりました。コナンの奴に言い聞かせますんで…わざわざすいませんなー”

先生の話が終わると、二人はすぐさま白衣とマスクを着用し、コナンのいる集中治療室へ向かった。

“コナンくん…”

“あっ、蘭ねー…ケホケホ…”

蘭は慌てて、ボードを差し出した。

“ダメじゃない、しゃべっちゃ…”

“こら、コナン！！喋るなって言われてるだろうが！ちゃんと先生の言う事きけっ”

“お父さん…！！”

コナンを怒鳴りつける小五郎を制止し、コナンの頭を撫でながら蘭はゆっくり話始めた。

“コナンくん…どうして喋ったりするの?まだダメって言われてるでしょ?先生の言う事ちゃんと聞かなきゃダメじゃない?”

“聞いてるよ…ケホケホ…”

“ほらまた…”

話をする度、コナンの口が動き言葉を発する。ボードに目もくれず…手術が終わってホッとしているコナンに対し、周りの人達は心配していた。

“聞いてねーじゃねーか!いつまでたっても、病室に戻れねーぞ!”

“それに、クスリ挿す時痛いんでしょ?先生言ってたょ…痛いのは、コナンくんが喋るからだって…喋る度に傷口が少しづつ広がるから、クスリ挿す時にしみるんじゃないかって…ね、コナンくん…一日だけでいいから…喋らないでいて欲しいの…そしたら、痛くなくなると思うよ…”

蘭の話を黙って聞いていたコナン。しょんぼりしながらも、口を開こうとして一それを止め、布団の上にあるボードを指でタッチした。

「うん」

それは、コナンが回復へ向けて頑張る事を決めた第一歩の様な気がした。心の中で喋れない淋しさを募らせる一方で、早く病室に戻りたい…そして喋りたいそんな想いを募らせていた。

コナンの指がボードをタッチするのを見て、蘭はホッとして笑顔になり”よかった”とコナンの頭を撫でていた。

それと同時にちゃんと先生の話しを聞く様に言い聞かせていた。

小五郎も安心し”ふぅ”と胸を撫で下ろし、コナンの頭を乱暴に叩くと、集中治療室を出て行った。

“あれでも、お父さん心配してるんだから…ちゃんと喉治して、病室に戻ろうね”

「うん」

その後、蘭に言い聞かせられた事もあり、薬を挿すとき激しい痛みがあったが、大人しく口を開けてくれた。

蘭に握られていた手をしっかり握り、痛みに耐えていた。喉を抑え、呼吸を整えていたコナンに蘭は声をかける。

“大丈夫？コナンくん…？でも、よく頑張れたね…”

そう、コナンに声をかけると…コナンは蘭の瞳を見つめ呼吸を整えながら笑っていた。

それは、確かにコナンが今まで抵抗した為に開いてしまった傷口を治そうと必死に頑張る姿であった。

一日ずっと喋らずに我慢していたコナンは、次の日の薬の時間…痛いのを覚悟をして、目を瞑って怯えていたとき…。

”終わったわよ”

との看護婦さんの言葉で目を開いた。

（あれっ…今、痛くなかった…）

蘭の言う通り、喋らずに我慢していたコナンはびっくりしていた。

今まで…焦って何やってたんだろう…みんなに心配かけたくなくて、

早く直そうとしていた自分が笑えてきた。

☆回復に向けて☆（後書き）

夜中の更新です。

いつも覗いてくれてる方はありがとうございます。

次はぃよいよ、病室に向かいます。
ちょっとスランプ気味になっていますが、このまま終わらすのもどうかと思い、何か考えています。

次回のヒント→写真

☆病気にならなかったら分からない暖かさ☆

“コナンくん、声だしてみて”
“ぁー”

小さいながらも、声を出すコナン。まだ、ガラガラの声だったけど、先生はコナンの頭を撫でながら、言った。

“大丈夫そうだね…痛みはどうかな?”
“少し…”
“そっか、よく頑張ったね…明日病室に戻ろうか?”

そう言う先生の言葉にコナンは嬉しくてたまらなかった。笑顔で”本当?”と聞き返すコナンに先生も笑顔で頷いた。

翌日。蘭達に連れられて、元いた病室に戻った。

“よかったね、コナンくん…”
“ありがとう、蘭ねーちゃん”

蘭に手伝ってもらい、ベッドに上がるコナンは写真に気づいた。

“これ…”
“ぁぁ、コナンくんが一次退院した時、海に行った写真ね…何だか、懐かしい”

この頃は、コナンの病気が治らないと諦めていた時だった。それを思い出した蘭は頬を染め、懐かしさが蘇る。

今思うと、不思議なもので…この写真を目にした蘭はよく泣いていた事を思い出し、微笑んでいた。

写真をみながら笑っている蘭の様子をみてコナンは声をかけた。

“どうしたの?蘭ねーちゃん??”

“あっ、なんでもないの…”

暫くすると、先生が来てコナンの喉を覗く。

“コナンくん…喋ってもいいけど、あまり大きな声出しちゃダメだからね”

“はーい”

そういうとコナンの頭を撫で、薬を蘭に渡すと病室を出て行った。

“やっと出られたか~たく~言うことちゃんと聞いてれば、もっと早く出られたんだぞ~”

用事を終わらせた小五郎が来て、コナンに優しくすると、思い来や…またしてもコナンを責めてしまう。

そんな小五郎を見ると、つい叱ってしまう蘭と小五郎はいつもの様に、喧嘩になってしまう。

そんな二人を見るコナンはつい、笑ってしまった。二人も、そんなコナンを見て笑い…元気になって行く姿に胸を撫で下ろした。

“早く、これも取れる様にしろよ…”

といい、コナンが付けている酸素マスクを叩いた。

“コーナン!!”

“元気ですかー?”

元気良く飛び込んで来た歩美、光彦、元太に小五郎は耳をほじくりながら、言った。

“たっく、まーたうるせーのが来やがった”

“いいじゃないですか~”

小五郎の言葉に歯向かう光彦。それを見て、微笑む蘭。そんな光景を目の当たりにしたコナンは生きてる事の有難さでいっぱいだった。

本当はもう、死んでしまっていた筈の命。でも、誰が治療法を提供してくれたんだろう??そんな風に思うコナンは病気の時には思わなかった疑問に不思議になった。

ありふれた毎日の中で、元気な時には気づかなかった有難さに触れ、コナンは皆の元気を貰い、いつの間にか…笑顔になって行った…。

☆病気にならなかったら分からない暖かさ☆（後書き）

少しあいてしまった更新です。

励ましの言葉、ありがとうございます。
お言葉通り…できる時に更新しますね（＾ｏ＾）

今回はネタが困ってしまいましたが、何とか…持っていきました。

今回は、コナンを取り囲む人達の暖かさを書こうと思い、書きました…。
病気になってから気付く有難さ。やっぱり、大切な人がいるから、病気に打ち勝つ事が出来た強い心。
人は一人じゃないって事ですね（＊＾＾＊）

次回のヒントは先生ですｏ（＾▽＾）ｏ

☆主治医の気持ち☆

俺はここの病院の医師を務めている…そしてある少年の主治医でもある…。

今日も沢山の患者に話しかけ、体調の具合いを見てまわっていた。

６２６号室…。

“蘭ねーちゃん…ゴホゴホ”

この少年は2カ月ほど前自宅で倒れ、運ばれてきた。一時は、助からないと諦めていた命…少年は運良く治療法が見つかり、こうして生きながらえた…。

まだ…多少咳はするものの、声を出せるほどまで回復して行ってる…。

難しい、大手術中…助かる見込みは五分五分で、心肺停止してしまったものの、なんとか持ち越し成功した彼の体力は我々が思っていたより強かった。

ただそれは、少年自身だけではなく少年の事を思う周りの人の祈りも通じたのだろう。

手術が終わって出てきた私に駆け寄る蘭さんの目は少年を思う気持ちが伝わってきた。彼女だけではなく、千羽鶴を抱き…心配している少年の友達であろう、子供達もこちらをずっと見ていた。

彼は色んなところで愛されていたのであろう、少年が入院してから今日までの間…誰かしら、お見舞いに来ている。

その多くが蘭さんではあるが、一時期この蘭さんも涙が枯れるほどないていたのではないだろうか？時々目が晴れた顔でやってくる時もしばしばあった。あの時無理して笑顔でいた蘭さんが今では、自然な笑顔に戻っている。

所で、私が今気になっているのがあの少女。少年が寝てる間を見計らって様子を見てはすぐに帰って行く…あの灰原哀という少女。照れ臭いだけなのか、時折看護婦たちが起きてる時に来たら？という問いに別に顔みれば元気かどうか分かるから…といい、帰って行く。少し不思議な感じのする子だ。それも、少女なりの心遣いだろうと、汲み取ってる…。

治療法提供に関わってくれた少女だから、我々も信頼はしているが、未だ笑った所を見た事がない…きっと、そのうち笑ってくれるだろうと思っているが…。

その少女に比べ、元気のいい子供たち三人は少年に色んな話を聞かせている。学校での出来事だったり、こんな事件があったり。

聞けばこの少年。入院する前までは、毛利さんや蘭さんに連れられて、色んな事件に首を突っ込んでいたらしい。小学生にしては珍しい会話だと思っていた、私は納得した。

しかも、探偵だと自分で名乗り、警察にも協力していたということには驚いた。かなり頭のきれる少年で危なっかしい性格の持ち主だと教えられた私は、妙に納得してしまった。

入院してからの少年しか知らないが、検査入院といえば、勝手に病院を抜け出すし、身体が動ければ退院出来るといえば、勝手にベッドからぬけだし、立つ練習をしていたり…ついこないだも、声が出る様になれば病室に戻れるといえば、無理に声を出し悪化させて治りを遅れせていた事も多々ある。

だが、この少年はそんな性格だからだろうか、弱音を見せた事がほとんど無いのだ。自分では辛い様な発作や現実にショックを受けていたはずなのに、周りの皆に心配かけない様大丈夫とか、笑ってなどと声をかけていた。

そのせいか、病気に勘付いても…我々が余命を告げても、ムリかも知れない手術を行う時も、受け入れ立ち向かってきた。

それが、無理がたたり恐怖に怯えた事もあったが…手術が終わった今、体力を戻しつつある。少年は…今日もこうして笑顔を見せ、明るく生きている。

そんな様子を見ると、諦めていたあの病気に打ち勝つ強さを教えられていたのかも知れない。

元気に走り回るようになるまでまだ、時間はかかりそうだが、この様子を見ると安心していられる。病は気からと言うとおり、少年の様に強い気持ちがあれば不可能を可能にする事もある。我々はただ、少年の悪い所を取り除く手助けをしただけで…後は少年次第なんだ。

まだ、油断は出来ないと言うのが正直な気持ちではあるが、無茶しなければいいと密かに思い、私は少年の病室を叩いた。

☆主治医の気持ち☆（後書き）

今回は担当医の先生の心情を書いてみました。優しい主治医の先生。
もし、私が入院した時はこんな風に患者の事を考えてくれる優しい
先生に当たりたいと言う希望です。

６２６号室

実はスティッチの誕生日なのです

次回のヒントは夢です

☆夢の中の似ていた蘭☆

いつものように俺は見舞いに来てくれた蘭と話をしていた。

りんごの皮を剥きながら、蘭は俺に問い掛けた。

“そういえば、コナンくん…私ずっと聞こうと思っていた事があるんだけど…”

“えっ?何?”

“手術が終わって目を覚ました時のこと、覚えてる??”

“えっ?えっとー…”

唐突な質問に俺が困惑していると、蘭が俺に顔を近づけてニヤニヤしながら言った。

“あっ、その顔は覚えてないんでしょ〜??”

“え〜と…ぅ、うん…”

不覚にも、照れながら答える俺に蘭はりんごの皮を剥きながら言った。

“まぁ、ムリもないわね…実はね、コナンくんが目を覚ました時、私の顔を見てこう言ったのよ…”あなたは?”って”蘭ねーちゃんに似てる”って……”

蘭の言葉を聞いて驚いた俺は手術中のあの映像を思い出していた。

“あっ…”

そういう俺の言葉に蘭が反応する。

“なになに??何か思い出したの?”

“蘭ねーちゃん…僕が手術してる時…呼んだ?僕の事…”

“えっ?呼んでないけど、心の中で祈ってたょ…”

蘭の言葉に嬉しくなりながらも、俺は話を続けた。

“僕、手術してる時…蘭ねーちゃんに呼ばれた気がしたんだ…気がつくと、湖に来てて…そこにいた蘭ねーちゃんに似てる人に帰りなさいって言われて……それで、目が覚めたら……”

そこまで言うと、俺はは蘭の顔をまっすぐ見た。蘭はその瞳を理解し、口を開いた。

“私がいたの?そっか…それで、あんなこと言ったのね…??その前まで、私に似てる人に会っていたから…”

“う、うん……ケホケホ…”

蘭は俺の顔を覗き込み、ホッとして微笑みながらまた、話を続けた。

“でも、よかったわ…コナンくん、記憶喪失になっちゃったのかと思ったのよ…でも、その後ちゃんと答えていたから安心したんだけど…”

りんごの皮を剥き終った蘭はりんごを小さく切ってテーブルに置き、りんごに楊枝を刺して渡してくれた。

“ありがとう、蘭ねーちゃん…ケホケホ…”

“大丈夫??”

“大丈夫だょ…まだ暫く咳は治まらないって先生言ってたから…”

蘭がまた心配しないようにいう俺に始め、不安な顔をしていたが、蘭が剥いてくれたリンゴを頬張るのを見ると、笑顔になっていった。

“でも、いい先生が担当で良かったわね…”

“えっ?”

俺が先生といった事に反応して蘭は思い出しかのように話し出す。

“あの先生に感謝しなきゃダメよ…?コナンくんの事もそうだけど…私達にまで気を配ってくれるんだから…”

“うん”

確かにそうだ…入院してからずっと人一倍気にかけてくれていた。何かあるとすぐに来てくれて…手術の前日の日だって当直していたらしくすぐに飛んで来てくれた…。

(本当にいい先生だな…)

“あっ、そういえば…哀ちゃんと会ってる?”

“えっ?灰原??来てないけど…”

“やっぱり…哀ちゃん照れ臭いのかな?コナンくんが寝た後かな?こっそり来てるみたいなのよ…様子を見てすぐに帰っちゃうらしいんだけどね…”

“へー…”

蘭の話を聞いて驚いた…あいつは俺が病室に移されてから一度も来てない。そのうちくるだろうと思っていたが、寝てる間に来てるなんて…どうせなら起こしてくれりゃいいのに…。

ーコンコンー

そんな話をしていると、ドアの音がして先生が顔を出した。

“どうだい？コナンくん…調子は？”

“うん、大丈夫だょ…ケホ…”

そういうと俺の喉の様子を覗き込むと、頭を撫でた。りんごを見るとにっこりしながら、話を続けた。

“りんごか～いいな…美味しいかい？”

“うん”

そういう俺の言葉をきき、微笑むと今度は蘭に話しかけた。

“蘭さん、すいませんが…りんごもう少し小さく切ってもらえませんか？この位でも大丈夫だと思いますが、念の為…”

“あっ、はい…わかりました”

そういうと、先生は俺と蘭に微笑むと病室を出て行った。

先生が病室を出て行くと、蘭は再び椅子に座り、りんごを小さく切りだしながら言った。

“本当、優しい先生ね……”

蘭はあの先生で余程安心しているのか、微笑みながら言った。

その夜…。

蘭の言葉が気になり、消灯時間が過ぎても寝ようとはしなかった…。
何時に来るか分からないけど、こそこそ様子だけ見に来ている灰原を待ってる事にした…。

だけど、この日…11時過ぎてもなかなか現れず、結局1時過ぎに…俺は限界になり…眠りに落ちた。

☆夢の中の似ていた蘭☆（後書き）

ここからソロソロ、
コナン調になります＼（　'Θ'　）／

今日のコナンのはキッドでしたね（＾＾）
でも最後にひょっこり出て来ましたね（＾＾）

次回のヒントは
西の名探偵

わかりやすいですね♪（ｖ＾―＾）ｖ
また次回に会いましょう（＾。＾）

☆不敵な笑みの灰原☆

“コナンくん、コナンくん……”
“うーん……”

目を擦りながらやっと起きる俺に看護婦さんは困惑した顔で聞いて来た。

“どうしたの？もう１０時すぎょ…そろそろ起きなさい…”
“うん……”

あくびしながら、やっと起き上がる俺に看護婦さんは不思議な顔して聞いて来た。

“調子悪いの？”
“そんな事ないよ…眠いだけだょ”
“何時に寝たの？”
“……”

その問いかけに…黙ってしまった俺に、体温計を差し出すと、先生を呼びに行ってしまった。

やばい…と思って、どう言い訳しようか考えていたけど、きっとあの先生じゃあ誤魔化しなんて聞かないだろう…。

暫くすると、先生を連れて戻ってきた。

“コナンくん、どうかした？”
“なんでも…ないよ？”

“昨日は寝るの遅かったのかい？何度起こしても起きなかったんだよ…何時に寝たんだい？”
“えっとー…１０時だよ？”
“本当は？”
“……１時過ぎ……アハハ…”
“アハハじゃないだろ…”

そんな俺の答えに呆れながら見る２人に暫く説教をされてしまった。

“いいかい？ちゃんと寝ないと、いつまで経っても良くならないからね？わかったかい？”
“はーい”

ピピピ……。

そうこうしてるうち、体温計が鳴り看護婦さんがチェックする。

“３７．２…うん。大丈夫ね……”

そういうと、大人しくする様に言われ、冷めてしまった朝食を俺に渡した後、病室を出て行った。

“ハァー…”

軽く凹んでいると、ドアが開いて服部が顔を出した。

“よう、何ため息してんねん？”
“いや、ちょっとな…”

俺が言葉を濁してると、服部が持ってきた花をベッドの上においた。

冷めた朝ご飯をたべてる俺に、服部はそれをみて聞いて来た。

“これ、朝ご飯か?”

“ああ…俺、さっき起きたんだ…”

“何しとんねん?昨日、はよう寝たんやろ?”

“いや、それが…”

言葉を濁しながら、俺は服部に灰原の事を話した。

“ほんまか?何しに来とるか分かるんか?”

“いや、全然…だから、来るまで待ってたんだけど…結局あいつ、来やしねーし……お陰で今朝は先生達に怒られちまうし…ケホケホ…”

長く話したせいか、お粥を食べながら咽せてしまった俺を服部が心配する。

“ケホケホ…大丈夫だ…長く喋ると咳が出るんだってさ…手術終ってまだ一週間位しか経ってないから…咳はまだ続くらし…ケホ…いぜ?”

“なら、ええけど…無理な時はちゃんと言うんやで”

そういうと、服部は黙って俺の食事を手伝ってくれた…。

手術が終わり、暫くして病院に移された俺は徐々に体力が元に戻って行き、手もだんだん動くようになり、身体も一人で起き上がれるようになって行った。

ゆっくりながらも、動けるようになった手で食事をしていた俺を見ていた服部が、軽く笑みを浮かべながら静かに呟く。

“ほんま、良かったなぁ…工藤…”
“えっ？ああ、そうだな…”
“運がいいんか、悪いんか分からんけどな…”
“あのな～”

ニッと笑い、俺をからかう服部を軽く睨むと…突然扉が開いて、灰原が入って来た。

“あら？やっと起きたのね？？”
“灰原っ…てか、さっき来てたのか？”
“ええ、一度ね…今の体温知りたくて、起こしても起きないから貴方が起きるまで待ってたのよ…で？何で今頃起きたのかしら？いくらなんでも、遅すぎるんじゃない？”

いいながら、体温計を差し出す灰原の問いに答えずらそうにしている俺を見て灰原は不敵な笑みを浮かべながら言って来た。

“どうせ、私が来てるのを聞いて…待ってたんじゃない？せっかく待ってたのに、悪いけど…昨日はちょっとやる事があってね…来れなかったのよ…残念だったわね…”

俺が驚いてるのをみると、笑いながら言って来た。そんな灰原に疑問ぶつけた。

“お前、今なにやってるんだょ…手術が終ってから、一回位しか見てねーし…俺が寝てる間に来てるみてーだし…ケホケホ…”
“気になる？？”

ピピピ…。

灰原は意味ありげな言葉を発すると、体温計の音が鳴った。

“３７．４…まぁ、いいんじゃない？さっきと変化ないでしょうね？”

嘘ついたら、恐いという灰原の目に一瞬恐怖を覚え…正直に言った。すると”そう”と一言いい、病室を出て行こうとしていた灰原に俺は声をかけた。

“なに？”

“いや、さっきの話……”

“まだ教えられないわ…それと、私は色々忙しいの…夜、体調の様子を見に来るからといって、いつまでも起きてるんじゃないわよ？いいわね？”

そういい、病室を出て行ってしまった。

灰原が出て行ったあと、俺と服部は２人して顔を見合わせる。結局何一つ聞き出せなかった。

“あのね～ちゃんが何やってるか分からんけど…いずれ話してくれるやろ？あんま気にせん方がいいで？”

“ああ…”

とはいうものの、どうしても気になってしまう。あいつは一体何やってるのか、夜じゃなきゃダメってどういう事なのだろうか？

そんな疑問が頭の中で渦巻いてその夜、軽い熱を出してしまった。

☆不敵な笑みの灰原☆（後書き）

遅くなりましたが☆
お気に入りａｎｄ評価ありがとうございます。
まだまだ続きますので、お付き合いください。

次回のヒントは医者の話

☆服部平次の心配☆（前書き）

語りては平次です

☆服部平次の心配☆

朝ご飯を食べ終えた工藤と談笑していると、看護婦さんがやって来た。

“コナンくんお昼どうする？”

“まだいらなーい”

看護婦さんの問いかけに返事する工藤。

まぁ、そらそうやな…さっき食べたばかりやから…。腹減ってないのもしゃーないな。

“そうよね…朝ご飯遅かったものね…じゃ、お腹すいたら言ってね…”

そういい終わると、看護婦さんは出て行き再び談笑し始めた。

“けど工藤、ほんまに良かったなぁ…マジでやばいと思ってわ…あのちっこいねーちゃんに感謝しーや”

“灰原に？何で？？”

あ、あかんあかん…その話はまだ聞いてへんかったんや…。

思わず口が滑ってしまった俺は、慌てて話をはぐらかす。工藤はそんな俺を見て、不思議な顔をするが、それ以上は突っこまへんかった。

ようやく昼飯を食べ始める工藤の様子が朝とは違い、怠そうにして

いた。少しづつ食べ始めた工藤の手からスプーンが離される。

“工藤？”

心配になり、声をかける俺に工藤は自分の手を握りながら言った。

“まだ俺、本調子じゃねーんだ…だから半分食べると疲れちゃうんだ…”

“そうやったんか、俺が食べさせたろーか？”

そういう俺の顔をみながら、あくびをすると言った。

“いや、いいや…服部…ちょっと寝ていいか？”

“ああ、ええで”

そういうと、俺はベッドを倒してやると…工藤は頭を抑えながら目を閉じ寝てしまった。

“夕飯ごろにまた来るさかい…”

そう声をかけてほとんど食べてない食事を持って出て行った。

まぁ…昨日は寝るの遅かったし…眠くなるのはしゃーないやろ。そう思っていたが夕方再度様子をみにいくと、工藤は軽い熱にうなされていた。

“コナンくん、ちょっと起きて薬だけ飲める？”

俺からのナースコールを聞き、様子を見に来た看護婦さんが再度薬をもってやって来た。

工藤の身体を起こし、薬を飲ませようとする看護婦さんの腕に体重を預けて、辛そうに薬を飲む工藤。

看護婦さんの手助けもあって…ようやく咳き込みながらも薬を飲むと、再びベッドに寝かされた。

暫くすると、探偵事務所のねーちゃんと和葉が見舞いにやって来た。

工藤の様子を聞かされると驚いてはいたが、医者の”心配はないです”っちゅう言葉に安心していた。

その後、おっちゃんも呼び出され俺らは全員担当医の先生に呼ばれ、会議室っちゅうところへ通された。

☆服部平次の心配☆（後書き）

関西弁良く分からないので、ほぼ標準語になっちゃいました。

ヒントになってなかった気がしますが…

次回のヒントは真相

☆治療法提供者の真相☆

“手術から１０日が経ちましたので…報告させて頂きますね…”

そういうと、先生はその場にいた全員の顔をみると話を始めた。

“術後…病室に戻ってからの状態ですが、少しづつ傷口も体力も共に回復していますので、この様子だと、あと一ヶ月程で退院できると思いますぇ…”

その言葉にその場におった全員は喜んだ…。死ぬかも知れんかった工藤の命に奇跡に繋ごうて、こうして退院できる迄に回復して行っとる。

ただ、さっきの工藤の熱が引っかかるが、退院の言葉に一安心し先生の言葉を待った。

“ただ…コナンくんの手術した場所が扁桃腺に当たりますので、風邪が引きやすくなるのが心配ですね”

“我々もその辺を気をつけて見ますので、安心して任せてください。まぁ、傷口も治り体力も回復すれば、自然と風邪は治るとおもいますよ…”

そういう先生の顔は笑っておって、そんな先生の顔を見ると皆も安心できた。

ひと呼吸を置き、先生は今迄話してなかった工藤の治療法提供者について話始めた。

ただ、俺だけはあのちっこいねーちゃんに聞いておったから驚く言葉をなかったんやけど…。

実は工藤の治療法提供者は工藤のおとんの知り合いだった。アメリカで医者をしておるその友人は実はあの時丁度工藤と同じ患者を受けもち、成功したばかりの頃に聞かされた為…すぐさまこの先生に提供したらしいんや。

それを知らせたのは何を隠そうあのちっこいねーちゃんで駄目もとで工藤のおとんの所に電話したらしいんや。

まぁ、手術するんはこの先生だった為、工藤の体調の様子などは逐一ちっこいねーちゃんが知らせていたっちゅう訳や。

“そういう訳で…灰原さんという女の子とその知り合いの工藤優作さんの友人には本当に感謝しています…しかも、丁度成功したばかりの手術でして、ただ、こちらに来て手術していただく事ができなかった為に我々もいつも以上に気を張り、手術に向かいました。成功する確率は五分五分という中でコナンくんは本当に頑張ってくれましたしね”

“そうだったんですか…後で俺を言わんといきませんな…”

そういうと、皆は席を立ち…会議室を出て行った。

まぁ、この事工藤が聞いたら驚くかもしれへんけど、あのちっこいねーちゃんには頭が上がらん様になるかもな…。

そんな事を思い、工藤の病室に行こうとしたとき、先生に呼び止められた。

“あっ、服部くん?だったかな??”
“おう、そうや…”
“言ってなかったから仕方ないんだけど…まだ暫くコナンくんの食事の時は手伝って貰えないかい?退院と言ってもまだ本調子じゃないからね…何でも一人でやっちゃうと疲れちゃうと思うんだ…”
“そう言うたら…”

食事している時の工藤の言葉を思い出した。

”まだ本調子じゃねーんだ…”

怠そうにしていたのはそのせいかもしれへんな…じゃ、熱だしたのは疲れのせいやろか?

そんな事を考えてると先生が内緒とばかり詰め寄ってきた。

“あっ、それと…夜寝るの遅かった事は蘭さん達には内緒に…”
“えっ?なんでや?”
“それ聞いたら、きっと怒られるだろ?それに何か理由があるかもしれないしね…まぁ、後で聞いておくから…”
“あっ、それやったら…”

頼みごとをする先生におれは工藤が遅く迄起きていた理由を話すと、納得していた様子で笑っておった。

☆治療法提供者の真相☆（後書き）

次回のヒント
ありがとな

☆気づかれた☆（前書き）

小五郎→蘭→灰原の順に語りてです

☆気づかれた☆

先生の話が終わった所で、皆してぞろぞろコナンが眠る病室へ戻った。

先程飲んだ解熱剤が効いてるのか、コナンはスヤスヤ眠っていた。

俺はコナンのベッドの横に座って頭を撫でている蘭の隣に座った。

時折、咳き込むコナンの顔を見ながら俺は蘭に聞いた。

“どうだ?”

“うん、だいぶ下がってるみたい…”

蘭の言葉に安心して俺は席を立つと、後は任せて病室を後にした。

お父さんが帰った後、私と和葉ちゃんと服部くんで暫く様子を見ていると、先生が入ってきて診察していた。

“うーん、まだ熱はあるけど大丈夫ですょ明日には下がるでしょう…”

“良かったぁ”

先程の話は後で話す事になりそうね…別に隠す程でもないし、コナンくんの耳にもいれてあげないとだしね…。

そう考えていると、先生が私の心でも読んだのかと思ってしまう事を言ってきた。

“先程の話ですが、コナンくんにも知らせてあげようと思いますので、明日にでも様子を見て知らせておきますね…”
“えっ?あ、はい…お願いします…”
少しビックリしながら、話す私に先生はニコニコしながら頷いた。

その夜…私は工藤くんの体温が気になり、１１時頃様子を見に来た。
工藤くんの病室に入り、顔を覗くと…案の定熱を出したのか、額には熱さまシートが貼られていた。

（やっぱり…）

私は工藤くんの額に貼られていた熱さまシートをどけ、額に手をやり様子を見る…。

（だいぶ下がったみたいね…）

そう思うと再び熱さまシートを額に戻した。脇に体温計を挟み、待っていると突然起きてしまった。

やばいと隠れようとした時にはもう、遅く…工藤くんの瞳が私を写していた。

“あら?起きたのね?”
“灰原…?”

私は平静を装って聞く…熱は下がったと言っても、まだ怠そうな彼

の目はまだトロンとしていた。

“体温…測り終わったら行くから、貴方はもう少し寝てなさい？”

“今、何時だ？？”

“１１時…”

“いつもこんな時間に来ているのか？”

私が何時に来ているか迄は知らなかった彼は、私が来ている時間を知りたがっていた。無言でいつもの作業を終えて出て行こうとしていた私に彼は言った。

“灰原…あ、ありがとな…”

熱のせいか、いつもより素直な彼に対して私はもちろん…

“別に…私は言われている事をしてるだけだから…”

素直になれる筈もなく、いつも通りに冷たく言い放ち、病室を後にした。

☆気づかれた☆（後書き）

ここ迄読んで頂きありがとうございました。

ここ迄かいて来て終わりを考えるはずが、なぜかイメージが浮かんでしまい、もう少し書く事になりそうです。

ヒントは無理やりになる時もありますが、次回に結びつけるようにしてますので、みてください。

次回のヒント…。

驚くコナン

次回もよろしくお願いします（＾－＾）／

☆灰原の行動に驚くコナン☆

翌朝…。

看護婦さんが俺のおでこに手を当てる感触で目が覚めた…。

“あっ、コナンくんおはよう…”

“おはようございます……ケホケホ…”

“平熱に下がってるから大丈夫そうだけど…まだ、頭痛い？”

看護婦さんに聞かれ、何時の間にか熱を出しずっと寝てしまっていた事に気付く…。

“少し…でも、平気だょ…”

そう答える俺頭を撫でながら…笑顔で言った。

“あんまり無理しちゃダメだょ？すぐ熱出ちゃうからね？”

“うん…”

そう言うと、ベッドを起こし朝食を持って来てくれた。

看護婦さんに手伝ってもらいながら、朝食を食べるが…まだ、ちょっと怠い為食欲はあまりなく…少ししか食べられなかった。

丁度食事が終わった頃を見計らって先生がやって来た…。

“朝食あまり食べられたなかったみたいだけど…まだ、調子悪いかい？”

“うーん、ちょっと…”

言葉を濁す俺に先生は昨日の熱の事を話し始めた。

“コナンくん、昨日ちょっと頑張っちゃったかな?”

“えっ?”

“ダメだよ、疲れた時はちゃんと言わなきゃ…昨日みたいに熱が出ちゃうからね…ゆっくりでいいんだ…焦らなくても、すこしづつ良くなって行くからね…”

“うーん…”

多分…昨日一人で食べていた事を言ってるんだ…。そう言えば、服部が来ていて俺、言えなかったんだょな…。

あの後、何時の間にか皆帰っちゃったし…服部は大阪に帰ったのかな?それに、灰原も来ていたような…。

“ご飯の時は、ちゃんとお兄さんやお姉さん達に言うんだょ…?それと、ちゃんと寝るように…いいね?”

“あっ、はーい……”

まだ…ちゃんと治ってないからか、俺の身体が少しの無理でも熱が出てしまうのは、手術の後遺症らしい…。

でも、それもだんだんと良くなっていくみたいでどうやら、心配しなくても良さそうだ。退院すれば、普通に動き回る事もできる様だし…少しの辛抱だと言われた。

“あっ、それからね…”

そう言うと先生は、昨日蘭達に話したらしく、俺の手術の治療法提供者の事を詳しく教えてくれた。

“えっ？灰原が？？”

“そうだょ…君は気づかなかったかもしれないけど、寝てる間様子を見に来ていたんだよ…”

もちろん、父さんの事も驚いたけど…まさか、あの灰原が俺の為にしてくれていたとは思いもよらなかった。

夜中にこっそり見に来ていたのはその為だったのかと、俺はようやく納得できた。あいつは素直じゃないから、こっそり来ていたのは納得出来ると先生も言っていたけど、それにしても…治療法に関わっていたなんて…。驚くあまり、ポカーンとしていた俺の顔を見た先生は笑っていた。

その後、まだ体調の優れない俺の身体を心配して、先生はベッドを倒して寝かせてくれた。

酸素マスクを外そうとした矢先の発熱が起こってしまった為、それは先送りとなってしまった。

☆灰原の行動に驚くコナン☆（後書き）

連続投稿の時はヒントしか書かない時があります☆よろしくです。

ヒント

ベッドの上

☆初めての涙☆

食事を終えたあと、額に手を乗せベッドの上に寝そべっていると…
服部がやって来た。

“よう、工藤…どうや？調子は？”
“服部…ああ、熱は下がったけど、まだ怠くて…”

そういうと、服部は俺の額に手を当てて来た。

“ほんまや、熱は下がったみたいやな…”
“お前、大阪に帰ったんじゃねーのか？”
“あんな状態されて、帰れるかいな…”

そういう服部に俺は笑っていたが、内心笑える状態じゃなかった…。

そうこうしてるうちに灰原が先ほど食べ終えた食事を持って入って来てた。

“工藤くん？調子はどう？”
“ああ…”

そんな様子を見た灰原は呆れて食事を差し出した…。

“食事なら…”

そういいかけた服部に灰原は一喝した。

“あなた、黙っててくれる…？”

灰原の言葉に服部は黙り、指で自分の頬っぺたを掻いた。

そして、食事をテーブルに置くと灰原は俺に視線を移し、言った。

“ねぇ、工藤くん？出された食事…食べなきゃいけないって事、当然分かってるわよね？”

“ああ、わかってるよ…”

“じゃあ、これのどこを食べたのかしら？”

殆ど残ってる先程食べ終えた食事を見ながら、険しい表情になって行く灰原の顔を俺は見る事が出来ず、視線を逸らした…。

服部も驚きを隠せず、食事に目をやりながら言う。

“えっ、これ食べ残しなんか？”

“ええ…そうよ”

“何やってんねん？ちゃんと食わなあかんやろ？？”

2人に責められる俺はただ”食欲が、ない”と一言言う事しか出来なかった。

そんな俺の態度が癇に障ったのか、灰原は無言でベッドを上げた。

“おい、灰原…”

“食べ終わる迄、寝かさないわよ…少なくても、半分ぐらいは食べなさい…”

そういうと灰原は、俺に無理矢理スプーンを握らせた。

仕方なく、食べ始めるが…途中で手が止まってしまう。

“なぁ、灰原…”

“だめよ…早く食べなさい…それに、分かってる？身体が怠いのは、食べないからなのよ…熱が出たのもそのせい…あなた、残さず食べたことあるの？悪いけど、私は看護婦さんみたいに甘くないから…”

“けど、無理に食べさせんでも……”

灰原の説教に服部が止めに入るが、灰原に睨まれ、それ以上は言えないでいた。

その後、少しづつ口に入れる俺に灰原は”やればできるじゃない”といわれ、途中疲れてしまった俺はその後服部に食べさせて貰ってなんとか食べ終えた。

“毎日、ちゃんと食べなさいよ…食べないと、具合なんてよくならないからね…”

食べ終えた食事を見ながら、ベッドを元の位置に戻すと、灰原は病室を後にした。

灰原が行った後、俺は横になり…手の甲で目を隠し涙を流した。

“工藤、大丈夫やって…あのね～ちゃんかて、お前の事を思って言っておるんやから…”

“ああ、わかってるよ…”

そんな俺の様子に気付いた服部は慰めてくれた。しかし、その涙を隠した俺の苦労も虚しく頬を伝って落ちていった。

“工藤……”

初めてみた俺の涙に驚きながらも心配している様子は服部の低い声で伝わってきた。

☆初めての涙☆（後書き）

ヒント
灰原

連続投稿します。

☆灰原の苦悩☆

工藤くんに食事を食べさせた後、病室を出てその足で食事を戻しに行った。

“ありがとう、無理に食べさせなくてもいんだけどね…”

“ダメよ…いつ迄たっても良くならないわよ…”

“しかしね、コナンくんのストレスになり兼ねないし…”

“そんな事でへこたれる様な彼じゃないわ…”

とはいいつつも、正直やりすぎた事は反省してる…だってあの工藤くんが、泣いていたんだから……。

でも、わかって頂戴……これは貴方の為なのよ…。

最近の工藤くんの食事を見ていると、殆どが半分以下位しか食べていなかった。

看護婦さんに任せてはいたけど、さすがに食べてない事に呆れ、今日行動に出た。

辛そうに食べていた工藤くんを見ると、胸は痛むけど…いつ迄たっても良くならないと思うと、こうしなければいられなかった…。

病室を覗き込むと、蘭さんが来ていて…何やら話し声が聞こえた。

”灰原を…責めないで…あいつ、僕の事思ってした事だから…”

その声を聞いた私は心の中で”バカ”といい、足早に病室から離れた。

あの時…私は工藤くんが助からないと思って聞いた彼女の話。

どうやら、彼女に伝える言葉を考えなくて済みそうね…。

あの時、工藤くんが医者から病気の事を宣告されたあの日…私は博士や平次くんと一緒に彼女の事をどうするかを決めた。

帰宅したその夜…私はやはりどうしても諦めたくなくて…博士に聞いた。

“新一君のお父さんの電話番号??”

“ええ…知ってるんだったら、教えてもらえないかしら?”

“そりゃあ知っておるけど…いったい…”

“確信か持てないから、まだ言えないわ…”

“まぁ…哀君の事だから考えがあるんじゃろうけど…”

博士は私の考えが気になりつつも、工藤優作さんの電話番号を教えてくれた。

その後、私は地下室に入り…早速工藤優作さんに電話番号をかけた。

工藤くんの病気の事を打ち明けつつ、工藤君を助けられる医者はいないか聞いて見た。

“もちろん、これは駄目もとで聞いているんだけど…もう日本(こっち)では

救う手立てがないのよ…知り合いでそういった患者を受け持った先生いないかしら?”

“何人か医者の知り合いはいるから聞いて見るとしよう…しかし、新一が…”

さすがにショックが大きいみたいで…工藤くんの病気を救える方法を聞いてくれると約束してくれた。

電話を切ってものの数分で…かかって来た。

つい先日、同じ患者を受け持った先生がいるという事を聞き、光がさした。ただ、その先生は忙しく…こっちに来て手術ができそうもないそうで…電話やＦＡＸ、こちらの先生が向こうへ行って会議の末、手術をする方法しかなかった。

私はそれでもいいから、やって欲しいとお願いすると…早速こちらの先生と掛け合ってくれる事になった。

駄目もとで聞いて良かったわ…。私はとりあえず、一つの望みを持ち…先生方の答えを待つ事になった。

コーヒーのお代わりをしに、地下室のドアを開けると、博士がいた。

“なにやってるのかしら?”

“いやぁーハハハハ…”

盗み聞きをしていた博士に、さっきの電話の内容を打ち明けた。私の話を聞きおわると、博士は喜んでいた。

皆、諦めかけていたものね…もしかしたら、やれるかも知れない。

そう願っていた…。

そして、翌日…その電話の返事が帰って来た…。

☆灰原の苦悩☆（後書き）

次回ヒント
優作の頼みごと

連続投稿します。

☆灰原の苦悩ー続きー☆

“昨日の話なんだがね、相当難しい手術になりそうなんだ…新一の体力が持つかわかりかねない状況で…決まった事は…日本の先生が新一の状態のデータを元にこっちの会議へ出席し決定される事となった…。ただ、そちらの先生がこっちに来てる間の新一の情報が欲しんだが…頼まれてくれるかい？”

“ええ、それは任せて頂戴…じゃあ、行けるのね？”

“ああ、手術する方向で進める…”

良かったわ…。優作さんの言葉を聞き、一安心する私。一応、助かるかもしれない手術に向かう事が出来て胸をなでおろした。

“だが、驚いたな…君から電話がくるなんて…”

“このまま何もしないで死を待つより…少しの可能性にかけたほうが懸命だと思ったから…それに……彼もきっと…それが正解だと言ってくれるはずだしね…”

“いや、君が…新一の事をそんな風に思ってくれるとは…って意味なんだが…？”

“えっ？”

私の反応を聞くと、優作さんは静かに笑って…”新一の事を宜しく”と告げ、電話を切った。

それからの私はとりあえず忙しかった。工藤君の状態を見に、毎日病室を訪れて自宅に帰りデータを送る…。

こちらの先生が帰って来てからもそれは続けていた。

時々、先生が私の事を心配していたけど…”私は病人じゃないから”といい、追い払っていた。

子供達と一緒に行く事もあったけど、だいたい一人で行く事が多かった。工藤君はそんな私の行動に不思議になってはいたけど…何一つ、私は教える事なんてしなかった。

そして、手術の前日…。工藤君の両親はさすがに手術の日には様子を見に来たいって言ってきた。

“……断るわ…”

“ど、どうして?灰原さん?”

息子の手術が気にならない親なんていない。そんな有希子さんに対して、悪いと思っていたけど私はきっぱり断わった。

“江戸川コナンと貴方達の関係についてどう説明するつもり?工藤新一とは面識があった事になってるけど…貴方達が来たら、ややこしくなるわ…悪いけど、自重してもらえないかしら?”

“でもね…”

“それに…心配ないわ…成功した事のある手術なんでしょ?だったら、あの先生を信じていれば大丈夫ょ…”

“でもね、灰原さん…”

説得する私にどうしても行きたがってる有希子さんを優作さんが割って入ってきた…。

“まぁまぁ、ここは先生と新一を信じようじゃないか?なぁ、有希子?”

“貴方…でも…”

“それとも君は、新一が助からないと思って最期に顔を見に行くとそういいたいのかな?”

電話の向こうで、聞こえる優作さんの言葉は私が言いたかった事を有希子さんに言っていた。それを聞いていた私は途轍もないショックを思い知っていた。

まるで…自分に言われたような気がして…。

なんとか、有希子さんにも納得してもらい…私は電話を切ると、手術前最後のチェックに出かけた。

☆灰原の苦悩ー続きー☆（後書き）

次回ヒント
理由

次の次は
コナンが出ます。

もう少し
哀ちゃんが続きます。
宜しくお願いします。

感想ありがとうございます。
アドバイスをもらい、少しづつ
気をつけながら、投稿していますが
直ってなかったらすいません。

次回も、気を付けて
投稿して行きたいと、思います。

☆どうしても心配なのよ…☆

病室に入ろうとした時、なにやら話し声が聞こえた。

その声に耳を澄ますと、工藤君の口から”怖い”そんな言葉が聞こえてきた。

思えば、これ迄何度にも渡って繰り返される発作や少ない命を賢明に生きようとする工藤君はいつだって一生懸命で少なくとも私達の前で弱音を吐く事なんて殆どなかった。

辛かったんでしょうね…この手術だって助かるかわからないなんて聞かされたんだもの…死の恐怖に怯えるのは当たり前よね…。

工藤君…私はそれでも信じてるから、がんばりなさい。もう、この方法しか貴方には残されていないんだから…。

病室の中が静かになったのを確認して、工藤君の具合いを見る為、病室に入った。

（工藤君…これが最後だなんて、許さないから）

心の中でそう思い、大丈夫なのを確認すると、工藤君の隣で寝ている蘭さんに気づかれない様に病室を出て行った。

その後、手術が成功し集中治療室から病室に移された後も、私は度々工藤君の容体を見に病室に行った。

工藤君が寝ているのを見計らって来ているのを知って、先生が度々声をかける。

“コナンくんが起きてる時に来ていんだょ？”

“いいのよ…私はどうせ、素直になれないし…”

工藤君が起きてる時に来たからって…どうせ私は憎まれ口を利いてしまう。私がこそこそ様子を見に来てる事、多分彼は気付いてるかもしれない。

だけど、私は夜中にならなきゃ落ちついて様子なんて見にくる事出来ないから…。

そして案の定、工藤君は私を待つ為、夜更かしをし、熱を出してしまった。

優作さんから…。

“新一の容体は安定してる様だし、情報は送らなくてもう大丈夫だ。君にはいろいろしてもらって感謝してる…後は担当医からの話でだいたいわかるから心配はいらない…”

そんな電話が入ったけど…私はそれからも続けてる…やっぱり、心配だから…今更やめるなんて出来ないから…。

そして今日も…昼間泣かせてしまった罪悪感に駆られ、工藤君の病室を訪れてる…。

☆どうしても心配なのよ…☆（後書き）

次回のヒント
抱きしめる手

連続更新します。

☆食べられない☆（前書き）

コナンが泣いちゃうのはどうしても嫌って方は読まないほうがいいと思います。

☆食べられない☆

灰原の言動に辛い気持ちを押し殺す事も出来ず、涙を流してしまった俺を服部は心配な面持ちで、そこから離れずにいた。

“悪い…もう、大丈夫だから…”

そういう俺に服部はムッとして言い返して来た。

“大丈夫な訳ないやろ?ほんまに大丈夫やったら、その手どかしてみー?”

涙をこれ以上流さないように目を手の甲で押さえていた俺を見ながら、服部は少し怒った口調で言い放った。

少しの沈黙が続いた後、蘭が和葉を連れてやって来た。

先に行くと言ったのであろう服部に蘭は礼をいい、俺の様子がおかしい事に気付いた。

“何かあったの?”

“ああ、いやぁ〜”

答えずらそうにする服部をよそに蘭と和葉は顔を見合わせたあと、和葉が俺の顔を見て、言った。

“コナンくん?どないしてん?何かあったんか?”

手で抑えてる位置が、額じゃなく目を抑えてる事に気付き泣いてる事を感じ取った2人は尚、心配してきた。

“コナンくん?顔見せて?”

“なんでもないよ”

そういって、蘭は嫌がる俺の手をほどこうとするが、俺は断固として手を離さなかった。

でも、蘭の手は強く難なく俺の目は手から開放されてしまった。

その顔を晒(さら)した俺は情けなくて、恥ずかしくて…蘭から顔を背けてしまった。

“コナンくん…”

蘭はそんな俺を抱き上げ、俺の頬っぺを覆いながら、両方の親指で俺の涙を拭った。

そんな蘭を俺はまともに見る事が出来ず、目を逸らしてしまう。

そんな俺に目線を合わせる蘭…。そんな蘭は俺の顔を見つめ、微笑みながら、俺の体を自分の胸の中に引き寄せた。

“いいのよ、我慢しなくてもいいの。辛かったら、泣いていいのよ…”

俺の頭を摩りながら、言う蘭の言葉に自分の手で目をこすり、涙を止めようとするが…尚も激しく涙は流れ出して行った。

“いったい、何があったの？”

そんな俺を見て、心配な様子で服部に事情を聞き出した。

“哀ちゃんが？”

“まぁ、坊主の事を思ってしたんやろうけど…辛そうに食っとるさかい、見てられへんかったわ…”

“そう…”

その話を聞き、蘭は灰原に何か言おうとしている事が伝わり、俺は蘭に言った。

“蘭ねーちゃん…灰原を責めないで？？”

“えっ？”

俯いて、顔をあげられない俺を見ながら蘭は少し驚いている様子だった。

“あいつ、きっとぼくの為にした事だと思うから…だから、お願い…蘭ねーちゃん…”

“コナンくん…”

肩を震わせやっと話す俺に、蘭は泣いているのか、鼻を啜りながら、俺の頭を撫でると言った…。

“分かった…コナンくんがそう言うなら、何も言わない…だから安心して？”

蘭はいつもこうして優しくしてくれる…いつだって俺の気持ちを分

かってくれて…受け止めてくれる。

俺が病気になってからも、俺の為に俺の前では泣かないように涙を堪えて…頭を撫でてくれていた。

自分が辛いのを押し殺して…なのに、ごめんな…蘭。まだ、俺…食えねーんだ…思う様に食えねーんだ…。

そんな俺たちを見ると服部が思いついた様に言って来た。

“そやったら、先生にも黙っておいた方がええやろ…そやろ？坊主…？”

さすが服部と言おうか、俺の思ってる事を察してくれていた。俺は服部の言葉に無言で頷いた。

“ほら、男の子はもう泣かないの…”

そういいながら蘭は笑うと俺の頬っぺを覆った。

“ごめんね…蘭ねーちゃん…”

俺は蘭から視線をずらして一言そう言うと、布団に潜った。

その様子に心配している様子だったけど、暫くして…三人は病室を出ていった。

その後俺は、辛い思いを涙と一緒に流していたが、何時の間にか眠ってしまった。

☆食べられない☆（後書き）

連続投稿出来てなかったです＾＾；
すいません…

次回は
笑えない笑顔です

ょろしくお願いします

☆笑えない笑顔☆

夕方…私はお父さんにはこの事を話しておこうと思い、コナンくんの事を話しつつ、服部君と和葉ちゃんと一緒に再度コナンくんの病室を訪れた。

余程、心配だったのか…初め唸っていたけど…その足はすぐに病院に駆け出していった。

病室に入ると、さっきと同じようにコナンくんは布団にうずくまっていた。

“こらコナン！いつまで泣いてんだ？”

“ちょっと、お父さん…”

それを見たお父さんは私が止めるのも聞かず、コナンくんの布団をはがして、顔を覗かせた。

“なんだ、寝てんじゃねーか？”

泣き疲れたのか、何時の間にか眠ってしまったみたいで、コナン君はその布団の中で寝息をたて、すやすや眠っていた。

コナン君が私に…私達に涙を見せたのは、これが初めてで…ここまで辛い思いをしていたんだと、そんなコナンくんをみて胸を締め付けられる思いがした。

でも、寝息をたてすやすや寝てるコナンくんを見ていると、なんだ

か大丈夫な気がして…私達は顔を見合わせ微笑んでいた。

食事が運ばれ、受け取るとそれをテーブルに置いてコナンくんを起こし始めた。

“コナンくん、ご飯だょ…”

そう言いながら身体を揺らしたけど、なかなか起きなくて…とりあえず私はコナンくんの泣き腫らした目を濡らしたハンカチで拭いてあげていた。

“うーん……”

暫くするとコナンくんが目を覚ました。どうやら目が痛いらしく、腫れた目を擦っていた。私は再度ハンカチで所々に出来ている泣き跡を拭いた。

“大丈夫?”

と言う私の言葉にコナン君は起きあがっていつもと変わらず、元気な声で…答えてくれた。

“大丈夫だょ…ごめんね…”

謝るコナンくんがとても寂しそうで私は自分の両手でコナンくんの頬っぺを覆い、コナンくんの顔を覗き込み微笑んだ。

起き上がり、食事を目の前にしたコナンくんは一瞬表情を曇らせ視線をそらしたけど、その後なんとか半分食べてくれたので安心した。

“食べれたじゃねーか??”
“うん!!”

お父さんにそう言われ、元気良く答えるコナンくんだったけど…心なしか無理して笑っているような気がしてならなかった。

コナンくんの様子が大丈夫だと知った服部君と和葉ちゃんは、とりあえず大阪に、帰っていった。

何かあった時は、すぐに連絡してくれといって…。

辛いかも知れないけど、笑顔を見せるくらいなら…心配はいらないかも知れないね…。私の心配が無駄でありますようにと心の奥で願っていた。

☆笑えない笑顔☆（後書き）

ヒントを題名にしちゃいました☆

前にも言ったとおもいますが、超長編になります。

次回は
意外な言葉

です。
次回もよろしくお願いします（＊＾＾＊）

☆突然の謝罪☆

その夜、俺はなかなか寝付けないでいた…。
昼間…不覚にも蘭たちの前で泣いてしまった事に正直恥ずかしくなった。
時計をみるともう2時を回っていた。
さすがに灰原は来なかったみたいだな…そんな事を思いながら、布団にうずくまっていたけど…どうしても眠れないでいた…。
突然、扉が開く音がして目をやると…。
“は、灰原……”
“工藤くん…まだ起きてたの?”
“いや、寝れなくて…お前こそ、何でこんな時間に?”
“悪い?様子をみにきたのよ…”
俺は灰原の存在を確認すると、起きあがった。灰原はそんな俺に近寄り体温計を差し出した。
灰原は一瞬俯いたと思うと、顔をあげ真っ直ぐ俺を見て言った…。
“昼間はごめんなさいね…貴方が食べないから、無理にでも食べさせなければって思ったんだけど…逆に、辛い思いをさせてしまったみたいで…”
“灰原…”

突然、灰原の口からでた俺への謝罪の言葉。そんな灰原に俺は驚いていた。

確かに辛い思いをしたけど、
あれは俺の為にしてくれたって言う事を俺はちゃんと分かっていたから…怒ってはいなかった…。

もしかしたら、俺が泣いた事を知ってそれで謝ってきたんじゃねーか?そんな風に思っていたら、灰原は再び口を開いた。

“あんなに辛い思いをしていたなんて思わなかったわ……泣かしてしまって本当にごめんなさい…悪いと思ってるわ…”

病室の一室に流れる沈黙。灰原に謝罪され…困惑している俺に対し、灰原は黙って俺を見ていた。

“何言ってだょ?お前は俺の為にやってくれたんじゃねーか?謝る事なんてねーだろ?”

沈黙を破り、漸く話し出す俺に今度は灰原が驚いていた。

“今は大変だけど、そのうち食べられる様になるだろ?”
“工藤くん…”
“悪いな…気ぃ使わせちゃって…”

無理して言ってるように聞こえたのか、灰原は俺の顔をみるなり言った…。

“じゃあ、寝れないのはどうして?大丈夫なら寝れるはずじゃない

！どうして無理するのよっどうして人の事まで心配するのよ…”

そういうと、灰原は俯いてしまった。俺は灰原の肩に手を置くと言った…。

“灰原……確かに今はつれーよ…でも、これ以上心配させるわけにもいかねーんだ…これまでずっと心配させてきたんだからさ…特におめーにな…”

顔をあげる灰原は涙目でいっぱいだった。

“聞いたよ…治療法の事…オメー陰でずっと頑張ってくれたんだってな?俺の為に父さんに掛け合ってくれて…本当にありがとな…”

“別に…貴方が死ぬのはシャクだから…彼女に会えないまま死なせるのは彼女に悪いと思ったから…”

いつもの灰原の素直じゃない言葉を聞くと安心できた。陰でずっと支えてきてくれた灰原に俺はやっとお礼が言えてホッとしていた。

“けど灰原…俺さ、まだ無理なんだょ…まだ、食えねーんだ…思ったより食欲がねーし…”

そう言った所で、体温計がなりだした。

灰原は体温計をみるなり不敵な笑みを浮かべ言った…。

“食欲が無いのは当たり前ね…こんなに熱があるもの…悪化しないためにも、早くねなさい…”

そう言うと、俺の身体をベッドに寝かせ、布団をかけると”またく

る”と言い残して、行ってしまった。

あいつも、悩んでいたんだろう?俺の体調を心配して…でも素直に慣れなくて…しかも昼間の事を悔やんで…バカだな…俺がそんな事で落ち込むわけねーのに…。

俺はそんな事を考えつつ、布団に潜るが、何故か眠る事が出来なかった。

☆突然の謝罪☆（後書き）

今日も寒い夜中に更新します（＿▽＿）
本当に寒くなって来たので風邪には気をつけてください。

次回のヒント
ナースコール

毎回恒例のヒント
ちゃんとヒントになってる事を祈りつつ、
次回もよろしくお願いします。

☆工藤くん、もしかして☆

灰原が病室を出て行って暫くして俺は異常な寒気に襲われて、ナースコールを押した。

“どうしたの？”

ナースコールから聞こえる、看護婦さんの声に応答する事も出来ず、俺は寒さで布団にうずくまっていた。

暫くして、まだ帰っていなかったのか、看護婦さんと一緒に灰原も病室に入ってきた。

“コナンくん？どうしたの？”

そういい、俺の顔に手を当てる看護婦さん…俺は”寒い”と一言言うだけで精一杯だった。

“やだ…すごい熱じゃない……”

体温計で計ると”３９．２”もあり看護婦さんは慌てて処置を始めた。

“さっき、そこまでなかったわよ…”

驚いている灰原に、看護婦さんは目をまん丸にして俺を抱き上げ、薬を飲ませ…注射を打った。

“さっき、何度だったの？”
“３７．８よ…”
灰原の答えに不思議に思いながら、ポツリと言った…。
“ありがとう…急に上がったのかしらね…後で先生に聞いてみるわね…”
“それと…江戸川くん、寝れなかったらしいのよ……さっきまで起きてたのよ…”
“え？わかったわ…それも聞いてみるわね…”
そういい、看護婦さんは俺の額に冷却シートを貼り頭を撫でてくれた。
“もう、大丈夫よ…コナン君…おやすみ……”
そう言うと、俺と灰原を病室に残して出て行った。
“工藤くん…”
そういいながら、俺のそばに近寄ってくる灰原に俺は片目を開けて見た。
“灰原…まだいたのか？……悪いな…また迷惑かけちまっ……”
“工藤くん…これ、後遺症かも知れないわね…詳しくは先生から聞かされると思うから、早く熱を下げなさい…”
俺の気遣いに耳を貸そうとしない灰原は俺の熱の出方に何か気づいた様子だった。

もう4時を回っていて…いい加減眠いと言うと、今度こそ帰って行った。

そのうち俺は注射のせいか、眠りに落ちていった。

☆工藤くん、もしかして☆（後書き）

こんばんわ
今日は早めに寝てしまうので、
早めの更新になります。

次回のヒント
ビートル

お楽しみに☆

☆優作へ電話☆

ナースステーションで話をしていた私は、工藤くんからのナースコールで看護婦さんと一緒に急いで工藤くんの病室に駆け込んだ。

高熱にうなされてる工藤君を目のあたりにした私は、ある確証を得て、落ち着いた工藤君を残して病室を後にした。

病院の駐車場で待っていた博士のビートルに乗り帰路に着いた。

“どうじゃった?新一の様子は?”

“また、熱をだしたわ…この分じゃ、予定通りの退院出来ないかも知れないわね…”

“後遺症の咳は止まったっていっとったのにのー今度は熱とはのー”

工藤君の容体を話しながら、私達は阿笠邸に到着した。

翌日…私は工藤優作さん宛に電話をいれた。

“熱?”

“ええ、もしかしたら…それも後遺症のひとつになるんじゃないかと思って…夕べ、本の一時間あまりで39度まで上がってしまったの…先生から聞くと思うけど、私からも知らせておくわ…”

“わかった…すまないな…いろいろ手を煩わせて…”

“いいのよ、私が頼んだ事だし…”

“いろいろあるかも知れないが、新一の事、よろしく頼む……”

そう言うと、優作さんは電話を切った。

本当、似たもの親子ね…私の事なんて気にしなくていいのに…。

先生から何を聞かされるか分からないけど、だんだん傷口も治っているのは確かだけど…風邪、油断すると危ないわね…。

昨日の様子から見て、37度を超えると一気に上がってしまうらしいから…。

昨日みたいに…自分からナースコールを押してくれればいいけど…誰かがいたら無理をしてしまうのは彼の特有だしね…。

まだまだ、様子を見に行くのを止めるわけには行かないわね…。

☆優作へ電話☆（後書き）

寝る前にもう一話
更新します。

次回ヒント
食事

お楽しみに☆

☆蘭の心配☆

昨日の事が心配で朝、学校へ行く前にコナンくんの様子を見にいったら、夕べ熱を出したと聞かされた。

やっぱり、昨日の事まだ吹っ切れてなかったのかも知れない…やっぱり、無理して笑ってたのね…。

夕べと比べると、３８度まで下がってはいたけど…まだ少し高かった。

朝はとても食べられそうにないから、点滴で栄養取る様にした。

“じゃあ、コナンくん…また夕方くるね”

寝てるコナンくんに声を掛けて私は一先ず学校へ行く事にした。

夕方、あゆみちゃん達と会って再びコナン君の病院に行く事にした。

“コナンくーん”

元気良く病室に入る皆だったけど、夕べの熱がまだ下がってないらしく、コナンくんはまだねていた。

“まだ、寝てるの？”

事情がわからず、寝てるとしか思ってない子供達に私はコナンくんの風邪を教えてあげた。

心配していたけど”熱は下がってる”と教えると、安心していた。

コナンくんのおでこに手を当てると、熱はだいぶ下がってる様子だった。

“んーー”

私の体温を感じて漸く目を覚ましたコナンくん。

“大丈夫?”

と聞くと、無理して笑顔を作り無言で頷いていた。その後、夕食が運ばれてきて食べ始めた…途中、私が手伝いながら何とか食べるけど、コナンくんの顔が曇りはじめた。

“蘭ねーちゃん…ごめんね、もう食べられないんだ…”

“じゃあ、あと一口で終わりにしよ?”

そう言う私の言葉に頷いて、一口食べて終わりにした。

その後、薬を飲んで…暫く子供達と話していたけど、薬が効き始めたのかそのまま寝てしまった。

熱が出て心配したけど、子供達と話すコナンくんを見て、少し安心した。

☆蘭の心配☆（後書き）

次回のヒント
蘭の優しさ

お楽しみに

☆食べれないけど、大丈夫だから☆

昨日蘭や元太達がきていたけど、熱のせいで何時の間にか寝てしまっていつ帰ったのか、わからなかった。

目が覚めると朝の6時になっていた。少し楽になった身体を起こし、薬用においてあった水を飲んでいた。

“コナンくん、おはよう…大丈夫かい？”

そういうと、先生は俺のおデコに手を当てて様子をみた。熱が下がってる事が分かると、笑って”よかったな”といい、朝食まで寝てる様に促された…。

今日は土曜日だと言う事もあって、朝から蘭が元太達を連れてやってきた。

“コナンくん…？”

恐る恐る扉を開けるあゆみにつられ、元太と光彦が顔を覗かせる…朝食を食べてる俺を見つけると、元気良く病室に入ってきた。

“コナンくんっ！大丈夫？？”

“大丈夫だょ…熱は下がったし…”

“昨日、来たんですけど…調子悪そうだったので、とりあえず帰ったんですょ…”

“でも、よかったなぁ…元気になってよー”

そういう、元太達の声に笑顔がこぼれる。熱は下がったけど、食欲がないのは相変わらずで、なかなか食べられない俺を蘭が心配そうに見つめる…。

“ごめんね、食欲ないけど大丈夫だから…”

“うん……”

俺の言葉に頷く蘭だったけど、心配する顔は変わらなかった。

“コナンくん、食欲ないの?”

“えっ?あ、うん…まだちょっとな…”

俺と蘭の様子に気づいた歩美が聞いて来た。

“でも…食べないと、元気になりませんよ?”

“大丈夫だって…そのうち食べれる様になるって言うし…”

“そのうちっていつだよ?”

光彦の心配を軽くながした俺の言葉に元太が容赦なく突っ込んでくる…何も言えないでいる俺に、こいつらの目が鋭く突き刺さった。

“歩美が食べさせてあげようか?”

“え?いいよ…”

“じゃあ、ちゃんと食べてくれますか?”

“だから…”

“食えねーって言うのかよ?”

こいつらはここまで来ると、絶対に後には引かない性格だ…だけど、俺は食べれない事は事実で…それはしょうがない事だと言うと、余

計にややこしくなった。

“みんな、コナンくん頑張ってるから…そんなに攻めちゃダメよ…”

そんな俺たちの様子に見てられなくなった蘭のフォローがはいる…。

“それに、ここんとこ色々あって疲れちゃって熱が下がったばかりだし、今日は大目に見てあげて？明日からまた頑張るわよね？コナンくん？”

“ぅん…”

やっぱり、皆俺が食べない事を心配している…。俺だって食べれるものなら食べたい…そう思ってるけど…今は食べることが難しいんだ…。

ーコンコンー

“コナンくん、調子はどうかな？”

先生はドアをノックし入ってくるなり、俺の食事を覗いた。

“今日はもう少し食べれるかな？”

“えっ？えっとー……”

困惑してる俺を思い、蘭がフォローしてくれた。

“今日はこの辺で、明日また頑張ろうって話してたとこなんです…”

俯いていた俺は蘭の言葉に顔をあげると、俺の顔を見て微笑んでいた。

“そうですか、でもコナンくん、もう少し食べれないかな？”

“……”

“最近、頻繁に熱が出てるだろ？後遺症で熱が出ると言っても、ここ迄はならないはずなんだ…食事の量が極端に少ないし…もう少し…頑張って食べよう？”

先生の説得に俺は俯いたまま、食べ残ったままの食事を見つめる…。

“でも、食べられないんだ…”

“体力付けないと、また熱がでちゃうよ？それに、咳止まっただろう？それは治ってるっていう証拠なんだ…後はしっかり食べて免疫付けなきゃ…”

俺は先生の言葉に静かに頷いた。その後…先生に食べさせてもらいながら、三口程食べるとむせた。

“大丈夫かい？”

そういいながら、俺の背中をさすってくれたが、俺は両手をついてテーブルに顔をうずめ、ゴホゴホと咳き込んだ。

そんな俺を見たその日、先生はそれ以上俺に食事を勧める事はなかった。

☆食べれないけど、大丈夫だから☆（後書き）

今回も読んでくれて
ありがとうございます。

次回ヒント
食べなさい

です☆

お楽しみに☆

私はその日もいつも通り、夜中…工藤君の様子を見にきていた。

病室に入ると、大人しく寝てる工藤君の姿があった。

額に手を当て、体温計を脇に挟んだ。

（大丈夫そうね……）

暫く様子を見ていると、突然工藤君の手が動き、目を手の甲で押さえ始めた。

その時…何かあったと感じた私はすかさず工藤君に話しかけた…。

“工藤君??”

“あっ?灰原…??”

私の存在に気づくと、手の平で顔を覆った。

“何があったの?”

“なんでもねーよ…”

心配して訪ねる私にさも、何もなかったかの様に言い放つ。

“なら、好きにすれば?貴方の中で抱え込んでる問題を吐き出さなければ、また熱が出るわよ?”

“……”

“大方、食事が原因でしょうけど…何か言われたのかしら?”

私の言葉に驚いた様子の工藤君…手で塞いでた目を開放すると、私の方に視線を向けた…。そんな彼を見て私は話を続けた。

“何驚いているのかしら?私が分からないとでも思ったの?言っとくけど、その問題を解決しない限りは良くならないわよ?”

覚悟を決めたのか、工藤君は口を開いた。

“なぁ、灰原…俺、分からねーんだ…どうしたら食える様になるんだ?蘭や皆に心配させねー様にって思っても、どうにも出来ねーし…すぐ熱は上がっちまうし…夕方、先生が来て食事をした時、俺…震えちまったんだ…まるで食事を拒むかの様に……焦れば焦る程…分からなくなる…どうすればいいか…分からなくなるんだ…”

工藤君は自分の思いを全て吐き出した様だった。自分の体調よりも、人の事を心配している様なそんな感じがした。皆のためにも良くならなきゃと思ってる様だった。

“本当…バカなんだから……あのね、今は人の事心配しなくてもいいのよ…自分のことだけ考えてなさい…貴方に必要なのは、食べる事なのよ…食べて、体力つければ…熱だってここ迄頻繁にでないだろうしね…まぁ、これくらいの事、先生に言われてるだろうから、私がいちいち言わなくてもわかってると思うけど?”

淡々と話続ける私に工藤君は黙って私の話を聞いていた。

“ああ…同じ様な事…先生に言われたよ…食べろって…勿論、蘭や元太達にもな…”

“そう、なら教えてあげるわ…貴方に欠けているもの…これ、なんだか分かる？”

“……”

“食意識よ…貴方、ずっと怯えてるわよね？食べるって事に…だから、身体が受け付けなくなるのよ…熱や身体の症状なら薬や注射でなんとかできるけど、食べようとする意志はね、どうにも出来ないのよ…これだけは貴方の意志にかかってるんだから…心配させたくないんだったら、少しでも多く食べなさい…じゃないと、いつ迄もよくならないわよ…”

そういい終わる頃に、体温計がなった。

“わかったよ…”

工藤君から体温計を回収し、平熱を確認していると一言そういわれた。

笑みを返すと…布団を掛け直し、部屋を出て行こうとして…一度立ち止まる…。

“大丈夫よ…工藤君…貴方は一人なんかじゃないわ…私と同じ様にね…”

工藤君は驚いていたけど、私はそのまま病室を後にした。

いつか言われたその言葉…私は言われて嬉しかった。だから、貴方にお返しをしてあげるわ…一人じゃないってどれだけ励みになるか…私は思い知らされたもの…。

後は、貴方次第よ工藤君……大丈夫、貴方は弱い人間じゃないって

私は分かってるから…。

☆一人じゃないから☆（後書き）

次回ヒント
マスク

お楽しみに☆

このお話もだんだん終わりに近づいています。もうしばらくおつきあい下さい（＾。＾）

☆体力付けなきゃ☆

灰原の言葉を思い出し、次の日から俺は無理してでも食べようと頑張った。

そんな俺を見て蘭や看護婦さんが心配そうに見るが、俺はいつもより多めに口に運んだ。

まだ、治り切っていない俺の身体は食事を拒んでいる様だったけど、俺は負けずと口に運んだ。

そんな俺を見て、先生や蘭達に心配され”無理しないでいいよ”といわれたけど、俺はもう頑張るしかないと思った。

“はぁ、はぁ、はぁ…”

“コナンくん……”

食事の後、無理に食べ様とする疲労感で疲れきってしまう。そんな俺を見て蘭は心配になっていた。

いくら、大丈夫だと俺が言っても、荒い息を吐く俺を見るとやっぱり心配になってしまうのだろう。

“コナン君、無理しなくていいのよ…無理に全部食べなくても…”

“ダメだよ…蘭ねーちゃん…食べないと体力付かないし…また熱が出ちゃうもん”

そういう、俺に蘭は微笑むが心配な眼差しは変わらなかった。

だけど、頑張った甲斐もあって俺は少しづつだけど、体力も戻しつつあり、食べる量を増やされ…熱も以前より頻繁にでなくなった。

そして、ついに…俺の口を塞いでいた酸素マスクが外された。

“苦しくない？”

先生に聞かれて俺は笑顔で首を縦に降る。酸素マスクを外され、初めは違和感を感じていたけど、スッキリとした開放感に見舞われた。

入院してから殆ど付けっぱなしになっていた酸素マスク。少し…名残惜しい気持ちになったが…もう二度とつけたくない思いもしていた。

“でも、コナン君…高熱が出た時はちゃんとつけるからね……”

そう言われ、表情を変えさっきまでの名残惜しい気持ちを返して欲しいそう思った。

☆体力付けなきゃ☆（後書き）

次回のヒント
蝶ネクタイ型変声機

お詫びします。
どこかのネタで上がってました。
見た方はわかると思うのですが、
あいうえおをぁぃぅぇぉにわざと変換して
可愛く打つ技を良く思ってない人が多いいと
いう物を見ました。

実は私もその類いで、わざとでわはいのですが、無意識の内にあを
ぁなどと変換し
小説にも投稿してしまったと思います。
嫌な思いをされた方、申し訳ありません。
以後、気をつけます。

ただし、ストックをかなり書いており、
確認は致しますが、万が一投稿してしまった
ら、教えていただければ、すぐに直します。

では、これから最後まで
書き続けて行くので、
よろしくお願いします。

☆いったい、誰が？何のために？☆

今日は丁度土曜日という事もあって、大阪から服部がお見舞いに来てくれていた。

注射の跡が残る俺の腕を見ながら服部は心配しながら、訪ねてくる。

“痛ないんか？工藤？”

“平気だよ…退院して暫くすれば消えるだろ？”

“お前、ようここまで耐えとるな…”

俺を見る服部の顔がなんだか悲しげに見えた。そんな事を話してると、突然灰原が入って来て巾着袋を渡された。

“なんだ？これ？”

“お見舞い品…貴方、頑張ったじゃない？だから酸素マスク取れたのよ…だから、そろそろいいと思ってね…渡しておくわ…”

中を見ると、蝶ネクタイ型変声機と携帯電話が入っていた。

“かけてあげなさい……心配させたんだから…まぁ、貴方が最後にかけたのは病気が発覚する前だから、大体三ヶ月って所ね…彼女、怒ってるんじゃない？”

と、不敵な笑みを浮かべて俺を見る灰原の顔が何かを企んでるような感じがした。

“やべーよ…これ？”

“だったら、早く謝ってくれれば？”

それだけ言うと、灰原は病室を出ていった。

“服部…”

“なんや?”

“お前、代わりにかけて来てくれねーか?”

と巾着を渡す俺に、慌てながら押し返し言って来た。

“無理に決まっとるやろ、第一言葉遣いでバレるやろ?”

“だよな…とりあえず、屋上に連れてってくれ…あそこなら殆どひといねーから…”

そう頼む俺を車椅子に乗せ、屋上に連れていってくれた。

屋上に着き、誰もいない場所に移動して携帯電話をＯＮにした。

そのまま、固まって何を話そうか考えていた俺に服部が早くかけろと促した。

覚悟を決めて蘭にかけるコールを待つ間、俺の心臓は早鐘を鳴らす勢いで高鳴っていた。

３ヶ月も音沙汰なしの状態じゃあ、蘭が怒るのも無理はないよな…そう覚悟して、蘭が出るのを待っていた。

“はい、もしもし?”

“よう、蘭久しぶりぃ~”

いつもの様に応える俺。蘭の怒りを覚悟していた俺は次の蘭の言葉

で驚かされた。

“何が久しぶりよ～こないだ話したばっかりじゃない！！コナン君の事聞きたいんでしょ？？”

俺と服部は顔を見合わせる…。そして蘭に尋ねてみた。

“ら、蘭…こないだっていつ？”

“あら、なあに？私と電話した事忘れちゃったの？3日前よ…”

“あ、あー3日前ね…”

俺は、とりあえず…思い出したかのように話しを合わした。その後の蘭の話で誰かが工藤新一の名前を使って時々コナンの事を心配して電話して来ていた事を知った…。

“それにしても、新一がコナンくんの事あんなに心配してたなんてびっくりしたわ…本当、仲良かったのね…でも、もう大丈夫よ…お医者さんも順調だって言ってたから…”

“そうか…”

“じゃ、また後でね…私これからコナンくんのお見舞いいかなきゃだから…”

“あ？ああ…”

電源を切り病室に帰る途中…2人の中で疑問が残る……一体、誰が？

そう思っていた先には…蘭がいた。

“コナンくん……心配するじゃない病室にいなきゃダメでしょ…”

“大丈夫やって…順調なんやろ？”

“コナンくんの場合は、まだダメなのよ…無茶するから…”

そう言われながら、病室に戻るとおっちゃんも来ていた。服部の姿を確認すると、おっちゃんはニヤつきながら言った。

“犯人はお前だったか～大阪の坊主…”

“犯人てなんやねん？”

“コナンくんがいないって、ちょっと騒ぎになったのよ…”

蘭に言われて、不思議な顔した服部は聞き返した…。

“なんでや？”

“前にも抜け出した事あるから～ねー、コナンくん？”

俺は慌てて手でバツを作る。服部はニヤニヤしながら、俺の方を見るなり”ほー”と笑っていた。

ベッドに戻された俺は、漸く昼食を食べ始めた…残さず食べてる俺を見るなりその場にいた皆は安心していた。

ついこないだまで食事を拒んでいたのが嘘のように食べられてる。

それが何よりも嬉しかった。

☆いったい、誰が？何のために？☆（後書き）

今日も寒い中更新です☆

次回のヒントは
悪戯な笑顔

よろしくです☆

☆教えてくれよ☆

夕方、蘭達は用があるといって病室から出ていき、俺と服部2人になった隙に灰原はやってきた。

“さっきの巾着…返してくれない??”

俺は灰原に巾着を返すと尋ねた。

“なぁ、灰原…誰なんだ??俺の代わりに蘭にかけてる奴って…まさか、お前…”

“ばかね、私の訳ないじゃない?”

“じゃあ…”

“あら、一人いるじゃない??とーっても仲良しさんが?”

悪戯な笑顔を作り俺に向けられたその顔が何かを隠していると確信して聞いた。

“頼むから、灰原っっ教えてくれよっっ”

“何?その態度?教えて下さいって言うんじゃない??こういう場合…”

“お、教えてください……”

“いいわよ…退院したら教えてあげる…”

そういうと、灰原は病室を去ってしまった。

おれは悔しくて堪らず…。

“くぅーーー”

と嘆いていた。

“まぁ、あのねーちゃんも退院したら教えてくれるって言うてたし…もう暫く我慢しいや…”

“けどな……”

“また、退院したら見に来たるさかい…あんま無茶して熱出すんやないで?”

“えっ?お前帰っちゃうのか?”

“心配しーなや…もうすぐねーちゃんも帰ってくるさかいな…”

そういうと立ち上がり、俺の頭をぽんぽんしながら、ニヤついた。

“もう少しで退院や…しっかり頑張るんやで…ええな!”

“ああ…”

そういうと、服部は病室を出ていった。

（もうすぐ退院かぁーー）

俺は長い入院生活にようやく終止符が打たれる事に、安堵していた。

それと同時にここでいろんな辛い事があった事を思い出し、少し笑みが零れた。

辛かったけど…漸くここまでこれたなぁ…死ぬと諦めてたのに…本当に夢見たいだぜ…。

俺は手を頭の後ろで組み、感慨にふけったまま眠りに落ちた。

☆教えてくれよ☆（後書き）

次回のヒント
サイレンです（＊＾＾＊）

いつも読んでいただき
ありがとうございます。

もうすぐ退院します。
退院してからも、もう少し
続きます。

また次回もよろしくです☆

☆先生ありがとう☆

退院を3日後に控えた深夜、俺はトイレに行った帰り…先生に会った。

“コナンくん…トイレかい??”

“先生…う、うん……”

先生はしゃがむと俺の目を見て微笑むと言った。

“ちゃんと体力も戻ってこうやって歩けるようになってよかったじゃないか…”

“うん…”

“病室に戻ろうか?”

そういうと、俺の手を引き病室に連れて行ってくれた。

病室に戻り、ベッドに座る俺を見て先生が言って来た。

“実は君の様子を見に来たんだ…熱はないみたいだけど、具合いはどうだい?”

“平気だよ?”

“じゃあ…気持ちの具合いはどうかな?”

“……”

静まり返る病室の中で、先生は俺の返事を待っているようだった。

“退院が3日後に控えてるんだから、もっと笑えてていいはずなんだけどな…”

そういいながら、先生はおれのほっぺをちょこんと突っついた…。

“先生…僕、本当に退院して良いの？”

“どうしてだい？”

“だって、未だに熱でちゃうんだよ…？蘭ねーちゃんだって心配してるし…”

俺の発熱が後遺症だと伝えられた…でも、時々熱が出ることに気がかりで…不安は募る一方だった。

“大丈夫だよ、コナンくん…言っただろう？急な発熱はすぐに治まらないって…だから、君が心配することなんて何もない…成長するに連れて急な発熱もなくなるから、…それまでの辛抱だよ…”

“退院して４０度近い熱が出たら、病院に戻ってきてもらうけど、すぐ退院出来るから、気にしなくて大丈夫だよ…”

“また、救急車に乗るんだよね…”

“昼間なら乗らなくていいさ…でも、夜中の緊急な場合は乗ってもらうよ…そんなに嫌かい？”

“怖いんだ…あのサイレン聞くと…”

いつも、先生は俺の話をこうやって聞いてくれる…不安で堪らない時、いつも…。

俺を見る先生の目がとても優しくて…そんな目を見ると余計に弱音をはいてしまう。

“だったら、先生も一緒に乗ってあげようか？”

突然の先生の提案に驚いてしまう。

“いいよ…”

“だったら、病院まで乗ってこられるかな?”

“う、うん…”

“それなら大丈夫だ……”

先生は俺の頭を撫でながら、立ち上がった。

先生は知ってる…どういえば、俺が納得するかどうか…この数ヶ月で読まれてしまった俺の気持ち…。

でも、この先生だったから…俺はいろんな意味で救われたのかもしれない…。

病室を出ようとする先生に俺は言った…。

“先生…あ、ありがとう”

“良いんだよ…君が元気になってくれればね…”

そう微笑み、病室を出ていった。

あと3日……あと3日で俺の入院生活が終る……ずっと心配かけてきた蘭達にも安心させてやれるかもしれない…。

そう思いながら、この夜3日後の退院を心待ちにしていたのだった。

☆先生ありがとう☆（後書き）

いつも読んでいただき
&
お気に入り登録など、ありがとうございます。

次回予告
蘭の手…です。

次回もよろしくお願いします（＾＾）

☆ギリギリセーフ☆

退院を翌日に控えた俺は再び熱を出した。

体温計を覗く灰原は呆れながら、俺に言った…。

“まったくもー、貴方は…なにかあるとすぐ熱を出すんだから…”

“灰原…実は……”

“いいわよ…言わなくて聞いてるから…”

冷却シートを俺の額に張りながら、言ってきた。

“救急車のサイレンが怖い?貴方ねー殺人現場で一体何回救急車って叫んだのよ?”

“それとこれとは…”

“同じでしょう?まぁ、いいわ…明日退院なんだから、薬飲んで熱を下げなさい…”

そういうと、俺の口の中に薬を放り込み、水を飲ませてくれた。

“コナンくん?”

熱を出し、心配して見にきた先生に俺は謝った。

“謝らなくて大丈夫だから…熱が下がってれば、退院だからね…”

“延びるの?”

“下がらなかったら、心配で退院はさせられないなー”

いいながら、先生は俺のあたまを撫でる…注射を取り出しながら、先生は微笑んだ…。

“大丈夫だから、安心して寝てていいよー。きっと下がるからね…痛いけど、我慢してね…”

この注射も何度打たれたか…注射の傷でいっぱいのじぶんの腕を見ながら、明日の退院を不安に駆られた。

自分の腕を見つめていた俺の目線が注射に向いていると勘違いした先生が優しく声をかけてくれる。

“注射ももう少しだけの辛抱だからね…コナンくん…”

そういう先生の顔を見ながら、視界がぼやけ…目が覚めた時は蘭がいた……。

“コナンくん……”

“蘭…ねー…ちゃん……”

“よかった…大丈夫?”

心配そうに見つめる蘭…俺が起き上がると蘭は自分の額を俺の額に当ててきた…。

“下がったみたいね…”

そういい、俺の頬っぺをモミモミした。

“どうかな?”

そういいながら、診察する先生の顔がみるみる内に笑顔になっていった。

“大丈夫そうだね…おめでとう、コナンくん…退院だよ…”

そういわれ、笑顔になっていく俺を見て蘭やおっちゃんも笑っていた。

腕に付けられた点滴を外し、一本注射をすると、蘭やおっちゃんに挨拶して出ていった。

“じゃ、着替えろっ帰るぞ……”

“うん!!”

帰る…ついその言葉が嬉しくなって元気に答えた。

着替えが済み、このベッドで生活してきた2カ月半…その事を思い出すと、笑みが零れる…机に置いてある写真を見つめる俺に蘭は微笑みながら言った…。

“じゃあ、写真持って行こうコナンくん…?”

“うん!”

手を差し伸べる蘭の手を握り、俺は歩き出した…。またこうやって蘭の手を握って歩く…普通の事なのに、それが何よりも嬉しかった。

病室を振り返り笑みを浮かべる俺の顔を見ながら、蘭もまた微笑んでいた。

もう…戻る事ないこの病室に別れを告げて…。

☆ギリギリセーフ☆（後書き）

こんばんわ☆
今日は雨の中更新です（笑）

次回予告は
サイドミラー

これからは退院後の
ことを書いて行きます。

次回もよろしくお願いしまーす。

☆退院…そしてただいま☆（前書き）

少しだけ
コナン泣きます

☆退院…そしてただいま☆

“コナンくん…退院おめでとう”

外に出ると、先生や看護婦さんに花束を渡された。

“あ、ありがとう”

照れながら、頭を掻く俺を見ながら、おっちゃんの声が響く。

“何、いっちょまえに照れてんだー?”

“コナンくん、本当におめでとう…だけど、絶対に無理しちゃダメだよ…体調が少しでも悪かったら、毛利さんや蘭さんに言うんだよ?”

“うん…”

“それから…”

俺の事が心配なのか、話を続けようとしている先生に俺は言った…。

“先生、大丈夫だよ…ぼく、無理しないから…”

“そうか…身体、大事にね…せっかく生き延びた命なんだから…”

“うん、ありがと先生!!”

そういうと、蘭やおっちゃんに連れられ、おっちゃんの運転するレンタカーに乗り、病院を後にした。

俺達が乗っている車が見えなくなるまで手を振っていた先生達をサイドミラー越しに見ると、とても嬉しくて涙が流れた。

そんな俺をみて蘭はそっと肩をだいてくれた。初めて見る俺の涙におっちゃんは静かに微笑んでいた。

探偵事務所に着いた俺は、勢いよく駆け出す…。

“こら、コナン！走るんじゃねー”

“いいじゃない、コナンくんだって嬉しいのよ…”

3階の自宅に着くとホッとした。もう二度と戻ってくる事を諦めていたこの場所…一次退院して倒れたあの夜…おっちゃんに言われたあの言葉。

”大丈夫だコナン…また戻ってこれるから…”

“おじさんの言う通りだ…”

“えっ？なんの事？”

何時の間にか俺の後ろに立っていた蘭に聞かれるが、俺は首を振りリビングに入った。見ると、病気の時使っていた座椅子がそこにあった。

“まだ、あったんだ？”

“そうよーなかなか捨てられなくてね…”

蘭もきっと心配していたんだな…迷惑ばかりかけちまって…本当、悪かったな…蘭…。

それから俺は…倒れてから、何度来たくても来れなかったおっちゃ

んと一緒に寝てた寝室の扉を開けた。

“よかったなー、帰ってこれてよー”

“おじさん…”

部屋の前で佇んでいた俺の後ろから、おっちゃんは声をかけてくれた。

“飯にするぞ、コナン…蘭がおめーの為にうめぇーもん作ってくれるって張り切ってたからなぁー”

“うん…”

俺はこの時本当はその場で泣きたかった。でも、これ以上の心配はかけられない…。そう思い、こぼれ出す涙を懸命に止めていた。

☆退院…そしてただいま☆（後書き）

次回のヒント
訪問者

今日はお休みなので、もう一話
更新します。

前回次回予告に
しましたが、ヒントですね（~＿~；）
間違えました。

では、次回もよろしくです☆

☆付いて来なさい☆

翌日…。

漫画を持って探偵事務所に行こうとした俺はおっちゃんに止められた。

“え〜〜なんで〜〜??”

“いいから、布団に寝てろ〜3日は安静だそうだからな〜”

そういわれ、しぶしぶ布団に入る俺…暇で退屈な俺はふとんの中で、漫画を読むしか出来なかった。

ーピーンポーンー

チャイムが鳴り、話声が聞こえたと思うと蘭は俺が寝てる部屋を開けた。

“コナンくん、哀ちゃんよ…”

“灰原…”

慌てて布団からでる俺は、灰原を見る…。

“具合いはどう?”

“大丈夫だけど…?”

そう話す俺から視線を離し…蘭を見ると、言った…。

“江戸川くん、少し貸してもらえないかしら?”

“えっ？でも…”
“絶対に無理はさせないから…”
“うーん、分かった…。”

そういうと、蘭は俺に薬を持たせ送り出した。

俺は灰原の後ろを不思議な顔でついて行く…。

“なぁ、灰原…どこ行くんだ？”
“いいところ…”

それ以上答えようとしない灰原に俺は素直に付いてくしかなかった…。

そして…付いた先を目にする俺は…目をパチパチさせていた。

“おれんち？”
“さ、行きましょ、待ってるわ…”
“待ってるって誰が？お、おい…”

俺の質問に答えようとしない灰原はそのまま、俺の家の門を開けズカズカと入って行った。

そこに誰が待っているのか知らない俺は、ただただ、付いていくしか出来なかった。

☆付いて来なさい☆（後書き）

いつも読んでいただきありがとうございますｏ（＾▽＾）ｏ

次回ヒント
怒りです

次回もまたよろしくお願いします。

☆心配だった…でも会えない理由があったんだ☆

中に入ると、その人物は勢いよく俺に抱きついて来た。

“新ちゃーーーん…”

“か、母さん?”

“元気そうだな、新一…”

“父さん…”

待っていたのは俺の両親だった。退院を聞いて、駆けつけてくれたと言うのだ。

“大丈夫?もう、平気なの?心配したのよ~ごめんねー本当はもっと早く来たかったのよ、でも……”

“私が断ったのよ…”

おれの身体を舐めまわしながら言った母さんの言葉を遮り、灰原が割って入って来た。腕を組み、俺の顔を見るなり話し出した。

“江戸川コナンと面識がない貴方の両親が来たら、周りの人達はなんて思うかしら?”

“あ……”

“バレるわよね…特にあの感のいい彼女からは…”

俺は納得した。二度ほど母さんとは事件で一緒に見かけられた事はあったけど、それ以上の関係はない…。

遠い親戚って事にはなってるけど、俺のあんな姿を目にした母さんが取り乱したりすれば、きっと…蘭だって感づくだろう。

“ごめんな、心配させちゃって…もう、大丈夫だから…先生だって心配ないっていってたしさ…”
“あのね…”
そういう俺に灰原は、凄んで言い返して来た。
“この際だから言わせてもらうけど、まだ油断ならないのよ…貴方の病気…風邪引いたら、やばいって事頭にいれておくのね…”
“ただの風邪だろ?”
“貴方ねぇ、自分でも気づいてると思うけど、病気になる前と手術後に出た風邪の出方が違うのよ…先生に聞かされたの覚えてないの?”
“え?あ、ああ…”
俺の病気に対する感心のなさに灰原の怒りに火を付けてしまった。
“ああじゃないわよっどれだけ辛い思いをしたと思ってるの?もうちょっと自分の事考えなさいよっ…”
“考えてるよ…悪かったよ…心配かけちまって…”
“そういう事じゃないのよ…”
“えっ?”
何を言おうとしているのか、分かってない俺に灰原は言ってきた。
“無茶をするなって言ってるよ、私は…”
“まぁまぁ、そこまで…新ちゃんだって気をつけるわよね?”
“ああ…”
“でも、新ちゃん…灰原さんに感謝しなきゃダメよ?この子、新ちゃんの為に頑張ってくれたんだから…”

“そうだぞ…彼女がいなかったら、お前は今頃死んでたんだ…お前が今生きてるのは、彼女のお陰だ……”

そう言われ、灰原に向き合うとお礼を言った…。

“ありがとな、灰原…お前には本当に感謝してるよ…”

“別に…そんな事言われたくて頼んだわけじゃないから…”

灰原に事細かく聞いたのだろう…母さんや父さんは病院での出来事をあれこれ聞いてきた。

俺も辛かった事や担当の先生の事…蘭やあいつらの事…入院生活で学んだいろんな事を話した。

ただ、灰原は…俺が泣いた事だけは話さなかったらしく、母さんや父さんはその事に触れなかった。

後で灰原にその事を問いただすと”かっこ悪いでしょ?”と言っていた。

灰原が俺にしてくれた沢山の事を俺は灰原に感謝していた。俺が生き延びたのも、またこうして元気に歩けているのも、灰原のお陰だという事を肝に銘じもう一度灰原にお礼を言った。

☆心配だった…でも会えない理由があったんだ☆（後書き）

今回も寒いなか更新します☆

次回予告
ビクつく身体

またよろしくお願いします☆

☆先生に連れられて…☆（前書き）

ご注意
コナンを泣きます

☆先生に連れられて…☆

その後、俺は父さん達を残して工藤邸を後にし…灰原によって探偵事務所に送られた。

俺の帰宅を心配していた蘭は俺の姿を見ると、灰原に礼をいい…満面の笑みで迎えてくれた。

“じゃあな、灰原…”

“ええ…気をつけなさいよ…”

そういうと、灰原は博士の家に帰って行った。

その夜…蘭とおっちゃんと夕食を食べていた俺は…救急車のサイレンの音に一瞬身体が反応した。

茶碗を両手で覆い…サイレンが聞こえなくなるまでじっと動けずにいた。

その反応に気づいた蘭やおっちゃんは俺を見つめていたが、俺は何もなかったかのように食事を食べ続けた…。

“コナンくん…どうしたの?”

“えっ?何が?”

平静を装って聞き返す俺に、おっちゃんが聞いてくる。

“何がじゃねーだろっ?もしかして、サイレン、怖えんじゃねーか

？”

“えっ？そうなの？？コナンくん？”

“ち、違うよっっ”

悲しそうな目をする蘭を無意識に目を反らした…そして蘭は俺の側に寄って顔を覗き込んだ。

“コナンくん、いいのよ…無理しないで？”

“本当に大丈夫なんだって…”

そういう俺を蘭は抱きしめて言った。

“お願い、コナンくん…本当の事を言って…”

そうしているうちに、再び救急車のサイレンがなり、探偵事務所の下で止まった。

蘭に抱きしめられながら、ビクつく俺の身体を蘭は感じ取りつつドアを開け…下を覗く…。

“先生…”

“えっ？”

蘭の声にびっくりする俺はおっちゃんの顔を見る…。そんな俺の顔を見るおっちゃんも驚いていた。

“毛利さん、すいません…勝手な事だと承知で来ました…”

先生はおっちゃんに頭を下げると…俺に詰め寄り、両手を握った。

びっくりしてる俺の瞳をじーっと、見つめ微笑むと言った。

“コナンくん…今日は君の恐怖を克服しに来たんだ…ついでに、診察も兼ねてね……”

“えっ??”

震えながら、細い声を出す俺に先生は…再度話し始めた…。

“救急車に乗って、病院へ行こう?大丈夫…入院はしないよ…ただ、診察をして帰るだけ…”

“先生…ぼく、熱でてないよ…大丈夫だよ…”

“言っただろ?これは君の気持ちの克服だって…怖がらなくて大丈夫だよ…”

そうはいうけど…俺は今も既に下に止まってる救急車の存在に大きな恐怖を煽られていた。

“少しでも克服しないと…これから先、救急車のサイレンを聞く度に怖い思いをするんだよ?先生も一緒に乗ってあげるから…行こう?”

“う、うん……”

ほぼ強引な先生の説得に渋々頷く俺を見ながら、蘭やおっちゃんも一緒に救急車に乗り合わせ…行く事になった。

相変わらず世話好きな先生を見て、ため息が漏れる…そのため息に反応して”大丈夫だよ”といい、先生は俺の手を引き、救急車へと連れて行った。

先生に手を引かれ、救急車へと足を運ぶ俺は…救急車の存在を確認

すると、心臓が高鳴った。

あと一歩というところで、足を止め…躊躇している俺に先生の手が差し伸べられ…そっと先生の手を握ると…なんとか救急車へ乗れた。

自分の意志で救急車へ乗った俺を見ていた蘭とおっちゃんはその後ろから黙ってついて来た。

救急車に乗った俺は…ストレッチャーの台の上にちょこんと座らせられると、救急車は病院に向けて出発した。

“コナンくん、まだ怖いかい？救急車…”

“当たり前だよ…”

俺は退院を3日後に控えていたあの夜の日、先生と話した事を思い出して言った。

“大丈夫だよ…君は多分、救急車に乗ったら入院しなければいけないとそう思っているんだよね？？でももう、入院する必要はないんだよ…君は病気を治して見事退院できたんだから”

“先生…”

どうしてサイレンの音にビクつくのか自分でも分かっていた…でも、そんな事を言うことなんて出来なくて…ただ、救急車のサイレンを聞くのが怖いんだ…。

そんな思いをずっと抱え込んでいた俺の気持ちをどうして先生は分かってくれるんだろう？？どうしてこんなにも俺の事を思ってくれるんだろう？？

ただ、その気持ちをひた隠しにしていた俺は自分の気持ちを先生の口から言われて閉じ込めていた想いが溢れ出した。

自分の手で涙を拭い…泣いていた俺を皆は黙って見ていた。

“ごめんね、先生…ぼく、もう大丈夫…ありがとう…ありがとう先生…ちゃんと頑張るよ……”

“いいんだよ、コナンくん…頑張らなくていいんだ…そのままの君のペースでいいから、苦手な事に立ち向かって行こう?”

“うん……”

その様子に安堵し、周りの皆から笑みが零れる。

“でも、先生…大丈夫ですか?こんな事して…”

心配する小五郎に運転手は声をあげた。

“心配入りませんよ、毛利さん…運転手は僕たちですから…”

“毛利くん…もう手は打ってある…安心しなさい…”

聞き覚えのある声の主に目をやり、三人は驚いた。

“高木刑事…”

“それに、目暮警部殿…”

“……。”

蘭とおっちゃんが声をあげる中、俺は涙を拭っていた手を離し黙ってしまった。

“大丈夫だよ、コナンくん…実はな…先生から頼まれたんだ…毛利

くんが我々と顔見知りだと知って…コナン君の為に一肌脱いで欲しいっとね”

“ですから、毛利さん…病院側には話は通してあります。捜査の一貫でという事なら、理解してもらえますしね…だから、安心して大丈夫だよ…コナン君…”

目暮警部や高木刑事の優しさに微笑み、俺たちは顔を見合わせる。

蘭が差し出してくれたハンカチで涙を拭うと俺は2人に視線を向ける…。

“目暮警部、高木刑事……ありがとう…”

2人が誘導する救急車に乗りながら、俺は2人にお礼を言った。間もなくして、救急車は米花総合病院に到着した。

☆先生に連れられて…☆（後書き）

こんにちは☆
今日はお昼の更新です

少し長めになりますが、
ご覧ください。

次回のヒントは
お守りカード

よろしくです

☆頼りたくない、お守り☆

“口開けて…”
“あーん”

病院に付き、すぐに診察室に通された俺は退院後初めての診察を受けていた。

“今の所…何も問題はないですね…大丈夫ですよ…”
“それじゃあ…”
“ええ…経過は順調です。安心して下さい…”
“よかった～”

安堵する俺達に先生は…薬を渡しながら言った。

“ただし、風邪の時は充分注意するように…コナンくん、３７度になったらすぐにこの薬を飲むんだよ？飲めば、それ以上上がらないからね…”
“うん、わかった…”

そう返事をすると頭を撫で、机の引き出しからカードらしきものを取り出し、俺の首にかけた。

”江戸川コナン”という名前が書いてある裏には”この患者の緊急時、米花総合病院の内科医まで搬送して下さい”というカードがクリアカードの中に入っていた。

“これは、肌身離さず持ってるんだよ…何かあった時に助けになるからね…これは、いわゆる君のお守りだ”

“……”

俺は暫くそれを眺めていた。けど、それを見ると無償に腹が立つ…でも…これは俺にとって大事なお守り…これに頼らないようにと俺はそのお守りをしっかり握った。

診察を終えた帰り…救急車に乗って足を垂らしストレッチャーの上に座っていた俺の手を先生はしっかり握って話していた…。

“正直、君がここまで回復してくれると思ってなかった…君が元気になって行く姿を見ると先生はとっても嬉しいんだ…先生が君にできる事はもう何もないかもしれない…けど、何かあったらいつでも来なさい…話ぐらいは聞いてあげるからね…”

“うん、先生…色々ありがとう…”

“いいんだよ、元気に生き続けてさえくれれば…”

にっこり笑う先生の顔を入院中、何度励まされた事か…俺はその顔を見ると、やっぱり安心できた。

退院しても、心配して救ってくれる先生に俺は…なんとも言えない嬉しさがこみ上げ、無茶をしない事を誓い…先生と指切りをすると救急車は探偵事務所に到着した。

☆頼りたくない、お守り☆（後書き）

今日も寒い中更新です

次回ヒント
頼れる友達

では、次回も、よろしくです☆

☆なんの電話??☆

”安静してなさいと”言われて三日がたった。さすがに退屈すぎて、何処かへ出かけたくなる…。

漫画も読み飽きて…頭の後ろで手を絡ませてぼーっとしていた。

すると、大きな足音をさせて誰かが階段を登ってくる音が聞こえ、扉の方へ視線を向ける。

扉が開き、覗かせたのは…。

“よう、無事に退院できたみたいやな…?”

“はっ、服部??”

俺は驚いて身体を起こす。退院したら、来ると言った服部…こいつはちゃんと約束を守るんだ。こうやって…。

そんな事を思っていると服部はにっこりしながら言った。

“暇してるみたいやな…”

“まぁな…蘭もおっちゃんにも安静にしてろって言われて…部屋から出させてくれねーんだ”

“そらそうやろな…ほなら、抜け出すか?”

俺の顔を見、ニヤニヤしながら言う服部に俺は笑って元気良く答えた。

“本当かっ?”

“嘘に決まっとるやろ…お前、抜け出す手立てでも考えてたんとちゃうやろな…？”
“えっ…”
服部に図星を突かれて…言葉を失くす俺に服部は思い出したかのように言った。
“そういや、お前…明日、学校とちゃうか？”
“そうだよ…でも、行けるかわかんねーんだ…”
“何でや？”
さっきこそこそと電話していた小五郎を思い出すといった。
“さっき、先生と電話してたんだよ…でも、電話終わったあと何もいってくれなくて…”
“せやかて、何かあったわけやないんちゃうか？ただ単に何もなくて、言わへんかったかもしれんし…”
“ならいいけど？”
“せやったら、俺が聞いて来てみよか？”
そういう服部に俺は背を向け、寝そべると言った。
“いいよ、それにいいづらい話だったら、お前俺に嘘つくかもしれねーから…”
“つかへんて…まぁ、明日に備えて今日はよー休んどいたほうがええんちゃうか？お前熱は？”
“退院してから、一度も出てねーよ…お前も蘭みたいに余計な心配はやめろよな？”
“どういうこっちゃ？”

服部に言われ、日頃の蘭の様子を思い出しながら言った。

“あいつ、心配しすぎるんだよ…俺の事が心配なのは分かるけど、咳一つしただけでも、そばによって来て…”

“今までずっと誰よりもお前の事を見てたんやし…それはしゃーないと思うけど……ほなら、今晩様子みといたるわ…ほんでねーちゃんに言ったる”

服部の言葉に俺は服部に顔を向け、微笑んだ。

今までずっと心配し続けて来たんだから、無理はない…でも、蘭は今でも心配な目で見て来る。

そんな蘭を見ると…俺はどうしても居た堪れない気持ちになって行く…。

退院して、一ヶ月位は油断ならないと、先生や灰原にも言われた…。でも、あんな蘭を見ていると、俺はまだ病気が治ってねーんじゃないかと不安に駆られてしまうのだ。

そんな事を考えていたら、また熱を出して心配させちゃうような気がしてならない。

俺は起き上がると服部を見て言った。

“いろいろ悪いな…”

“かまへんて”

服部は笑っていたけど、俺は未だに迷惑を掛け続けてることに、何とも言えない気持ちになった。

☆なんの電話??☆（後書き）

おはようございます☆

今日は天気よく朝から更新です☆

次回ヒント
蘭の態度

また夜に
会いましょう（＾－＾）／

次回もよろしくお願いします。

☆俺にまかせろっ☆

夕方、俺と服部が談笑していると蘭が帰って来て、駆け足と共に俺の所へやって来た。

“あら？服部君…”

“おう”

服部の存在に気づいた蘭は一瞬微笑むと、俺の方へ寄って来た。

“大丈夫？コナン君？熱は…ないみたいね…？”

俺のおでこに手を当て、熱がない事が分かると安心し笑顔になる…。

“大丈夫だよ…心配ないよ…”

“ダメよ…一カ月は油断ならないのよ…”

俺の事が心配で急いで帰って来た様子の蘭は俺の元気な姿をみると安心していた。

そのあと服部に”無理させないでね”といい、夕食の準備をしに部屋を出ていった。

“なんや？心配する様な態度じゃあらへんやないか～？”

服部は思っていたより違う蘭の態度を見て安心していたけど、俺はその態度が辛いんだ…。

もう病気が治って退院できたと言うのにまだ心配される…だから、

まだ治っていないんじゃないか?と蘭に心配される度に不安になってしまうんだ…。

“もう…心配いらねーんだよ…”

俺は布団をかぶり、ふて寝する…。そんな俺を見て服部の不思議に思う眼差しが突き刺さった。

暫くすると、蘭に夕食だと呼ばれて二人でリビングに向かう。

4人で談笑しながら食べてると、突然服部の口から明日の話題が飛び出した。

“明日から、学校なんやろ?よかったやないか~なぁ?坊主…”

”おい”と突然言い出す服部を止める余地もなく、喋り出す服部に小五郎が一呼吸置いて話し出した。

“明日の学校中止だそうだ…こないだの診察で数値が低かったらしくてな…このまま学校行ったら、熱出るかも知れねーから、もう一日休む様にとさっき先生から電話があったぞ…”

“本当なの?お父さん??”

突然の小五郎の話に、言葉を失う俺に対して、蘭は驚いた様に声をあげる…。

“低いって大丈夫なの?”

“安静にしてれば大丈夫出そうだ…”

そんな小五郎の言葉に、蘭は俺をまじまじ見ると心配な顔で言って

来た。

“大丈夫…？？”

“平気だよ…何ともないからっ……”

蘭の心配する態度に顔を背ける俺を見て、服部が蘭に言い放つ。

“大丈夫やって、ねーちゃん…こない、元気なんやから…一日休めば、問題あらへんやろ？”

“1カ月は安心できないって言われてるのよ…”

“せやけど…”

言いかけた服部に対して、蘭は悪いと思いながらも口を開いた。

“それに…服部君と一緒にいるとコナン君、無茶しそうで…不安なのよ…”

“おい、蘭…”

俺を思うあまり、普段の蘭からでないような言葉が飛び出し、小五郎に一喝させられた。

言われた服部は、何も言わず頭を掻き…バツが悪そうに俺を見ていた。

夕食の後、部屋に戻ると…服部が謝って来た。

“すまんな、工藤…あない図星言われると、何も言われんようになってしもうて…”

“いいって、お前が女に弱いっての知ってるし…”

“なんやと～？”

俺の冗談に食ってかかって来た服部をみて、俺は再度言った。

“それより、お前のお陰でさっきの電話の事聞けからよかったよ…
…ありがとな…服部…”

“工藤……すまんな…頼りにならんで…”

すまなそうに言う服部をなだめる様に俺は一言いった。

“いや、なってるよ…充分すぎるくらいにな…”

その言葉を聞いた服部は安心して立ち上がった。

“じゃ、そろそろ帰るわ…それに、俺がいたらまたあのねーちゃんに、余計な心配されてまうやろしな…”

“服部…ありがとな…”

そういう俺に背を向けて出ていった。

その後、ドアの向こうから聞こえて来る服部と蘭の会話を耳にした…。

“んじゃ、俺帰るさかい…また来るよって…”

“あっ服部君…さっきはごめんなさい…言いすぎたわ”

“ええて…しゃーないやろ、まだ退院してそんなに経ってへんし…あんだけ大きな手術しよった坊主を心配になるんはよう、分かっとるから…”

“そうなの…まだ、安心できないのよ…”

“せやけど、あんま心配せんとええんちゃうか?それにほれ、坊主も心配されすぎると辛いやろし…ほな。”

“うん、ありがとう服部君…”

暫く会話していた2人だったけど、服部の帰ると言う言葉で区切られた。

そんな会話を耳にした俺は少し安心して微笑んでいた。

☆俺にまかせろっ☆（後書き）

冷えて来ましたね
夜の寒い中から更新です☆

次回のヒント
おじさん

寒過ぎて、今日コタツを
買って来ました☆☆

寒いけど一緒に寒い冬を
乗り越えましょう（＾＾）

次回夜中に会いましょう（＾Ｏ＾）／

☆だって、行きたかったんだもん☆

翌日…もう一日休む様にと言われていた俺だったが、蘭が行った後、ランドセルを背負って…こっそり出ていった。

“よう、灰原…”

“くっ、えっ、江戸川君…”

途中、灰原に会った。俺の存在に気づいた灰原は驚いてこっちを振り向いたが、俺の体調が大丈夫なのを確認すると2人で肩をならべて歩いていた。

“今日、熱は何度あったの??”

“えっ?”

“まさか、計って来なかったって事はないわよね?”

図星を突つかれ言葉を失う俺をみて呆れた灰原に、学校に着いたら計るように言われた。

1年B組に顔を出すと、俺の登校に気づいたクラスの皆が一斉にこっちに向い、久々の登校を歓迎してくれた。

“みんな、話はちょっと待ってくれる?一度、保健室に行かなきゃだから…”

そういうと、俺の手を引き…保健室へ連れて行った。

体温計の測定を待つ間、俺は終始緊張していた。何しろ…黙って出てきた挙句、体温を計って来てないんだから…。

ピ、ピ、ピ…。

“３６．５…大丈夫そうね…”

体温計に表示された俺の体温を見ながら、表情を変えずポツリと呟く…。その顔に緊張が増し、非常に怖い…。

教室に戻ると…あゆみ、光彦、元太を筆頭に囲まれて、激励を受けていた…。

“本当によかったですよ～～また、こうやって学校に来られるようになって…”

“あゆみ、ずーっと心配してたんだよ”

“ごめんな…もう大丈夫だからさ…”

“でも、コナン…ぜってー無理すんじゃねーぞ”

“分かったよ…”

そうこうしてるうちに、担任の小林先生がやって来て、俺の存在を確認するなり、そばに寄って来た。

“あら、コナン君…今日からだったのね？？退院、おめでとう”

“ありがとう、小林先生…”

そして、小林先生の”おはようございます”の挨拶で授業がスタートした。

暫く授業受けていた俺の耳に突然乱暴な足取りで近づいて来る足音に反応して顔をしかめる。

扉が開かれ、俺を睨むその人物は小林先生に事情を話すと、俺の身体を乱暴に持ちあげた。

“おじさん…”

“おじさんじゃねーだろっ勝手に抜け出してんじゃねーよ”

“だって、今日から学校って言ってたじゃな～い”

“その事、昨日話しただろーが！！帰るぞ～”

“すいませんな～お騒がせしまして～”

そういうとおっちゃんは俺を片手で持ちもう片方でランドセルを背負いながら、教室を出た。

そのやりとりを見ていたクラスの皆は唖然としていた。

一方で灰原は、やっぱりといった態度で頬杖をつきながら、呆れて居た。

（まったく、どおりでおかしいと思ったわ…あの蘭さんが体温を計らず登校させるなんてあり得ないもの…）

探偵事務所に戻された俺は自室では無く、事務所のソファーに投げ入れられた…。

ドスッ…。

“たくっ、ここから一歩も出させねーからな…そこに座ってコレでも読んでろっ”

そういいながら、漫画を渡された。

“おじさん…”
“それと、今日は診察に行くからな…そこで大人しく静かにしてろよ。”
そう言われ、俺は黙り…諦めてマンガを読み始めた。

暫くマンガを読みながら、ソファーでうたた寝をして居ると…突然、事務所の扉が開いた。
“毛利君…ちょっといいかな?”
“警部殿…”
俺は勢いよく飛び上がり…警部を呼ぶ。
“警部さん!!”

俺の存在に気づいた警部は先程まで険しかった表情が笑顔になり、俺の顔をの覗き込んだ。
“コナン君…もう大丈夫かね?”
“うん、ありがとう警部さん…”
そう挨拶すると、視線をおっちゃんの方に向けると…何やら、事件らしき話を切り出した。
“この事件なんだが…”

2人して資料を見ながら、話し込む様子が気になり、マンガを置いておっちゃんの横から顔を出す。

“ん？”

そんな、俺に気づいた俺に顔を向けると…。

“おめーはいんだよ…そっちいってろっ…しっしっ…”

と、追い払われてしまった。泣く泣くソファーに戻る俺だったが、目はずっとおっちゃんと目暮警部の方に向いていた。

“ちょっと、急ぎなんだが…これから現場に来れるか？”

“……すんませんな…今はコナンから目が話せないんで娘が帰って来たら、行きますよ…待っててもらえませんか？”

俺を見ながら、話すおっちゃんに元気よく言う。

“僕も行く！！”

“おめぇーは口挟むんじゃねーんだよ…いいから、大人しくしてろっ”

そう怒鳴られてしまい、仕方なく帰る警部に声をかけた。

“警部さん！！何の事件？？”

“いいんだよ…事件に首突っ込むんじゃねー”

“アハハ…またな、コナン君…”

そういうと、コナンに手を振り事務所を後にした。

再び俺は退屈になり、マンガで顔を覆いながらうたた寝を始めた。

夕方になり、蘭が帰って来て…俺の顔を覆っていたマンガを外すと、おデコに手を当てる…。

“蘭ねーちゃん…お帰りなさい…”

“ダメでしょ、コナンくん…勝手に学校行っちゃ…”

身体を起こす俺の顔を覗きこみながら、俺は今朝の事をおっちゃんに聞いた蘭に怒られてしまった。

“さぁ、行こう…”

手を差し伸べる蘭の手を見つめ不思議に思って聞いた。

“どこへ?”

“病院よ…”

蘭の手を握りながら、おっちゃんがいない事を気づくと俺は尋ねた。

“おじさんは?”

“目暮警部の所に行ったわよ…”

俺が寝てる隙に行っちゃったのか…と寂しそうにする俺の手を引き、蘭は俺を病院に連れて行った。

☆だって、行きたかったんだもん☆（後書き）

寒い冬に突入した
ある日の夜中から更新です☆

次回のヒント
しょんぼり

それではまた明日会いましょう☆☆

おやすみなさいゞ（＊´∀｀＊）ｏｃ

☆先生は分かってる☆

病院に着いて受付を済ますと名前を呼ばれ診察室に入って行った。

“こんばんわ…コナン君…”

“こんばんわ…”

俺の顔を覗き笑顔をくれる先生に俺も自然と笑顔になる…。

“どうかな?調子は…?あれから、大人しくしてたかな?”

“うん、大丈夫だよ…”

先生は俺の言葉に一瞬安心するが、蘭の顔を見て、表情を変え尋ねた。

“蘭さん、どうですか?コナン君の調子は…?”

“えっ?えー、はい…大丈夫です…”

“正直に言っていただけますか?”

先生は蘭の戸惑いを感じ、俺を庇っている事に気づいて蘭を問い詰めた。

“実は…”

庇いきれそうにない事を思うと、蘭は今朝の事を先生に話した…。

それを聞いた先生は俺の顔を覗いて言った。

“コナンくん…先生言ったよね?安静にしてなさいって…?学校に行きたい気持ちも分かるけど、焦ったらだめだよ?”

“…ごめんなさい…でも、ぼく…なんともないんだ…もう、行けるよ?”

“それは、先生が決めるから…それに数値が低かったからね…万が一熱が出たらと思って…もう一日休ませたんだよ?お願いだから、コナンくん…先生の言う通りにしてくれないかな?”

黙って頷く俺に安堵すると、俺の診察を始めた。

“大丈夫そうですね…数値も問題なさそうですし…今日一日様子を見て、なんともなければ明日学校行っても大丈夫ですよ…”

“本当ですか〜?よかったね…コナンくん…”

“うん……”

さっき怒られて項垂(うなだ)れてる俺の頭に手を置いて笑うと一言言った。

“もう、反省してるよね?コナン君…ちゃんと約束守ってくれれば怒らないから…だから、ほら…もうそんな顔しないで…”

“うん…”

入院中、何かあるとすぐ熱をだしていた俺の体調を気遣って熱が出た時の為に、喉の薬とは別にもう一錠薬を出してくれた。

それを受け取ると、先生に挨拶をし蘭に手を引かれながら、探偵事務所までの道を歩いて帰って行った。

“本当だ〜先生の言う通り……”

“ゴホッゴホッ…”

探偵事務所に帰宅して、口数の少なかった俺の様子に気づいた蘭の

お陰で熱がある事が分かり、布団に寝かされた。

俺のおデコに手を当てると、ぽつりさっきの先生の事を思い出して呟いた。

”入院中、心配事だったり何かあると熱が出てましたので…念のため、薬を持って行ってください…”

先生の言葉を思い出して微笑みながら、俺の脇に体温計を差し込んだ…。

“コナンくん…怒られちゃったね…でも、もう大丈夫だから…先生怒ってないから、だから心配しなくていいのよ?”

“うん…ごめんね、蘭ねーゴホッゴホッ…”

そういう俺を見ながら、蘭は笑って頭を撫でた。

ピピピ…。

鳴った体温計を見るなり、蘭は言った。

“いいのよ…早く熱下げようね…”

“うん…”

蘭が部屋を出ていった後、俺は…悔しさをつのらせていた…。

もう少しで…学校行けたのに…またこれじゃあ、明日もやすみなさいって言われるに決まってる…。

朝までは平気だったのに…何で…いつもこうだ…酸素マスクが取れ

る直前も…退院間近と言う時だって熱が出て、先送りになってしまう。

こうやって、いつも蘭やおっちゃんに心配かけて…これじゃあ、いつまでたっても安心なんてさせてやれない…。

悔しい気持を募らせていると、再び蘭がお粥を持ってやって来た。

“起きれる？”

“うん…”

“薬を飲まなきゃいけないからね…少しだけ、食べようか？”

そういうと、おれの身体を起こしてくれた。蘭に促されながら、お粥をゆっくり口に運ぶ…俺の身体を支えていた蘭をゆっくりみると、優しく微笑んでいた。

そんな蘭を見ると、熱を出してしまった自分の不甲斐なさに腹が立ち、それと同時に…蘭やおっちゃんに対しての申し訳なさがいっぱいになった。

食事を済ませ、薬を飲むと再び布団に寝かされた。

さほど、高熱ではなかった様で…起き上がって食事を取る自分の身体でそれは、はっきり分かっていた。

☆先生は分かってる☆（後書き）

眠い目を擦りながらの更新です☆

次回のヒント

犯人

では、また夜に会いましょう☆

次回もよろしくです☆

☆機嫌の悪い灰原☆

ー翌日ー

目を覚ますと、おっちゃんが心配な顔で覗き込んでいた。

“おお、目ぇ覚めたか?”

“おじさん…”

“どうだ?調子は…”

“大丈夫だよ…”

ピピピ…。

俺が寝てる隙に挟まれたのか、体温計が鳴った。それを見るおっちゃんは笑顔になり、俺の顔を見ると言った。

“そのようだな…学校行くか?”

“いいの?”

そう聞く俺の額に手をやりながら言った。

“ああ、熱は下がったみたいだしな…”

“行くよ、おじさん…”

そう答える俺に”待ってろ”というと、電話をかけにいった。

先生と電話で話してるおっちゃんの声を聞きながら、俺は起き上がり…着替え始めた。

そうこうしてるうちにおっちゃんが戻ってくるなり、言った。

“行ってもいいってよ…その代わり、博士んちの灰原って子が迎えに来るから、飯食いながら待ってろよ…”

“えっ?灰原が??”

“ああ、心配だから…一緒に連れてくって言ってたらしいからな…”

話しながら、着替えを済ませリビングに行くと、既に蘭が食事の支度を始めていた。

“あっ、コナンくん…おはよう、もう大丈夫そうね…そこに座って?すぐ用意するから…”

“うん…”

元気に話す蘭を見ると、昨日俺の悔しかった気持ちを掻き消してくれてる様な気がした。

俺の悔しさなんて、必要ないくらい俺の顔を見る蘭の顔は安心した様に微笑んでいた。

“哀ちゃんが迎えに来る前に食べちゃお?”

そう言われ、食事を済ませ…薬などの準備をしていると、灰原がやって来た。

“あっ、哀ちゃん…今日はよろしくね…”

“ええ…大丈夫かしら?”

“大丈夫だよ…”

灰原に返答する俺を見るなり呆れた様に言い放った。

“貴方の意見は当てにしてないから…私は蘭さんに聞いてるのよ…”

そんな灰原を見て、蘭は笑いながら灰原に伝えた。

“大丈夫よ、哀ちゃん…熱も平熱に下がってるから…”

“そう…じゃ、行きましょ…”

ランドセルを背負う俺を見た灰原に促されながら、”行ってきます”といい、学校へ向かった。

“灰原…何怒ってるんだよ…?”

“あら?分からない?”

一緒に学校への道を歩いて行く途中、朝から機嫌が悪い灰原に俺は言った。

“無理するなって言ったはずよね?それなのに…早速無理してくれちゃって…怒るなって方が無理なんじゃない??”

“灰原…悪かったよ…もうしないからさ…”

“どうかしら?”

学校へ着いた俺は小林先生に注意されたが、蘭から預かった健康ノートを見せると、安心していた。

もちろん、歩美、光彦、元太にもコテンパンに叱られたりはしたが、難なく無事に一日を終わらせることが出来た事に嬉しくなりつつ、約3ヶ月ぶりの下校をこいつらと共に歩いていた。

☆機嫌の悪い灰原☆（後書き）

おそーい夕飯を食べながら、
更新です☆☆

次回ヒント
白いマント

次回明日会いましょう☆
また明日よろしくです☆☆

☆お前だったのか…☆

そして、その帰り道…久しぶりに皆で博士の家に遊びに行こうと話していた時、灰原が割って入って来た。

“ダメよ…まだ江戸川君は万全じゃないの…また今度ね…”

“わりーな、今日はこれから病院なんだ…蘭ねーちゃんに早く帰ってこいって言われてっから…”

そんな灰原と、俺の言葉を聞き…残念そうな顔をする三人に”またな”といい、灰原に説教されつつ帰り道を歩いていた。

“本当に気をつけなさいよね…油断すると、すぐ熱が出るのは退院した今でも変わってないんだから…”

“ああ、分かってるよ…”

そう言われ、灰原と別れ…探偵事務所までの道を一人で歩いていた。

その時だった…ヒラヒラとなびかせたその白い物体は俺がその存在に気づいたと同時にゆっくりと俺の目の前に降りて来た。

“よう、名探偵…”

“！！！！キッド…！！”

久しぶりに見るそいつは病気になる前までよく顔を合わせ戦っていた強敵…怪盗キッドだった。

“元気そうじゃねーか？て事はもう、これはいらねーって事だな…”

そういうと、俺の前にかざした巾着…それは、病院で灰原に一度手渡されて返したものだった。

“どうしてお前がそれを?”

“知りたいか?実は、お前の代わりにお前の彼女に電話してたんだ…あの子に頼まれてな…”

“あの子って?”

“ほら…さっきまでお前と一緒にいた…”

“灰原??”

そういうと、不敵な笑みを浮かべ頷いた。灰原が捨て台詞の様に呟いた

”仲良しさん”ってこいつの事を言ってたのか…。

“聞いたぜ?お前今まで病気で入院してたんだって?”

“えっ?ああ、まあな…”

キッドに差し出された巾着を受け取り、キッドの方へ向くと尋ねた。

“けど、何でお前が?あいつに頼まれたのか?お前が独断でやるわけねーよな?”

“ご名答……いつもの様に予告出して、現場に言ったら、あの子がいてよ…これを渡されて頼まれたんだ…”貴方の中に少しでも思いやりがあるのなら、かけてあげてくれる?毎日じゃなくてもいいから”…ってよ…”

灰原の言葉を思い出し、声真似するキッドを見て、驚いた…。

“灰原が……”

ポツリと言う、一言に…キッドが再度口を開く…。

“あの子…結構、思いつめていたぜ？”

“えっ？”

“お前の手術がうまく行くか分からない時、泣きそうな顔してさ…”彼の手術…うまく行くか分からないの…お願い…その時が来るまででいいのっ…お願いだからっ彼女にかけてあげて…これは、私からの依頼よ、お礼は出来る範囲で必ずするからっ…”てな…強がってはいたけど、あの子、おめぇーの事すんげー心配してたぜ…”

普段の灰原には思いもつかないそんな事を言われ、驚いていた。病気になっても、決して優しさなんて見せた事もない灰原が、こんなにも陰で頑張ってくれた事を知った俺は、今まで俺の我儘で迷惑をかけていた事を思うと、居た堪れない気持ちになった。

“けど、何で承知して蘭にかけ続けたんだ？いくら、灰原の頼みだからって…”

そういう俺の問いに、キッドは悪戯な笑みを浮かべると俺の頭をポンポンしながら、言った。

“そんなの決まってるじゃないか名探偵…お前と戦えなくなるのは少々物足りないんでね…”

“フッ…あっ、灰原が言ったお礼…代わりに俺がしてやるよ…何をすればいい…？？”

“いらねーよ…”

そういうとヒラリとマントを翻して飛び立った。

“お前が生きて、また俺と戦えるんなら、それで満足さ…また会お

うぜ名探偵…月夜の満月が顔を出す頃に…”

そういうとあっという間に、空に消えていったキッドを眺めていると…目の前に蘭の姿が飛び込んできた…。

“コナンくん…ねぇ、今のって?”

“えっ?”

聞き返す俺の顔を覗いていた蘭だったが、微笑みながら手を差し伸ばして来た。

“帰ろう?”

“うん…”

俺は蘭の手を握ると、蘭に手を引かれて…病院へ行った。

☆お前だったのか…☆（後書き）

ねむーいお昼の時間から
更新です☆

次回ヒント
ケンカ

次回は夜会いましょう☆
よろしくです☆

☆コナンに冷たい哀☆

次の日…俺はキッドの事を灰原に電話してお礼を言った。

“言ったわよね？私に任せなさいって…そんな事、とっくに気づいてると思ったけど…”

“気づくわけねーだろっ…お前、何も言ってくれなかったし…”

“あら、そう？じゃあ、観察力が足りないんじゃない？名探偵さん？”

素直にお礼を言うつもりだったのに、結局いつもの様に喧嘩になってしまい、呆れながら言った。

“お前なぁ、人が折角素直に礼言ってんだから、素直になったらどうなんだよ…？”

“……言ったかしら？お礼言ってくれって？そんなくだらない電話してくるだったら、切るわよっ…私は誰かさんみたいに暇じゃないから…”

“おい、はいば…”

そこで、ガチャっと音を立て電話は切られてしまった。俺は深くため息をついた…またいつもの様に喧嘩を売り、灰原を怒らせてしまった事に後悔して。

工藤君の電話を切った後、冷たくしすぎたかしら？と少し後悔が募った。

でも…折角かけて来たんだから、そんな事より、自分の体調管理位は気をつけなさいと一言えば良かったかしら？

まぁ、蘭さんもいつも以上に警戒してるし…大丈夫よね…。

そんな事を考えてると、さっきの電話の喧嘩が聞こえたのか、博士がやって来た。

“哀くん…もう少し、優しくしてやっても良かろうに…”

“だめよ！また、こないだみたいに調子に乗って、無茶し兼ねないから…”

そういう私の顔を覗き込むと、工藤君の具合を聞かれた。

“一ヶ月は油断を許せないらしいけど、今の彼の無茶な性格じゃあ、まだまだ安心はできないわね…”

“まぁ、新一も危なっかしいとこあるからの～”

“危なすぎるわよ…病気になった自分が一番よく知っている筈なのに…分かってないのよ…どれ程危険か…まだ、彼はリハビリを要する位置にいるから…この先、急激な高熱を経験すれば、少しは自重するだろうけどね…”

私は工藤君の無茶苦茶な行動に腹をたてつつ、今の工藤君の状態を博士に伝えた。

☆コナンに冷たい哀☆（後書き）

こんばんわ（＾＾）
日本バレー勝利後
興奮状態のまま更新です☆

次回ヒント
わがまま

次回は子供つぽい
かわいいコナンが登場します。
お楽しみに☆

次回は夜中に会いましょう☆

☆大丈夫だもん☆

その夜、熱を出した…でも、決して灰原との喧嘩が原因でって訳ではなく…きっと、この日から手術後の高熱が出て来たのだろう…。

“ゴホッゴホッ…”

おっちゃんは、仕事でこの日は帰って来なかった為、俺は一人部屋で寝ていた。

“コナンくん?”

丁度、トイレに行ったのであろう、蘭が顔を覗かせる…。また、余計な心配をさせない為、慌てて布団を被る。

そんな俺の行動を不思議に思った蘭と布団の取り合いで戦っていた。

“コナンくん!!布団とって顔見せなさいっ”

“やだよ…ゴホッゴホッ…”

勝負の末、俺は蘭に負けた。俺の咳を聞いた蘭はすぐに俺のおデコに手を当てる…。

“ちょっと、熱っぽいわね…”

そういうと、キッチンから持ってきた薬と水を渡された。

“もー、内緒にしてもバレるんだからね…調子が悪かったら言わなきゃだめでしょ?分かった?”

“はい……”

熱を隠そうとした俺は結局怒られてしまった…。

翌日…。

“もう、大丈夫だよ…学校行ったっていいじゃなーい…”
“だめよ…熱何度あると思ってるの??今日は休みなさい…”
“やだーーー”
“コナンくん!!”

朝、熱を計って見ると…夕べの熱が下がらずに、高くなっていた。
昨日の灰原の喧嘩で余計な心配させまいと、無理にでも学校に行こうとする俺は蘭に止められていた…。

“やだやだやだやだっ…”
“言う事聞きなさい…”
“やだーー”

俺は胸の前で手をグーにして大きな声で蘭に歯向かっていた。その時、仕事を終えて、大きなあくびをしながらおっちゃんが帰って来るなり、何事かと思い目をまん丸くしていた。

事情を聞いたおっちゃんは、俺を引き受け蘭を学校に行かせた。

“さてと…?”
“おじさん!!行かせてよっ…”
“寝んだよっ…テメーは…”

そういうと、俺を持ち上げ寝室に連れてかれた。再度熱を計ると…さっきの騒ぎで上がってしまったのか、３８．２度もあった。

“何考えてんだ、おめぇーは？よくこんな熱で学校に行こうとしたな…”

“大丈夫だよーー！！”

“大丈夫じゃねーんだよっ…”

大きな声を出したせいか、咳き込む俺を見下ろして言った…。

“そら、みろ…咳き込んでんじゃねーかよ…大人しく寝てろっいいな…”

“…おじさん…灰原に…”

“ああ？”

俺は仕方なく諦めて、おっちゃんに灰原の事を頼んだ…。昨日の喧嘩が原因で学校休んだのではない事を伝えて欲しいって事を…すると、ニヤつきながら俺の顔を覗いた。

“ははーん…それで、学校って騒いだのか…たくっ…学校電話したついでに伝えてやるから、大人しく寝てんだぞ？いいな？”

“うん…分かった…”

☆大丈夫だもん☆（後書き）

猫の温もりを
感じつつ、夜中に更新します。

次回ヒント
プリント

次は明日会いましょう☆

今は一日三回更新していますが、ストックが
落ち着いたら、一日一回の更新にします。

☆仲直り…そして効かない薬…☆

翌日、工藤君は風邪で休む事を先生から聞かされた。
彼の席を見つめながら、昨日の喧嘩が原因だろうか?と思っていると、先生に呼ばれた。

“江戸川君と喧嘩したの?”
“ええ…”
“今日の風邪、灰原さんが原因じゃないからって言ってたそうよ…余計な心配しない様にって”

そういわれ、小林先生にプリントを渡された。帰りに持って行くようにっていわれて…。

その日の帰り、私は彼のお見舞いに行く事にした。探偵事務所に着くと、寝室に通された。

“灰原っ…”
“いいわよっ寝てて…”

私の存在に気づき、起き上がろうとした彼を私は止めプリントを布団の上に置いた。

“先生に頼まれたから、持って来ただけよ…”
“……”
“まったく…人の気遣いなんてしてるんじゃないわよっ…薬…効かなかったらしいわね…”
“えっ?ああ…”

私が渡したプリントを見つめながら、返事する彼は…薬が効かなかった事に不信感を抱いてる様子だった。

“体制ができてしまったのね…薬…新しくなるかもしれないわ…明日にでも病院に連れてって貰いなさい…”

“あっ、灰原っ…”

帰ろうとした私に声をかけると、彼は言った。

“あっ、昨日は…”

“ごめんなさい…ちょっと、言いすぎたわ…お大事に…”

彼の言葉を遮り…背を向けたまま昨日の事を謝ると、私は部屋を出て言った。

その足で病院に行き、先生に彼の容体を伝えた…。

“えっ?そうか、分かった…知らせてくれてありがとう…”

“いえ…”

そう伝え、私は帰路についた…。薬が変わるかもしれないけど…少し強くなる程度だから、それ程心配ないわね…。

これから、熱が頻繁に出始めるかもしれないけど…その症状はだんだん良くなっているって事に彼が気づいてくれてれば問題ない…それを彼が勘違いをしていたら、また抱え込んでしまうかもしれないわね…。

そう考えながら、帰路に着く私は…彼に伝えず、様子を見る事にし

た。

☆仲直り…そして効かない薬…☆（後書き）

こんばんわ（＾＾）
寒くて帰った早々暖房をつけながら、
更新です☆

バレー勝ちましたね☆
見事、アメリカにストレート勝ち
しましたね☆
よかったです☆

次回ヒントは
蘭との勝負

次回もよろしくです☆

☆薬を見つめるコナン☆

“なんでー？熱下がったじゃない！！”
“だめよ、今日は病院に行くんだからっ…”
“帰って来てからでいいよ～”

翌日、熱は下がって学校行こうとしていたコナンくんに私は病院に行く事を伝え、今日も学校休むことを学校に連絡しようとしていた。

それを見たコナン君は必死になって学校に電話をしようとしている私の腕にジャンプして止めようとする…でも、まだ子供のコナン君の背には私の腕は届かない…。

そんな姿を見て可愛らしく思いながら、私は急いで学校に電話をかけた。

“あっ、おはようございます…”

そして電話は学校に繋がり私は小林先生と話を始めた。

話してる時背後に何かを感じて振り向くと、コナンくんがいつの間にか持ってきた椅子の上に乗り、私が持ってる受話器に手をかけるとこだった。

強引に私が持っている電話と一緒に私の手を自分の方へ引き寄せながら、大きな声で叫んだ。

“小林先生！！なんでもないから、ぼく今日学校行くからっ…”
“コナンくん、いい加減にしなさい”

一生懸命に小林先生にそういうコナンくんから逃げ、漸く休む連絡をすると電話を切った。

電話が終わると私は腰に手をあて、コナンくんの方へ向き、呆れながら言い放った。

“コナンくん!!…もー、ほら病院行くからっ支度して…”

そういうと、げんなりしながらもコナン君は着替え始めた。

病院に着き、不機嫌なコナンくんと一緒に挨拶しながら診察室に入ると、コナンくんの顔を笑いながら覗き込んだ。

“どうしたんだい?コナンくん??”

今朝の事を聞いた先生はコナンくんの頭に手を置くと言った。

“ハハッ…それくらい元気なら大丈夫だ…なぁ、コナンくん…”

“笑い事じゃないですよ~大変だったんですからー”

一通り笑ったあと、先生は診察をはじめた。コナンくんの喉を覗く先生は一度唸ると…薬をコナンくんに差し出した。

“コナン君…今度、熱が出た時に飲む薬だよ…”

そういう先生の顔を見ていたコナンくんの視線は次第に薬へと移った。

“これまでの薬と違って、副作用があり…熱が下がるまで少し辛い

かもしれません…”

“まだ…続くんですか??”

私は耐えきれず、口から出てしまっていた。そんな私に驚いたコナンくんは振り向いて私の顔を見ると笑って言った。

“ぼく、大丈夫だよ…蘭ねーちゃん…”

そんなコナンくんを見ると、とても辛くて…でも、それよりも辛い思いをしているコナンくんなのに…私の事を元気付けようとして笑っている…。

“辛いと言っても、熱が下がれば大丈夫ですから…それに、すぐ効く薬ですから…安心してください…”

“はい…”

私の返事に安心したのか、コナン君は再び薬を見つめていた。

“大丈夫だよ…”

先生はそういうと、コナンくんの頭を撫でた。

両手でしっかり握って薬を見つめるコナンくんは何か考え込んでいる様子にも伺えた。

私はコナンくんの手を繋ぎ、病院を後にし帰路に着いた…コナン君の様子がおかしい事に気づき、私はいろいろ話しかけるけど決まって返事は”うん”それしか言ってくれなかった。

☆薬を見つめるコナン☆（後書き）

眠い目をこすりながらの
更新です☆
早くてすいませんｗｗｗ

次回ヒントは
限界ｗｗ

お楽しみに☆

☆疑問に押しつぶされたコナン☆

その夜、夕飯が出来たと…コナンくんを呼びに行こうと寝室の扉を開けようとした時…中から、すすり泣く声が聞こえた。

静かに扉を開け、覗いて見ると…先程の薬を見つめて、流れ出す涙を拭っているコナンくんの姿が目に飛び込んできた。

多分、辛いのが嫌なのかなと…先程の先生の言葉を思い出した私の脳裏にはそんな簡単な事しか浮かばなかった。

それから薬が変わったと同時に、度々の高熱が頻繁にコナンくんを襲うようになった。薬の副作用で辛いのか、うなされる様に寝入っていた時、心配する私の顔を見るコナンくんの瞳が私から目線を反らす様になった。

でも、声をかけるといつものように答えてくれたから、さほど気には止めていなかった。

学校には、行きたがってはいたけど…度々の高熱にやられ、3日に一回位しか行けなくなった。

“コナンくん…大丈夫?”

“大丈夫…ゴホッゴホッ…心配しないで…”

そういいながら、私から目線を反らすコナン君は寂しそうな表情を浮かべていた。

“気をつけるのよっ？調子が悪かったら、ちゃんと先生に言うのよ？分かった？”

“分かってるよ…行ってきまーす”

ここんとこ、殆ど熱が出っぱなしになり…なかなか学校に行く事が出来ずに寝込むことが多くなった俺を蘭は異常なまでに心配する様になって行った。

そんな張り詰めた蘭の顔を見ると、辛くて…すぐに視線を反らす俺を何となく感じてる様で…俺の目を見つめて話す様になっていた。

たまに学校に登校すると、心配しすぎる奴らがここにもいた。

“大丈夫だって言ってんだろっ…”

あまりにも、心配され続ける俺の精神状態はそんな周りの気遣いが鬱陶しく思えて来る。

そんな態度を見ていた灰原が俺に詰め寄り言って来た。

“ちょっと、人が心配してるのに何？その態度？？”

“別に、そんなつもりじゃ…”

“まさか、蘭さんにもそんな態度とってないでしょうね？”

相変わらず厳しい態度の灰原に、俺はふて腐れて頬杖をついた。

“蘭さんはあなたの事、凄く心配してるのよ…そんな人に対して今の様な態度をとって泣かせたりしたら、私は許さないわよ？”

“うるせーな、してねーって…”

授業中、ふて腐れたままの俺の態度を見て、灰原が言ってきた。

“いつまでふて腐れてるのか分からないけど、誤解なんてしてないでしょうね??”

“あ?”

“別に…”

俺の症状について、何か知ってる様な言い方をした灰原に…俺は嫌な予感が浮かび、尋ねた。

“お前、やっぱり知ってたのか?”

“何?それ…まさか、本当に勘違いしてる訳?”

“別に…”

ぶっきらぼうに答える俺は灰原に呆れられ、ため息をされる…。

家にいれば蘭が…学校に行けば、灰原に…俺の心の拠り所がなくなっていた。

術後の後遺症からでる発熱に、それを下げるために飲まされる薬の副作用…そして、心配しすぎる蘭や身体の事を気遣って厳しく諭す灰原…いろんな事が重なり、俺の体力と精神力は次第に限界に来ていた…。

そして、その授業中…俺は机に顔を突っ伏して、倒れてしまった。

“江戸川くん!!”

隣の席からあげる灰原の声を聞きながら、俺の意識は遠のいて行った。

☆疑問に押しつぶされたコナン☆（後書き）

こんばんわ☆
ワンピースを見ながら、更新します。

次回ヒント
行き先は？

いつも、お気に入り登録、
ありがとうございます☆☆

次回もお楽しみに☆

☆コナンの疑問は募る☆

その後、教室はちょっとした騒ぎになったけど…江戸川くんを保健室に運び戻って来た小林先生に”心配ないです”と言われた皆は少しばかりの安心をしていた。

意識を飛ばし…保健室のベッドに寝ている彼を見ながら、私は保健の先生に彼のランドセルから取って来た薬を渡した。

“ありがとう…コナンくん、病気治ったのよね?”

“ええ、でも完全じゃないから…まだ時々熱がでるのよ…”

“そう…それにしても、最近頻繁になってるのよね…”

工藤君を見つめる保健の先生の顔が次第に硬くなっていく…そんな先生の様子を察し再度口を開いた。

“本当は、一ヶ月程自宅で安静にしてなきゃいけないとは思うんだけど、多分我儘言って行かせてもらってるのよ…学校に…”

“そうなの…”

“でも、心配ないわ…薬だって持ち歩いてるし、何かあったら、飲ませれば済むことだしね…”

“そうね…じゃ、後は私が見てるから…あなたは教室に戻りなさい…”

そう言われ、後は任せて戻ることにした。

夕方…吉田さん達と一緒に工藤くんのランドセルを持って保健室へ

いくと、熱は下がった様子で…起き上がって水を飲んでいた。

私達の存在に気づいた彼はパァーっと笑顔になり、私達からランドセルを受け取ると保健の先生に”さよならっ”といって手を降り…帰宅路についた。

“大丈夫ですか？コナンくん…？”

“大丈夫だよ…薬飲めば、すぐ下がるから…心配ねーよ…”

心配する円谷くんをなだめるかの様に諭す彼は何か決心を決めてる様な感じがした。

すると突然、彼は私達を追い越して走り出した。

“わりーな、ちょっと行くとこあるから、先に帰っててくれ…”

“ちょっと…走ったらダメよ…”

私達が止めるのもままならない内に、彼はあっという間に走り去ってしまった。

何処へ行こうとしてるのか、だいたい検討はついてるけど、この頃の彼の様子から何か勘違いを誤解に変えてるのかとそう思っていた。

行き先はあそこ…そう確信した私は皆を連れて、その場所に向かった。

皆と別れた俺は先生に会いに病院へ向かった。病院の自動ドアをくぐり抜け、院内に入っていくと…声をかけられた。

“あら？コナンくんじゃな〜い…どうしたの？学校帰り？”

入院中、俺の担当をしてくれた看護婦さんは俺のランドセル姿を見ると微笑んでいた。

“先生は？”

俺はしょんぼりしながらも、そう言う俺の手を引いて、先生の所へ連れて行ってくれた。

ーコンコンー

“はい…”

中から返事が聞こえたのを確認して、看護婦さんはその扉をあけた。

“あの…先生…”

“おお、コナンくん…今日は学校だったのかい？”

そう言いながら、部屋に入るのを躊躇している俺の顔を覗き込むと先生は笑いながら手招きした。

“おいで…コナンくん…”

“……うん…”

そう言われ、看護婦さんに背中を押されながらゆっくり入って行く…。

“どうしたんだい？コナンくん…今日は調子良いみたいだね…学校どうだった？”

“……さっきまで、保健室で寝てたんだ…ぼく……”

そう言って、下を向いた俺を先生は心配していた。額を触る先生はなぜか笑っていた。

“今は熱下がってるみたいだね、良かったじゃないか、コナンくん…”

“うーん…”

“何か聞きたい事があって来たのかな?”

先生はずっと俺の顔を見続けながら、俺が話し出すのを待ってる感じだった。

“先生、僕の身体の事教えて?本当の事、教えてよ…先生…”

“なんだい?本当の事って?”

不思議な顔をしながら、俺の顔を覗き込む…。

“だって、おかしいよ…僕の病気、治ったんだよね?なのに、なんで?どうしてまだ、こうなの?”

“辛い事かい?”

ランドセルを握りしめ、俯きながら言う俺の言葉をじっと聞いてくれていた。でも、先生はまだ俺の言おうとしている事をわかっていなかった。

“どうして、みんな…まだ僕の事を心配するの?これじゃあ…あの時と同じだよ…”

“あの時って??”

“ぼくの病気が治らないって聞いた時…あの時と同じ顔してる…蘭ねーちゃんも…灰原も…皆だって……”

そこまでいい終わると、俺は先生の方を向いて大きな声で言った。

“先生!!言ってよ…ぼくもう何言われても平気だよ…お願い!!”

そういうと先生は俺の身体を掴みながら話し出した。

“コナンくん…何を誤解してるのか分からないけど、君の病気は治ったんだよ?その証拠に、ちゃんと歩けてるじゃないか?もし、何か進行があったとしたら…私は入院を進めてるはずだよ…”

“でも…何で入院してる時よりも辛いの?何で熱が出るの?どうして、薬が強くなっちゃったんだよっ…そんなの、絶対おかしいよ…”

先生に詰め寄りながら、強引に答えを聞き出そうと興奮していた時、突然扉が開いた。

“やっぱり…先生を困らせてるんじゃないわよ…様子がおかしいと思っていたら…何、勝手に誤解してるのよ…あと何回病気は治ったっていえば気が済むのかしら?”

“灰原…”

いつのまにか、ドアの向こうで聞いていたのか、灰原は元太達を連れてやって来ていた…。

“けど…だったら何で……”

“心配位するわよっ…熱がでてるんだもの…しない方がおかしいんじゃないの?”

いいながら、凄む灰原に俺は言葉を失っていた。どうすれば、精神的に追い詰められている気持ちに納得できるのかも…分からない状

況まで陥って…。

☆コナンの疑問は募る☆（後書き）

次回ヒント
手のひら

眠い午後から更新します。

次回もよろしくお願いします。

☆哀のムチ☆

暫く、灰原や先生に説得させられていた俺の顔を見ながら、先生はある事に気がついた。

“コナンくん…？カードは？”

そういう先生の言葉に反応して、灰原が尋ねる…。

“診察券の事かしら？”

“いや、そうじゃないんだ…コナンくん？”

俺の顔を覗く先生から顔を背けた。すると、丁度いいタイミングで蘭が入って来た。

“コナンくん…”

“蘭さん…”

灰原の連絡を受けて、やって来た蘭は先生に一礼をすると…俺の顔を悲しそうな顔で見つめると俺の首にこの間先生から貰ったお守りを下げた。

“コナンくん…やっぱり、持ってなかったんだね？”

“ダメじゃない、コナンくん…忘れちゃ…何かあったら困るのよ？”

“大丈夫だよ…”

そのやりとりを見ていた灰原が聞いて来た。

“何なの？それ？”

“ああ、これはね…”

言いかけた先生の言葉を遮り灰原は俺を睨んで言った。

“ごめんなさい、先生…私は江戸川君に聞いてるの…”

“あ、いや…”

答えずらそうにしていた俺の首にかかっているカードを自分の手で持ち、俺の顔に突きつける様にして見せながら怖い顔で睨むと尋ねた。

“何?これ?”

“……”

“どういう物なのか聞いてるのよ?”

“この間、先生に貰ったんだ…何かあった時のお守りだって…”

“じゃあ…何で今日持ってなかったのよ?何かあったわよね?救急車で運ばなきゃいけなかったんじゃないの?”

“大丈夫だって…”

それを聞いていた蘭が驚いて聞いて来た。

“今日、学校で何かあったの??”

“教室で倒れたんです…薬飲んだから、熱は下がったんですけど…”

“コナンくん…”

灰原の話を聞いた蘭は、驚きながら俺の顔を覗いていた。

“大丈夫なんだって…平気だよ…”

“もしかして、これ…わざと忘れて来たの?”

“……だって、もう大丈夫だから…平気だから…”

そのやりとりを聞いていた灰原の怒りが頂天に達し、次の瞬間…灰原の手の平が俺の頬を鳴らした…。

ーパチンー

俺は驚き、思わず自分の頬を押さえて灰原を凝視する。

“！！！！！！”

その光景を目の当たりした皆の目線が釘付けになり…瞬時にその場を凍てつかせた。

“いい加減にしなさいよ…貴方、何やってるのよ？どれだけ周りに心配させれば気が済むのっ？”

そう怒鳴る灰原は、怒りに震えていた。俺は自分の頬を押えながら、何も言えないまま俯いた。

“何が大丈夫よっ？今日だって、熱を出して保健室に運ばれたじゃない！！たまたま学校だったからよかったものの…わざと自分の身体を危険に晒すような真似して、いったい貴方の何を信じれば良いのよっ！！もっと自分の身体の事考えなさいよっ！”

俯いたままの俺を凝視し、扉に向かって歩き出した灰原は、もう一度俺の方を振り向くと言った。

“貴方が今やってる行動はね…意地でもなんでもないわ、ただの我儘よ…じゃあ、私は帰るから…後は任せるわ…”

そういうと、灰原は扉を開け帰っていった。灰原の居なくなったその一室で俺は頬を押えながら俯いたまま、俺を心配する皆の視線を集めていた。

考えてみれば、俺は最近ずっと我儘ばかり言って心配かけていた事に気づかされた。灰原の言う事も分かってるつもりだったけど、灰原の口から最近の俺の行動を言われてショックを受けた。

度重なる高熱を疑い、お守りの存在を亡き者にしていた俺は、結局こうやって心配かける羽目になっていた事に言葉を失ってしまった。

“ごめんなさい”

その言葉を何度言っても足りない位、心配する人達をよそに我儘を言い続けていた俺は灰原が帰った今でも顔をあげられない。

“コナンくん……”

心配して俺の名を蘭は静かに呼んだ。そして、俺を諭すかの様に話始めた。

“哀ちゃんだって、心配だったのよ…分かるでしょ？コナンくんが無茶すると、心配なのよ…だから、もう少し自分の身体の事…考えよ？ねっ？”

頬を押え俯きながら、涙目になって行く俺の瞳から大きな雫がこぼれ落ちた…初めて見る俺の涙に元太達はきっとびっくりしてるだろう？

そんな俺を見つめながら…心配した面持ちで覗いてくる蘭を俺は見る事ができずにいる…すると蘭は、俯いている俺の頬を両手で覆い

じーっと見つめると言った。

“コナンくん？私の目を見て？”

ポロポロこぼれ落ちる涙を流しながら、俺はゆっくり蘭を見た。

“久しぶりに…ちゃんと、見てくれたね…最近、いつも視線そらさせちゃうんだもん…”

“蘭…ねーちゃん……”

俺の顔を微笑みながら覗く蘭の顔を見ると、もっと涙が溢れ出して行く…。そして瞳を必死に閉じ…涙を止めようとしている俺に先生は頭を撫でて言った。

“コナンくん…初めて見たな…君の涙…もう、無茶な事はするんじゃないよ…灰原さんも、君を心配して怒ったんだから……さぁ、ここに座って…”

先生に促されながら俺は、診察椅子に座らせられた。先生は俺に緊急カードを握りらせて、言った。

“もう一度言うよ…これは、君の命のお守りだよ…このカードが君を救ってくれるんだ…嫌かも知れないけど、先生がいいって言うまでは絶対に離しちゃいけないよ…分かったね？”

“……うん……”

先生にそう言われ、涙を拭い…やっとの思いで頷き返事をした。

そんな俺を見た皆は安心した様に胸を撫で下ろして笑っていた。

その後、熱っぽくなった俺は先生に注射を打たれた後、蘭の背中に乗って皆で帰りを共にしていた。

“コナンくん…元気出してください”

俺の方を向き、心配する光彦に付け加える様に元太は言った。

“けど灰原怒らすと、こえーよな…”

“元太くん!!大丈夫だよ、コナンくん…哀ちゃんも分かってくれるよ…”

それを止めるかの様に歩美に励まされ…しばしの沈黙の後、俺は三人に謝った。

“ごめんな…もう、迷惑かけたりしないからさ…”

“何言ってんだよ、コナン…”

熱の為か、蘭の背中に顔をうずめたまま言った俺の言葉を元太は否定する。

“コナンくん…私達、友達じゃない!!”

“迷惑なんて、思わないでください…”

謝る俺を三人は懸命に説得する…。そんな三人を見た俺は一瞬微笑むと
、目を閉じた。

“コナンくん、コナンくん…”

皆が俺を呼ぶ声を聞きながら、俺はゆっくりと眠りについた。

☆哀のムチ☆（後書き）

こんばんわ
男子バレー負けちゃいましたね☆☆

次に期待しつつ更新です。

次回予告は
副作用

また明日お会いしましょう。

☆謝らないでよ、コナンくん…☆

蘭おねーさんの背中で眠ってしまったコナン君に私は上着をかけてあげようと、蘭おねーさんに頼んだ。

“でも、歩美ちゃんが寒いわよ…”

“歩美は大丈夫…”

蘭おねーさんは歩美の心配をしながらも、歩美の位置まで座ってくれた。

コナン君の背中に歩美の上着をかけ終えた後、充彦君がコナン君の額に手を当てていった。

“さっきより、高くなってるみたいですよ…”

それを聞いて探偵事務所に急ぐ蘭おねーさんの後を追って歩美達もついて行った。

コナン君を寝室に運びいれ、布団に寝かせた蘭おねーさんはすぐに薬と水を取りにいった。

残された歩美達は、コナン君の顔を静かに眺めていた。病気が治って学校に登校出来るようになったコナン君だったけど、まだちゃんと治ってなくて、度々休みがちになっていたの。

それでも、無茶しちゃって今日、哀ちゃんに怒られちゃったけど、大丈夫だもん。コナン君ちゃんと反省してるから、きっと元気になるよ…。

しばらくして、薬を持って来た蘭おねーさんはコナン君の体を起こして、話しかけた。

“コナン君、ちょっと起きて…薬だけ飲んで…”

そういうと、やっと目を開けるコナン君は蘭おねーさんに支えられてやっと薬を飲んだ。

再び寝かせられると、目を半目に開いて何か言おうとしているようだった。そしてコナン君は蘭おねーさんの方を向いて、口を開いて言った。

“蘭…ねーちゃん……”

“何?コナン君??”

“明日、学校行ける??”

“うーん…どうかな。熱が下がれば大丈夫よ…”

そう言われたコナンくんは少し悲しそうな顔をしていた。そして蘭おねーさんに頭を撫でられながら、再び口を開いた。

“そんなに…学校行きたい?”

“……灰原に…謝らなきゃいけないから…僕、今日怒らせちゃったから…だから…”

“大丈夫よ…コナンくんが思ってる程、哀ちゃんは怒ってないから…そんな事気にしないで、早く熱下げようね…”

“……でも、早く言ってやらないと…あいつ気にするからぁ…明日学校行って…言ってやらなきゃ…いけないからぁ……”

そういいながら、薬が効き始めてコナンくんはゆっくり目を閉じ眠

りについた。そのあと、蘭おねーさんは私達の顔を見ると、にっこりしていった。

“さぁ、コナンくんはもう大丈夫だから…みんなもう帰ろう?”
“でも、心配だから…コナンくんが目を覚めるまで付いてる!”
“でも、びっくりしちゃうと思うよ?”
“大丈夫です。コナンくんが病気になってから、辛いことといっぱい見て来ました…今更驚きませんよ”
“それに、コナンの奴俺たちに謝るんだ…だから言ってやらなきゃいけない事あるからよっ”
“そう…じゃ、コナンくんが目を覚ましたら呼んでね?”

そういうと、蘭おねーさんは部屋を出ていった。

“うう…ううっ…”

暫くするとコナン君は薬の副作用で魘され始めた。身体を左右に揺らし苦しそうに布団を握り締めるコナン君の手を握って落ち着くのを待っていた。

暫くすると、苦しめていた副作用が落ち着いてゆっくり目を開け私達に気づいた。

“はぁー、はぁー…あっお前ら…いつから?”
“ずっといたよ…”
“じゃあ…見たのか…”
“えっ?”
“いや…”

何かいいづらそうにしているコナン君をよそに光彦君がいった。

“もしかして、薬の副作用ですか?”
“えっ?”
“大丈夫ですよ、コナン君…僕達わかってますから…そんな事、気にしないでください…”
“光彦…”
そんな光彦君の顔を驚きながら見ると、コナン君はゆっくり起き上がった。
“僕達は、こうやってコナン君と話が出来てるんですよ…もしあの時コナン君が手術を受けるのを拒んでいたら、こうやって話す事も出来てないんですから…”
“そうだぜ、コナン!!俺ら、友達なんだからな迷惑とか思うなよなっ”
そういう2人の言葉を耳にして、コナン君は微笑みながらそばに置いてあったお水をゆっくり飲んだ。
“ごめんな…俺、まだダメみたいなんだ…退院しても、暫く続くって…だから、お前らにまた余計な心配かけるかもしれねーでも、時期に治るって言われてるから…あんまり気にしなくて大丈夫だからさ…”
“もう…コナン君!謝らないでください!”
“そうだよ、コナン君!!私達友達なんだから!迷惑かけていんだよ”
コップを見つめながら話すコナン君を励ますけど、コナン君はまだ俯いたままだった。

私達は顔を見合わせた。ずっと病気と戦っていたコナン君だから…凹むのは分かるけど、それとは別に何かを抱えてる様にも思えた。

俯いたままだったコナン君は顔をあげ、私達の方を向くと…言った。

“明日、灰原に…謝っておいてくれねーか？明日いけるかわからねーからさ…”

“まだ、具合悪いんですか？”

“いや…熱は下がったんだけど…いつまた熱が出るか分からねーからさ…”

いいながら、コナン君は自分の手で額を触った。

“うん、分かった。コナン君が学校にこれなかったら、伝えておいてあげる…”

“悪いな…”

さっき光彦君に言われた事をもう忘れたみたいで、コナン君は私達に謝って来た。

“コナン君!!謝らないで!”

“また謝ったら、怒るぞコナン!!”

そうして、話し声が聞こえたのか…蘭おねーさんが顔を出した。

“コナン君!!良かった…うん、もう大丈夫そうね…”

“うん…”

蘭おねーさんはコナン君の額に手を当てると、笑いながら微笑んでいた。そんな様子を見ると、私達は帰る事を伝えた。

“えっ？もう帰っちゃうのか？”

と、コナン君らしからぬ言葉を聞きながら、私達はまたくるといい、探偵事務所をあとにした…。

☆謝らないでよ、コナンくん…☆（後書き）

沈黙の15分をみながら、
更新です☆

スペシャルエディションは
面白いですね☆

次回ヒント
原因

☆哀ちゃん……☆

あれから、一週間…彼は休み続けてる…精神的な問題なのか、体力的な問題なのか、分からないけど…私はただただ…彼の席を見つめていた。

“哀ちゃん…”

そんな様子に気づいた吉田さん達が私に声をかける…。

“本当はもっと早く言おうと思っていたんだけど…”

“何かしら?”

“あの日ね、コナン君…哀ちゃんの事気にしてたよ…ごめんねって言ってたよ”

“次の日行って謝らなきゃいけないって言ってたんだけどよ、あれから、熱が下がらねーみてーでよ…”

“灰原さん…お見舞いに行ってあげてくれませんか?灰原さんが怒るのも分からなくはないですけど…”

“怒ってなんかないわ…”

そういう私の態度をみて、不安な様子の三人に私はお見舞いに行く事を約束した。

帰り、私は蘭さんに電話をかけた。

“哀ちゃん!!”

“あの、江戸川君の具合どうかなと思って…”

“ねぇ、哀ちゃん！コナンくんのお見舞いに来てくれないかなぁ？”

あの子達と同じ事を言われた。私はあんな事があってから一度も行けずにいたから、今更行くというには少し勇気があった。

“コナン君、本当は学校に行って謝ろうとしてるんだけど、なかなか熱が下がらないからそれは出来ないのよ…だから、哀ちゃんのほうから来て欲しいの…”

“でも…”

“それに、先生も言ってたのよ…熱が下がらないのは、精神的な問題だろうって…強い薬を飲ませても、精神的な物があると効かないらしいの…だから…お願い…哀ちゃん！！”

そう言われ、私は江戸川君のお見舞いに行く事にした。

探偵事務所に到着すると、

すぐに蘭さんが出迎えてくれて、工藤君の寝室に通された。蘭さんが工藤君に声をかけ、私の存在を知らせると彼の目はゆっくり私を映し出した。

“ハァハァ…灰原…”

“何やってるのよ…待っててもちっとも来ないから、わざわざ来なきゃ行けない羽目になったじゃない！”

“灰原…ごめんな…あのさ…”

“聞いたわよ…吉田さん達から…別に、私気にしてないけど？勘違いしないでくれる？それに…怒ってないから…”

“違うんだ俺っ…ゴホゴホ…”

私に何か喋ろうとして咽せる彼に静かに、言った。

“何が違うのか、分からないけど…精神的な問題だろうって…先生言ってたそうね…”

“……”

“違うって…原因は私じゃなく、蘭さんだって言いたいのかしら？蘭さんは私が原因だなんて勘違いしてるみたいだけど…もし、心配される事に悪いと思って…目を背けるって言うのなら一体、どうすればいいのかしらね？それこそ、蘭さんに悪いと思わないのかしら？”

そういう私の言葉に目を背けた彼を私は叱った。

“目を背けるのはやめなさい！！！！”

“ゴホ…怒るなよ…”

“だったら、蘭さんに謝りなさい…怒られたくないのであれば…”

“……”

“ここにくる前から、わかっていたけど、やっぱり私が原因じゃなかった様ね…余計な心配させないでくれる？”

そういうと…私は立ち上がり、部屋を出た…。蘭さんが心配して私に訪ねて来たけど、私は平静を装って、仲直りしたと一言いって、探偵事務所をあとにした。

☆哀ちゃん……☆（後書き）

こんばんわ今日は夜中の
更新ですｗｗ

次回ヒント
蘭の心配

また明日
よろしくお願いします

☆ごめん、なさい☆

コナン君が熱を出してから一週間…一度熱は下がったけど…薬を飲ませても、ずっと熱が下がらないままだった。

“精神的…ですか?”

心配になった私は先生にコナンくんの様子を見にきてもらった。

“はい、薬を飲ませれば、熱は下がるはずなんですけどね…一応、安定剤を打っておきますので、また何かあったら、連絡してください…”

そういうと、寝てるコナン君の腕に注射をして帰っていった。

私はコナン君の頭を摩りながら、精神的な問題って何だろう?そう考えていた。

そういえば、コナン君…また私の目を見てくれてないな…私何かしちゃったのかな?

この間、哀ちゃんが来てくれて…熱は下がると思っていたのに、まだ下がらないって事は…もしかしたら、原因は私なんじゃないかと密かに疑問を抱いていた。

そんな事を考えていると、コナンくんが辛そうに目をあけた。

“コナンくん…”

“蘭ねーちゃん…ハァハァ…”

熱が下がらずに、辛そうに私を見るコナン君の瞳は次第に私から外された。

“コナン君…私、何かしちゃったかなぁ?”

“えっ??”

コナン君の心に抱えている精神的な問題が私だと思って聞いて見ると、コナン君は少し驚いている様子だった…。そして、私は再度口を開いた…。

“だって、ここんとこ…私の目を反らすんだもん…何かしちゃったのかなって、不安になっちゃうよ…熱が下がらないのは、私のせいよね…ごめんね、コナン君…”

“蘭ねーちゃん…”

私の気持ちを話しつつ、謝る私に対してコナン君はポツリと私の名前を呼んだ。

“私が、コナン君に対して何かしちゃったとしたら、その事で…コナン君に不安にさせてるとしたら、話して欲しいのよ…私は、どんな事でも、受け止めるから…”

“……”

私はコナン君の気持ちを聞き出そうと、一生懸命にコナン君を諭す様に話した。

“蘭ねーちゃん……僕、本当に良くなってるの?”

“えっ?どうして?”

“だって、蘭ねーちゃん……ずっと心配してる…僕を見る度ずっと、

哀しそうだから…だから、僕…”

そう言って哀しそうに目を反らしていた。そっか…だから、今までずっと…私の顔を見られなかったのね…心配な顔でコナンくんのこと見ていたから…。私が心配する度、悪化したと思い込んで…。ごめんね、コナンくん…。

私はそんな事を思いながら、冷却シートの上からコナンくんの額を撫でた。

“ごめん、ごめんね…コナンくん…違うのよ…コナンくんの身体はちゃんとよくなってるのよ…先生だって言っていたでしょ？ただ、心配で見てただけなのよ…コナンくんが気にする様なこと…何もないから…ごめんね…そんな思いさせちゃって…大丈夫だからね…”

“本当っ？…ゴホゴホッ…”

話す私の言葉を聞きながら、涙目になりながら、聞いてくるコナンくんのを見るととても可哀想で…熱を出しながらも私の表情に不安を駆られていたことに、私は居た堪れない気持ちでいっぱいになっていた。

“本当よ…当たり前じゃない…”

そういうとコナンくんは何かが吹っ切れた様に…泣きながら、謝って来た。

“ごめんね……蘭ねーちゃん…ぼく…ずっと、目をそらしちゃって…ごめんね…”

“コナンくん…”

そう言って、コナンくんの瞳からこぼれ落ちる涙を両手の親指で拭いながら、コナン君の目を見て微笑みながら言った。

“もう、コナン君…急に泣き虫になっちゃって…大丈夫よ…辛かったんだもんね…分かってるから…早く熱下げよ?”

“うん……ううっ…ゴホゴホッ…”

そう言って、コナンくんは泣きながら、眠りについた。

辛かった事を言いだせずに、こうやって自分の中に溜め込んじゃうコナン君に、私の心配はまだ消えなかった。

精神的に追い詰めてしまう私はこれから、どうしてあげればいんだろうと…ただ、コナンくんの眠った泣き顔を見ると…胸が締め付けられる思いがした。

ー翌日ー

私がそんな不安に駆られた翌日…私の心配なんてなかったかの様にコナン君の熱は下がり、元気になっていた。

“良かった〜熱下がったね…コナンくん!”

“うん、ごめんね…蘭ねーちゃん…”

そう言うコナンくんの頭を無言の笑顔を浮かべて撫でてあげた。

☆ごめん、なさい☆（後書き）

次回ヒント
灰原が求めたアレ

時間がない時は
ヒントだけになります

また明日の更新
お楽しみに☆

☆安静に☆

それから、俺はだんだんと体調を戻して行った。胸の内に秘めていた気持ちを表に出したせいか、精神的な事で倒れる事もなく…毎日元気に学校へ通う事が出来るまでに回復して行った。

灰原とも仲直りして、何とか…いつもの様な平凡な日常に戻っていった。

“大丈夫ね…いいわよ…教室に戻って”

“はーい”

朝、保健室で体温を測り終えると…俺はみんなのいる教室に戻っていった。

“おはよう、コナンくん!!”

“ああ…おはよう”

蘭から聞いたらしく、歩美達は俺に対して異常なまでの心配をする事がなくなり…俺は安心して席に着く。

そして、隣の席にいた灰原も…。

“聞いたわよ…心配されるのが嫌だったらしいわね?”

“えっ?ああ、まあな…”

俺は確かめる様な言葉で聞いて来た灰原に軽く返事をする。

“でもよかったじゃない?こうやって元気に学校来れる様になって

…”

“ああ…そうだな…”

“でも、気をつけなさいよ…今は落ち着いているけど、いつまた熱が出るか分からないんだから…それにまだ、油断できる身体じゃないのよ?…”

灰原に突つかれ、黙っていると…思い出したかの様に手をさしだされた。

“ところで、アレみせて?”

“アレ?ああ…これか?”

そういうと、俺は灰原に緊急カードを渡した。灰原はそのカードを見つめると俺の顔を見て言い聞かすように話した。

“これちゃんと持ってなさいよ…貴方の無茶苦茶な行動をこのカードが救ってくれるんだから…これ忘れたら、死ぬと思いなさい…”

“そこまでかよ?”

灰原は、最近の俺の行動に呆れている様で…尚も厳しく諭した。

“普通の人にはここまで言わないわ…破天荒な貴方だからいってるのよ…心配されたくないんでしょ?だったら、無茶な行動は控える事ね…”

“大丈夫だって…”

“…どうだか?”

呆れる灰原だったが、一呼吸置くと再度口を開いた。

“でも…珍しいわね…心配されたくないなんて…普通だったら、心

配されるの嬉しい筈なのに…いい事だと思うわよ？…身体が元に戻ってる証拠だと思うし…まぁ、余計な心配をされないためにも、身体の事大事にしなさい…”

そういう灰原に俺は驚き、一瞬微笑むと…頷いた。

帰り、久しぶりに博士の家に遊びに行こうという歩美、元太、光彦を筆頭に博士の家へ向かった。

“おかえり哀君…”

“ただいま…博士、叱ってあげてくれない？この破天荒な探偵さんを…”

そう言われ、歩美に押されながら玄関に入ると俺は博士に顔を向けた。俺の顔を見た博士は驚きながら、声をあげた。

“おお…久しぶりじゃのーどうじゃ？身体の具合は？”

“へーきへーき…”

自分の身体を軽くあしらう俺に灰原は呆れながら話す。

“博士…江戸川くんの意見に耳を貸さない方がいいわよ…彼の平気はアテにならないから…”

“おい、灰原……”

“あら？違うの？？”

“……”

そう言われ、黙る俺を促す様に連れられて博士の家にあがった。

暫く光彦達とゲームで遊んでる時、灰原に呼ばれた。

“はい、薬…飲みなさい！先生から預かってたの…栄養剤だから、心配しなくていいわよ…”
“ああ…サンキュー…”

そう言って、薬を飲んでいた時…元太達の視線を感じて振り向いた…。

“なんだよ？”
“いえ、別になんでもないです…”
“……”

そういうと、俺から視線をゲームの方に戻した。見兼ねた灰原が三人に詰め寄り、言い放った。

“貴方達ね…心配なのは分かるけど、江戸川君はもう大丈夫だから…余計な心配はしなくていいのよ…”
“でも……”
“悪いな…心配かけて…もう本当に平気だからさ…”

灰原の後に歩み寄る俺の言葉を聞きながら顔を見合わせる三人は俺に笑顔を作ってみせてくれ。

きっとこいつらも、ずっと俺の事心配していたんだろう。蘭から心配するなって聞かされても、心の奥では心配せずにはいられない…。

俺はそんなこいつらを見つめながら、随分心配かけた事を申し訳なく思っていた。

その後、明日は土曜日という事もあって皆でお泊りする事になった。

そして俺は蘭に連絡しようと電話をかけた。

“何言ってるの、ダメよ…まっすぐ帰ってらっしゃい…”

“えー、何で？いいじゃない！！”

暫く蘭と口論していた俺を皆が心配な眼差しで見ていた。見兼ねた博士が蘭と変わってくれ、話始めた…。

“何？まだ心配してるの？蘭さん…？”

俺と蘭の電話を耳にして心配する灰原に俺は何も言えずにいた。

“え？ああ、そうか…大丈夫じゃ、蘭君…すぐ帰すから…”

そう言って電話を切った博士はこっちへ向くと、厳しい表情になり話だした。

“これ、ダメじゃろう？先生に言われとったそうじゃないか？検診の日まで家で大人しくしとくようにって…”

“博士、本当なの？”

“ああ、朝も伝えたそうなんじゃよ…”

そう言われ、俺は皆の視線を集め朝の事を思い出していた。

“ああ、そういえば…”

“そういえばって、貴方ね…健康ノート見せなさい…”

そう言うと、差し出す俺の手から乱暴に受け取ると、健康ノートを見るなり怖い顔で言い放って来た。

“書いてあるじゃない！！検診が終わるまで安静にって！！”
“まぁまぁ、ちょっと忘れてただけだからさ～～”
そうなだめる俺を見ると、健康診断ノートを渡しながら笑顔を向けて言った。
“さあ、帰りなさい！江戸川君？？私の怒りが爆発しないうちにね…”
そう言う灰原の笑顔は大抵怖い。酷くならない内に俺は素直に帰る事にした。
“気をつけるんじゃぞ…”
“ああ、分かってるって…”
俺を送り出す灰原の視線が少し怖い感じにも見えたけど、皆が笑顔で見送ってくれていたから少し安心した。
探偵事務所についた俺は蘭から朝の話を聞き流し、健康ノートをみなかった事を指摘され注意された。
“ごめんなさい…”
“たくっ、何考えてんだてめーは！！”
“コナンくん、先生からの診断で大丈夫だったら、泊りに行ってもいいからそれまで大人しくしてるのよ？”
“はーい…”
蘭におでこを触らる…この感触ももう何回目だろう？こうやって帰る度に心配されなくなるのは…あとどの位先だろう？

そんな感情さえも抱いている俺に蘭は顔を覗かせる…。

“大丈夫だよ…気をつけるから…”

“そう…”

笑顔で言う俺の言葉に蘭は静かにつぶやいた。

☆安静に☆（後書き）

次回ヒント
再び

こんどこそ、
また明日ーーv

☆灰原と救急車☆

いつもの様に学校への門をくぐり、教室に行った。少し怠い感じがあったが、この間また灰原を怒らせてしまった事で休むわけには行かず、登校した。

“あっ、灰原…この間は悪かったな…”

“分かればいいのよ…”

相変わらず素直ではなかったが、そこまで怒ってる訳でもなかった灰原に、安心した。

難なく一日を終え、今朝の怠さが酷くなってる事に薄々分かってるつもりだったけど、学校から帰る途中だった為何も言わず探偵事務所までもう少しと言う道を歩いていた。

元太達三人と別れ、灰原と歩いてる時だった…。

一日我慢してた事もあり、俺は荒い呼吸と共に片手で壁に手をついてその場で立ち止まってしまった。

“はぁーーはぁーー”

突然立ち止まった俺を心配するかのように振り向く灰原…。驚きながら、近寄ってきておでこに手を当てると目を見開いて言った。

“ちょっと、こんなに熱あるじゃない…”

そういうと、通りがかったおねーさんが心配して近づいてきた。そ

のおねーさんは救急車を呼ぼうと電話をかけようとした時、灰原が俺の首に下がっていた緊急カードを見せた。

一瞬、おねーさんは目を見開いたが急いで救急車を呼んでくれた。

救急車を待つ間、俺はランドセルを頭にして寝かされた。そしておねーさんは上着を俺にかけてくれた。

2人の心配を感じながら、俺は意識が遠のいっていった。

気がつくと、救急車の中だった。俺の顔を心配な様子で見つめる灰原の姿があった。

“江戸川君!!”

“はぁーー、あっ…灰原…”

俺が気付いた事に安心していた灰原を見つめながら、口に装着させられた酸素マスクに気がついた。

息を吐く度曇るそれは、凄く久しぶりだった。もう、二度とつける事はないと思っていたのに、また俺の口を塞いでる事が俺は悔しかった。

“ぼうや、気がついたかい?もうすぐ病院に着くからね…”

“先生は?”

そうつぶやく俺に灰原がゆっくり口を開く。

“江戸川君…まだ救急車の中よ…先生は病院で待ってるから…もう少し頑張りなさい…”

“……灰原…ごめんな…また迷惑かけちまって…”

俺は灰原から目線をそらしながら謝った。

“私…迷惑なんて思ってないけど?”

“……ごめんな……”

灰原のその言葉が、俺を気遣って言ってると思って再度灰原に謝った。そんな俺を灰原は黙って見ていた…。

間もなく救急車は先生のいる病院に到着した。救急車が開くと同時に、連絡を受けたのだろう…先生は救急車の中で横たわっている俺に顔を覗かせた。

“先生…ごめんなさい…”

“いいんだよ、コナンくん…大丈夫だからね…状態はどうですか?”

俺を励ます様に言い聞かせたあと、先生は険しい表情になり救急隊員の人に顔を向けると聞いた…。

“さほど、異常は見られませんが…熱が高いのが心配ですね…”

“そうですか…じゃ、すぐ病室に運びましょう”

そう言って、俺が寝ているストレッチャーに手をやる先生の顔を見ると、俺は言った。

“ごめん先生…ぼく…今朝から調子悪かったんだ…”
“えっ?ダメじゃないか、そういう時は休みなさいってあれ程言っただろう?”
“でも、行かなきゃいけない事情があったんだ…”
その話を聞いた灰原が話に入ってきた。
“もしかして、私?”
そういう灰原の顔を見るなり、俺は言った。
“…お前、この間怒ってたし…もし今日休んだりしたら、きっと心配すると思ったから…だから…”
“ばかね…心配なんてしないから、安心しなさい…何度も言ってるけど、迷惑とか思わないでもらえる?そんな事思う方がよっぽど迷惑よ…”
“灰原…”
灰原の言葉に軽く笑みを浮かべた俺の様子を見ると、先生はストレッチャーを押して病室に向け動きだした…。
“コナンくん、大丈夫だよ…熱下がれば退院できるから…それまで暫くの辛抱だからね…”
ストレッチャーを押しながら、先生は俺に声をかける。
“先生…ぼく、また戻ってきちゃったね…”
そう言って悲しい顔をする俺に先生は何も言ってくれなかった。

☆灰原と救急車☆（後書き）

こんばんわ☆
寒くなりましたが、皆さんかぜひいていませんか??
風邪が流行ってきたので、気をつけてください＾＾

まだ、少し続くって
いつまで続くのかって思ってる人
多いいでしょうが、まだストックも
最終回を迎える事もできてません
というか、時間がなく、書けない時が
多くなり、ストックがそこをつきてる状況でｗｗ
書きたいんです☆でも毎日更新すると決めた事は貫き通したいので、
毎日更新出来る様に頑張っていきます。

いつも短いコメントですが、
たまには、いろいろかきたいと思いました。

皆さんも忙しいかもしれませんが、
私の小説は最後に読んでくれたら嬉しいです。

次回予告
灰原の照れ

次回もよろしくお願いします☆

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4168x/

☆君の笑顔が生きてる僕の証☆

2011年11月26日00時56分発行